

ルドルフ・シュタイナー

「精神的な探求における真実の道と偽りの道」

GA243

(トーケイ、ディヴォン、1924年8月11日 - 22日)

- 第1講 自然とは大いなる幻想である。「汝自身を知れ」
- 第2講 三つの世界とそれが映し出すイメージ
- 第3講 人間の意識状態に関係する鉱物世界の形態と実質
- 第4講 意識の変容による別世界への探究の秘儀
- 第5講 金属質の本性を通しての魂の内的な活性化
- 第6講 秘儀参入への認識、覚醒意識と夢の意識
- 第7講 星の世界の認識、人類の歴史時代の区別とその精神的な背景
- 第8講 精神的な探求において陥る可能性のある過ち
- 第9講 精神的な世界への異常な道とその変容
- 第10講 地球外宇宙が人間の意識に及ぼす影響
- 第11講 精神的な探求と精神的な探求の理解とはどのような関係にあるか？

第一講

自然とは大いなる幻想である。「汝自身を知れ」

この連続講義では、超感覚的な世界の認識へと導く道について話すように求められていますが、そのような認識と今日の輝かしい成功に導いたところの何年にもわたる忍耐強く勤勉な探求の果実である現象世界についての認識とは相補的なものです。と申しますのも、現実を理解できる人とは、自然科学や歴史科学によって私たちの知識のストックに近年になってつけ加えられた顕著な発見を精神世界から導かれた洞察によって補強することができる人だけだからです。

私たちが直面する外的世界とはいはれるところ精神的であるとともに物質的なものであるに違いありません。つまり、あらゆる物質現象の背後には、真の主人公である精神的な作用力が見出されるはずで、精神的なものは真空中で存在することはできません。何故なら、それは絶えず活動するとともに何らかの時と場所で物質的なものに活発に浸透するものだからです。

この連続講義では、私たちが住んでいるこの世界を、一方ではその物理的な環境についての考察を通して、また他方では精神的なものの知覚を通して、いかにその全体性において知り得るか、ということについて議論することを提案します。それによって、そのような認識を達成するための真の方法と偽りの方法について示したいと思います。

この連続講義の実際の主題に触れる前に、それらから何を期待できるのか、私が思い描いている目的とは何かについて皆さんが何らかの考えを持つことができるように、明日、その導入部分を手短にお話するつもりです。この連続講義はまず第一に私たちが、そもそも何故私たちは精神的な探求を手がけなければならないのか？何故私たちは思考し、感じ、実践する人間として、現象世界をそのまま受け入れるようになっていないのか？一体何故私たちは精神世界についての認識を達成するように努力するのか？という疑問を深く心に留めることに関係しているのです。この関連で、古くからの概念、つまり、人間が思考し、あこがれをもち始めた初期の時代から受け継がれ、今日でもなお私たちが世界の根底を探求するときに見出される諺に言及したいと思います。これらの古い、そして時代遅れの概念を基礎として用いるつもりは決してありませんが、そのような機会が生じたときにはいつでもそれらに対する注意を促したいと思うのです。

何千年の時を越えて東方からこだましてくるのは、私たちが私たちの感覚によって知覚する世界はマールヤ、大いなる幻想である、という諺です。そして、人間がその発達過程を通していつも感じてきたように、世界がマールヤであるとするならば、もしそうであるならば、彼が究極的な真実を見出すためには、彼は「大いなる幻想」を克服しなければなりません。しかし、何故、人間はこの感覚印象の世界をマールヤとして眺めてきたのでしょうか？何故、正に人間が今日よりも精神に近いところにいた太古の時代において、科学、宗教、芸術、そして実際生活の育成のために捧げられた秘儀の中心、つまり、純粹に外的な世界の中で大いなる幻想であったところのものに対置して、人間の認識と活動の源泉である真実と現実への道を指し示すことをその目的とする秘儀の中心が生じたのでしょうか？太古の聖なる秘儀の場所で彼らの弟子を訓練し、幻想から真実へと導こうとしたあの著名な聖人たちをどのように説明すればよいのでしょうか？この疑問に答えられるのは、より冷静に、より客観的な角度から人間を考察するときだけです。

「汝自身を知れ！」とは、過去の時代から私たちのところにやって来る別の古い諺です。これらふたつの、つまり「世界はマールヤである。」という東方の諺、そして「汝自身を知れ！」という古代ギリシャの諺が融合したことによって初めて、後の人類の間で、精神的な認識を目指す探求が開始されました。とはいえ、結局のところ、太古の秘儀の場所における真実と現実を目指す探求もまた、世界は幻想であり、人間は自己認識を達成しなければならない、というこの二重の概念の中にその起源を有していたのです。

けれども、人間がこの問題に取り組むとすれば、人生そのものを通して、つまり思考を通してだけではなく、意志を通して、そして私たちが人間として直接関わることができる現実への十分な参加を通してだけです。世界中の人間が自分に次のように言うことができるのは、十全なる意識をもってしてではなく、明確な理解をもってしてでもなく、ただ深い感情をもってそうすることができるだけなのです。「外的な世界とは、それを見たり聞いたりすることはできるが、おまえはそれになることができない、そのようなものなのだ」と。

この感情は深いところから来るものです。「おまえがおまえの五官で感じることはできるけれども、それになることはできない外的な世界とはそのようなものなのだ」という言葉が示唆するところのものをよく考えてみなければなりません。植物を見ると、最初に緑の芽が春に出て、夏には花が咲き、秋に向かって熟し、実を結びます。私たちは植物が生長し、衰え、枯れるのを、つまり、その一生が一年の間に繰り返されるのを見ます。私たちはまた、多くの植物がその幹を構成するある一定の物質をいかに土壌から吸収するかを見ます。私たちは昨日の夕方ここに来る道すがら多くの非常に古い植物を見ましたが、それらの植物は、その一生が一年間に限られるのではなく、より長い期間へと拡張され、それによってその茎の上に新しい成長点を産み出すことができるように、このような硬化させる物質を多量に吸収したのです。そして、これらの植物がいかに生長し、衰え、枯れるかを観察するのは人間なのです。

そしてまた、人が動物を観察するとき、彼はそのはかなさに気づきます。それは鉱物界についても同じです。彼は雄大な山々の連なりの中で鉱物が堆積するのを観察します。そして、彼が身につけた科学的な知識によって、それらもまたはかないものであることに気づきます。そして、彼が最終的によりどころとするのは、例えば、プトレマイオスやコペルニクスの体系のような概念、あるいは古代の秘儀やより最近の秘儀から借りてきた何らかの概念です。そして、彼は次のように結論づけます。私が星々の驚異の中に見るあらゆるもの、複雑で驚くべき軌道上にある太陽や月から私に光を投げかけるあらゆるもの、これらすべてもまたはかないものである、と。けれども、そのはかなさとは別に、自然の領域はその他の属性も有しています。それらは、もし人間が自分自身を知るべきものであるとすれば、彼はすべてのはかないもの、つまり植物、鉱物、太陽、月、そして星々と彼とが同様に構成されていると仮定すべきではない、と。いうことができるような種類のものであります。

そして、人間は次のような結論に至ります。私は私の中に、私が私の周りに見たり聞いたりするいかなるものとも異なるある性質を有している。私は私自身の存在を理解するようにならなければならない。何故なら、私は私という存在を私が見たり聞いたりするいかなるものの中にも見出すことができないのだから、と。

人間はあらゆる古代の秘儀の中で、彼ら自身の存在の現実性を見出したいというこの衝動を感じる一方で、空間と時間の一時的な現象は大いなる幻想の表現であると感じられていました。そして、だからこそ、人間の内的な存在の理解に至るために、彼らは感覚知覚を越えて見出されるものに眼差しを向けたのです。

そして、彼らはそこで精神世界を経験しました。精神世界への正しい道をいかにして見出すかがこの連続講義の主題となります。人間は現象世界を探求したときに採用した過程と同じ過程を辿ろうとするだろう、ということは容易に想像できます。彼は感覚的な知覚方法を単純に精神世界の探求へと移すかもしれません。けれども、もし現象世界の探求が幻覚に満ちているのが普通であるとすれば、現象世界を探求するための方法を精神世界にも適用するとすれば、幻覚の可能性は減少するのではなく増加することになるでしょう。そして、これは実際に起こることです。その結果、私たちはそれだけよけいに幻覚の犠牲になります。

そしてまた、もし私たちがはっきりしない期待、漠とした熱狂、魂の暗い片隅からわき上がる説明のつかない予感や精神的なものについての夢のような幻想を心に抱くとすれば、それは私たちには永遠に見知らぬものに留まるでしょう。私たちは憶測の世界に留まり、信仰にあずかることはあっても、本当の知識を持つことはありません。もし、私たちが単純にこの道を採用することで満足するならば、精神的なものをよりよく知るのではなく、ますますそれが分からなくなります。こうして人間は二重にさまようことになるのです。

精神世界と現象世界に対して同じ探求の道を追求することに関しては、現象世界が幻想であることに気づくとしても、もし普通の精神主義者がときとしてそうするように、精神世界に対して現象世界に対するのと同じ方法で接近しようとすれば、ますます大きな幻想に陥ることになります。

他方、別の道にしたがって接近することもできます。この場合には、はっきりと明瞭な線に沿ってではなく、勝手な思いこみや漠とした熱狂によって精神世界を探求するのですが、当然のことながら精神世界は閉じられた本のままです。はっきりしない憶測や感情的な熱狂の道をどんなに熱心に追求しても、精神世界のことはますます分からなくなるのです。まず第一に幻想が増幅され、第二に無知が増幅されるからです。これらふたつの偽の道に対して、私たちは正しい道を見出さなければなりません。

私が述べたような意味での大いなる幻想についての知識を真の自己認識で置き換えるのは、いかにほとん

ど不可能なほど困難なことであるかを、さらに言えば、たとえ精神的なものを理解するための真正で本物の道に向けて準備するつもりではあっても、幻想に陥っている状態ではそのような真の自分についての漠とした感情のすべてを克服し、現実の明確な知覚に至るのはいかに不可能なことであるかを心に留めておかなければなりません。このことが何を意味しているかを偏見なく眺めてみましょう。唯物論者はダーウィン、ハクスレー、スペンサー、あるいはその他の人々による最近の科学上の発見に対して精神世界についての洞察を有している人が感じるほどの深い賞賛と尊敬の念を感じることは決してないでしょう。つまり、これらの人々やジョルダノ・ブルーノ以降のその他の人々は、古代の神秘家たちがマーヤの世界と考えたところのものについての洞察を得るために惜しみない努力をしたのです。とはいえ、ダーウィン、ハクスレー、スペンサー、コペルニクス、ガリレオやその他の人々によって持ち出される理論を受け入れる必要はありません。彼らのしたいように宇宙を理論づけさせておきましょう。彼らの議論に引き込まれる必要はないのです。けれども、私たちはこれらの人々が示した人間、動物、そして植物の中に見出される特定の器官や鉱物界に関する何らかの特別な問題についての詳細で事実即した探求への途方もない衝動を認めないわけにはいきません。彼らの刺激的な探求の結果、腺組織、神経、脳、肺、肝臓等々について、近年いかに多くのことが知られるようになったかをひとつ考えてみて下さい。彼らは最高度の尊敬と賞賛に値します。とはいえ、実生活において、この知識は私たちをただある一定の地点にまで連れて行くに過ぎません。これがどういうことを示すために三つの例を上げてみましょう。

私たちは人間の最初の卵細胞が胎児へといかに徐々に発達していくかを、いかに様々の器官が段階を追って展開するかを、そしていかに周辺部の小さな器官から複雑な心臓や循環システムが構築されるかをどこまでも詳細に追っていくことができます。このすべてを示すことができます。私たちは植物の有機的な発達を根から花、そして種へと追っていくことができ、そしてこの事実に基づいた情報から全宇宙に適用される宇宙理論を構築することもできるのです。

私たちの天文学者や宇宙物理学者たちは既にそうしています。彼らは、自律的な発生が可能な星雲系が段階を追ってより明確な形態を取ることによって、いかに世界がそこから現れるかを示す宇宙理論を打ち立てました。しかし、このすべての理論立てにもかかわらず、私たちは人間の本質的な存在に対して、つまり「汝自身を知れ」という定言に対していかに応えるか、という問題に結局は再び直面することになります。もし、私たちが、ただ鉱物、植物、動物、人間の腺組織や循環系に関する知識に限定されるところの自分だけを知っているとすれば、私たちは人間が誕生に際して入り、死に際して離れる世界だけを知っていることになります。しかし、結局のところ、人間は、自分は一時的な世界に限定されてはいない、と感じているのです。ですから、外的世界についての知識がこれほどの壮大さと完成度をもって産み出すすべてのものを前にして、彼はその存在の奥底から、このすべては誕生から死までの間に限って肯定することができる、と答えざるを得ません。しかし、皆さんは本質的な自分、皆さんの真の本質を知っているでしょうか？その諸器官をもってしては単に大いなる幻想の世界だけしか理解できないところの人間は、人間や自然についての知識が道徳的、宗教的なものとの関わりを持つ瞬間、沈黙せざるを得ないのです。「汝自身を知れ、汝いずこより来たりて、いずこへと去るか、汝の最奥の存在において知るために」という定言、この認識の問題に対しては、宗教との関連が持ち出される瞬間、この限定的な理解度をもってしては答えることができないのです。

弟子が秘儀の学院に入るにあたって確信させられたのは、宗教が問題になるときは、感覚的な観察を通していかに多くのことを学ぼうとも、その情報は人間の本性に関する大いなる謎に対し、いかなる答えも与えはしない、ということでした。

さらに言えば、私たちは、人間の頭部の構造について、人間の腕や手の特徴的な動きについて、彼の立ち居振る舞いについていかに正確な知識を持っていたとしても、あるいは動物や植物の形態に関しては、感覚的な観察を通してそれらを知ることができるだけであることから、それほど敏感に反応することはできないとはいえ、それらの情報に対して芸術的な表現を与えようとする瞬間、再び答えることのできない問題に直面することになるのです。

これまで人間は世界についての彼らの知識をいかに芸術を通して表現してきたのでしょうか？彼らはそのインスピレーションを秘儀の教えに負ってきたのです。自然やその様々の側面に関する彼らの知識はその時々理解の水準に関係していましたが、同時にそれは精神的な洞察によって豊かなものにされてきました。

それは古代ギリシャを振り返ってみるだけで分かります。今日、彫刻家や画家はモデルを使って仕事をします。少なくとも最近まではそうでした。彼はコピーあるいは模倣に取りかかります。ギリシャの芸術家たちもそうした、と言われてはいますが、そうではありません。彼はむしろ精神的な人間の形態を自分の内に感じ取ったのです。彫刻において、もし彼が腕の動きを表現したいと思ったとすれば、彼は、外的な世界は精神的な内容によって満たされており、あらゆる物質的な対象物は精神から創造されたのだ、ということを知っており、彼の作品の中で精神を再構築しようと努めました。

ルネッサンスの時代に至ってさえ画家はモデルを使いませんでした。それは単に刺激を与えるためにだけ奉仕しました。彼は何が腕や手を動かすのかを先験的に知っていたのです。彼が示す動きの表現にこのことが見て取れます。単に外的なものやマーヤの世界を皮相的に表現しても私たちの理解を前進させることはありません。私たちはそうすることによって深く人間を見るのではなく、単に外的なもののみに関わり、そしてそのことによって人間の外にいる傍観者のままに留まります。

芸術の観点から言えば、もし私たちがマーヤの世界を超越することに失敗するならば、私たちは人間本性に関する恐るべき問題に直面し、私たちにいかなる答えも与えられないでしょう。

そしてここでも、古い秘儀に参入しようとする弟子に対し、その参入に際して、もしお前がマーヤの世界の中に留まるならば、お前は人間やその他のいかなる自然領域の本質的な存在にも貫き至ることはできない、お前は芸術家になることはできないのだ、ということが明らかにされました。芸術の領域においては、「汝自身を知れ」という明確な定言を弟子に思い起こさせ、その後で精神的な知識の必要性を感じ始めさせる必要がある、ということが知られていたのです。

けれども、皆さんは、全く唯物的な彫刻家もいるではないか、と反論されるかも知れません。いずれにしても、彼らは単なる素人ではなく、自分たちが何をしようとしているのかを知っていました。彼らはまた、どうすればモデルから秘密を引き出すことができるのか、そして、どうすれば彼らの人物像や題材にその秘密を付与することができるのかを知っていたのです。それは本当にそうなのですが、彼らはどこから彼らの認識を導き出してきたのでしょうか？この能力が芸術家自身からやって来るのではない、ということに人々は気づき損ねます。彼らは自分たちより前の芸術家たちにそれを負っていたのですが、その芸術家たちもまた、その先駆者たちからそれを受け継ぎました。彼らは伝統に基づいて働いたのです。けれども、彼らはこのことを認めたりません。何でも自分でやったと主張したいのです。彼らは古い巨匠たちがいかにそれらを模倣し、制作したかを知っていました。しかし、最も初期の古い巨匠たちは彼らの秘密を秘儀の精神的な洞察から学んだのです。ラファエロやミケランジェロは、まだ秘儀に頼ることができた人たちからそれを学びました。

けれども、真の芸術は精神から創造されなければなりません。他に方法はありません。私たちが人間の問題に触れるやいなや、大いなる幻想の知覚は人生の諸問題、人間の運命についての問に対する答えにはならないのです。もし、私たちが芸術と芸術的な創造の源泉へと遡るべきであるならば、私たちは精神世界への洞察を再発見しなければなりません。

さて、第三の例ですが、植物学者や動物学者は入手可能なあらゆる植物の形態についてのすばらしく詳細な知識を得ることができます。生化学者は植物体の中で起きている過程を記述することができます。新陳代謝系の中でいかに食物が消化され、血管によって栄養管の壁の中へと吸収され、さらに血液によって神経系へと運ばれるかを述べることもできます。優秀な解剖学者、生理学者、生物学者、あるいは地質学者はマーヤの世界の広い範囲をカバーすることができるのです。しかし、もし彼がその知識を治療や医療の目的に使うとするならば、もし彼が人間の外的な構成から、あるいは内的な構成からさえ、彼の本質的な存在へと押し進もうとするならば、それは不可能です。

皆さんは次のように応えるかも知れません。けれども、唯物論者であり、精神世界には何の興味も持たない医者もたくさんいる。彼らは自然科学の方法にしたがって患者を処置し、そしてそれでも結果を出しているのではないかと。

それは確かですが、彼らに治療ができるのは、彼らもまた古い世界観に基づく伝統の上に立っているからなのです。古い治療法は秘儀から導き出されました。そして、それらはすべて顕著な特徴を有していました。皆さんが古い処方箋を見るならば、それが大変に複雑なものであることが分かるでしょう。それを処方し、伝統によって規定された特定の目的のためにそれを用いる人にはかなりのことが要求されます。もし、皆さんが昔の医者のところに行って、そのような処方箋はどのようにして作られるのですかと訊ね

たとすれば、彼は、まず私は化学実験を行います、そしてその物質があれこれの方法で振る舞うかどうかを確かめ、それからそれを患者に適用し、その結果を書き留めるのです、とは決して答えなかったでしょう。彼にはそのようなことは思いもよらぬことだったでしょう。人々は以前の時代にはどのような状況が卓越的であったかについて、いかなる考えも持ち合わせていません。彼は次のように答えたいでしょう。私は秘儀の教えに基づいて設置された実験室（と呼べるかどうか分かりませんが）に住んでいます。そして私が処方箋を思いついたとき、私はそれを神に負っているのです、と。彼の立場はこの点について、つまり、彼が彼の実験室の中に醸し出された雰囲気全体を通して精神世界と密接に交流しているという点について、全く明確なものでした。彼にとって精神的な存在がそこに居るということは私たちにとって人間がそこに居ると同じくらい間違いのないことだったのです。彼は精神的な存在の影響を通して、より高い存在の次元を達成しており、それ以外の方法で可能であったであろうよりも多くのことを達成することができる、ということを知っていました。そして、彼は自然認識からではなく、神の口述にしたがって、そのこみ入った処方箋の作成へと進んだのです。秘儀の学院では、人間を理解するためには、マヤの世界と自分とを同一視するのではなく、神的世界の真実へと押し進まなければならない、ということが知られていたのです。

外的な世界についてあらゆる知識を有しているとはいえ、今日の人間は秘儀から導き出された知識を有していた昔の人々に比べて神的世界の真実からよりかけ離れたところにいます。再びそこに戻る道が見出されなければなりません。

三番目の例から明らかなのは、私たちが治療法を追求するとき、たとえ可能な限り幅広い自然についての知識（つまり、マヤの世界についての知識ですが）を有していたとしても、私たちは再び人間の生と運命についての未解決の問題に直面することになる、ということです。私たちがいくらマヤの立場、大いなる幻想の立場から人間を理解しようとしても、あるいは治療の目的のために要求される「汝自身を知れ」の立場から理解しようとしても、私たちは私たちの理解において一歩も先に進めないでしょう。

ですから、私たちはこれらの例に照らして次のように言うことができます。マヤの世界と「汝自身を知れ」の間にあるギャップに橋を架けようとする人が、あるいは宗教的な感情を持って、あるいは創造的な芸術家として、あるいは治療家や医師として人間にアプローチするとき、もし彼の唯一の出発点が幻想の世界であるとすれば、彼はその瞬間に自分が無の前に立っていることに気づくであろう、と。彼は、マヤ、すなわち大いなる幻想についての知識であるところの外的な自然についての知識を超越する知識の形態を見出さない限り、無力なのです。

さて、秘儀の精神から世界の包括的な認識に至ることを求める方法と今日それが試みられているところの方法とを比較してみることにしましょう。そのことによって、この包括的な認識へと導く道との関係で、私たちは私たちの方向性を見出す位置に立つこととなります。

数千年前、世界とその神聖な基盤あるいは本質については、今日、権威ある人々がそれについて語る方法とは非常に異なった方法で語られました。近東の秘儀において崇高で壮大な知識が栄えたあの数千年前の時代を振り返ってみましょう。その知識の特徴を簡潔に記述することにより、その本性をより綿密にのぞき見てみたいと思います。

古代カルディアにおいては、次のようなことが教えられていました。人間の魂の力がその最大限の可能性を引き出されるのは、彼が眠りの生活（彼の意識がぼんやりとしたものになり、周囲の世界が忘却のあなたにあるとき）と目覚めているときの生活（彼が明確な視力をもって周囲の世界を意識しているとき）との素晴らしい対比に精神の目を向けるときである、と。数千年前には、これらの交互に入れ替わる眠りの状態と目覚めの状態は今日とは異なった仕方で経験されていました。眠りは今ほど無意識的なものではなく、目覚めているときの生活は今ほど十分に意識的ではありませんでした。人は眠っている間、力強く、絶えず変化するイメージ、世界の生きた流れや動きを意識していました。彼は神聖な基盤、宇宙の本質に通じていたのです。

眠っている間に意識がかすむのは人間が進化した結果です。数千年前には、起きていたときの生活は今日そうであるように明確ではっきりしたものではありませんでした。対象ははっきりと規定された輪郭を持っておらず、ぼんやりとしていました。それらは精神的な特質を様々な形で放射していました。現在のそのような眠りの生活から目覚めの生活への不意の移行は存在しませんでした。当時の人間たちは、まだこれらふたつの状態を識別することができたのです。そして、彼らが目覚めている間の生活環境は「アプシュ

ー」と呼ばれました。眠っている間に経験される生きた流れと動き、つまり目覚めの生活において鉱物、植物、そして動物の間の明確な区別を曇らせる領域は「ティアマート」と呼ばれました。さて、カルディアにおける秘儀の学院では、人間が眠っている間、ティアマートの流れと動きにあずかるとき、彼は鉱物や植物、動物たちのただ中で意識的な生活を送っているときよりも真実や現実のより近くにいる、ということが教えられました。ティアマートはアプシューに比べて世界の基盤のより近くにあり、人間の世界とより密接に関連していたのです。アプシューはもっと離れたところにありました。ティアマートはより人間に近いところにある何かを表現していたのです。けれども、時がたつにしたがって、ティアマートは変化を被りました。そして、秘儀の学院で学ぶ弟子たちにこのことが知らされました。ティアマートの生きた流れと動きの中から悪魔のような形をしたもの、人間の頭に馬の体をもったものや天使の頭に獅子の体をもったものが現れ出たのです。それらはティアマートが織りなすものの中から生じ、人間に敵対するようになりました。

そして、力強い存在、イアが世界に出現しました。今日、音を聞く耳を持っている人は誰でも、いかにこのふたつの母音のつながりがあの力強い存在を指し示しているか、を感じることができます。つまり、これらの古い秘儀の教えによると、ティアマートの悪魔が強力になったとき、人間を助けるためにその側に立ったあの存在を指し示す、ということなのです。イア（E A）あるいはイア（I A）は、後に - もし、「ソフ（Soph）」という接頭語を予期するとすれば、ソフ - イア（Soph - Ea）、ソフィア（Sophia）になりました。イアのおよその意味は抽象的な叡知、あらゆるものに浸透する叡知です。ソフは（大体においてですが）存在状態を示唆する小詞です。Sophia、Sophea、Sopheia、すなわちすべてのものに浸透する、どこにでも存在する叡知が、当時はマーダックとして知られており、後にミカエルと呼ばれるようになった彼女の息子を人間に使わしました。彼は天使の位階から権威を付与されていました。叡知であるイアの息子マーダックと同じ存在 - マーダック - ミカエルです。

秘儀の教えによると、マーダック - ミカエルが偉大で強力であったために、すべての悪魔的な存在、人間の頭を持つ馬や天使の頭を持つ獅子の形をしたもの - これらすべての波打ち、うごめく悪魔の形をしたものたちは強力なティアマートとして合体し、連合して彼に対抗しました。マーダック - ミカエルは十分に強力であったために、嵐に命じて世界中に風を吹き荒れさせました。ティアマートが体現していたものすべては生きた現実のように見えたが、人々はそれをそのように体験したのであって、正しくそのように見えたのです。これらすべての悪魔たちは敵として、すなわちティアマート、夜から生まれたすべての悪魔的な力を体現する強力なドラゴンとして思い描かれました。そして、この怒りの火を吐くドラゴン存在がマーダックの前に進み出ました。ミカエルは初め、様々の武器でそれを打ちのめし、ついで彼の嵐のような力のすべてをその内臓へと送り込んだために、ティアマートはバラバラに砕けて飛び散りました。そして、そうすることによって、マーダック - ミカエルはその中から上なる天と下なる地を創造することができました。こうして天と地が生じたのです。

秘儀の教えとはこのようなものでした。イアの長男、叡知がティアマートに打ち勝ち、その一部から上なる天を、別の一部から下なる地を作り出したのです。そして、もし皆さんが皆さんの目を星星に向けるならば、ああ、何ということでしょう、皆さんが見るのは、あのティアマートの恐ろしい深淵からマーダック - ミカエルが人類のために天に造り出したものの一部なのです。そして、もし皆さんが鉱物化された地球から植物が生え、鉱物が形成され始める下方を見るならば、そこにはイアの息子、叡知が人類のために再創造した別の部分が見出されず。

こうして、古代カルディア人たちは世界の形成期を、つまり、無形から形が形成された時代を振り返りました。彼らは創造の工房を覗き見るとともに、生きた現実を知覚したのです。これらの夜の悪魔たち、これらすべての夜に出没するモンスターたち、すなわち織り成し波打つティアマート存在たちはマーダック - ミカエルによって上なる星星と下なる地球に変えられたのです。太古の人々がその古い魂の属性を通して彼らのところにやって来たすべてのものを表象したのはこのような形態において、つまりマーダック - ミカエルによって輝く星星に変えられたあらゆる悪魔たち、変化したティアマートの皮と組織として地球から生え出るあらゆるものにおいてでした。そのような情報を彼らは知識と考えたのです。

また、秘儀の祭司たちは彼らの弟子たちが示す魂の力を研究することによって未来を予想しました。そして、弟子たちが十分な魂の力を発達させたとき、彼らは、今日では子供たちが学校で最初に教えられるような基礎的な科目 - 地球は太陽の周りを回る、宇宙は星雲から形成される、というようなことを理解する

位置に立ちました。当時、このような知識はしっかりと守られるべき秘密とされていたのです。他方、公然と教えられていたのは、今、私が皆さんに話したマーダック - ミカエルの行為等についてでした。今日、私たちの学校や大学では - そこでは秘密を守ることが要求されることもありません -、そして小学校においてさえ、コペルニクスの体系や宇宙物理学が教えられます。しかし、太古の時代においては、そのような課題にあえて取り組んだのは、あるいは取り組むことを許されたのはただ聖人たちだけであり、それも長い準備を経た後でだったのです。今日では学校の教科になり、どの小学生も知っているこのすべてを学ぶことができたのは、当時は秘儀参入者たちだけでした。

古いカルディアの時代からさらに時代を溯れば、人々は私がお話したようなこと、つまり、イアやマーダック - ミカエル、アプシューやティアマートについてだけを語りました。彼らはこれらの「風変わりな」秘儀の教師たちが星や太陽の動きについて教えるあらゆることを毛嫌いしました。つまり、彼らは見えないものではなく、古い超感覚的な能力を通して明らかになったところの、個人化され象徴化された形態においてとはいえ、明確に見ることができるものだけを探求することを望んだのです。彼らは秘儀参入者であった古い教師たちやその弟子たちが獲得していた知識を拒絶しました。その後、太古の叡智が東から徐々に広まり、重視される時代がやって来たのです。精神世界の存在たちによる顕現、例えばマーダック - ミカエルの行い等について多くの蓄積がなされましたが、同時に、図式的に表すことができるもの - 太陽が中心にあり、惑星がその周りを円や楕円を描いて回転することなども重視されました。そして、時の経過の中で、精神世界、すなわち悪魔や神々の世界についての洞察が失われ、理知的な知識、すなわち今日私たちがあれほど誇りにし、私たちの時代が始まった頃にその絶頂に達した知識が育成されました。私たちは今や、ちょうど精神的なものが自明であった人々によって現象世界が拒絶されたように、精神的なものが拒絶される時代に生きているのです。私たちは、天文学者や天体物理学者、動物学者や植物学者が教えるところのものと並行して、再び精神的な洞察から導き出される精神的な現実についての知識が受け入れられる時代を見越す立場にあるべきです。その時代は今や差し迫ったものであり、もし、私たちが私たちの使命を成し遂げ、とりわけ、芸術の宗教的な源泉と芸術としての治療を再び見出すべきであるならば、そのための準備をしてそれを迎えなければなりません。

太古の時代においては、精神的なものが人々の間で受け入れられ、物質的な世界が拒絶されましたが、逆に、物質的なものが育成され、精神的なものが抑圧される時代がそれに続きました。ちょうどそのようにして、今や私たちの外的な世界についての広範で包括的な知識が、そしてそれは十分尊敬に値するものなのですが、秘儀の教えについての新たな知識へと変容させられるべき時代が来なければなりません。今日の物質的な科学によって古代の壮大な精神性が、せいぜい私たちが発掘するいくつかの断片を残して、その構造から引き裂かれた今、私たちは再び精神性を見い出さなければなりません。ただし、私たちが過去の時代の歴史を詳しく検討するとき、私たちが光を当てるあらゆるものについての十分で明確な理解が必要です。宗教的な感情に染められた新しい創造的な芸術を通して、新しい治療芸術を通して、そして人間存在へと浸透する新たな精神の知識を通して、私たちは再び精神へと返る道を見つけなければならないのです。

世界の基盤と原則をその全体性において理解させ、偏狭な唯物主義者ではなく完全に統合された人間として仲間の幸福と啓蒙のために働く人間についての理解を私たちに与えることができる場所の秘儀を、私たちが新たなものにすべく努力することができるように、という希望をもって、今日は、これら三つの例を皆さんにお示しました。

第二講

三つの世界とそれが映し出すイメージ

もし、私たちが精神的な探求についての理解を発展させたいと望むならば、私たちはまず第一に、人間の魂が経験することができる様々な意識状態についてのはっきりとした考えを有していなければなりません。今日、地上における通常の生活において、人間ははっきりと規定される意識を享受していますが、この意識は、彼が目覚めと眠りの間に明確な区別を経験する、という事実によって特徴づけられます。それは時間的には一致しないとはいえ、およそ太陽が地球の周りを一周すると想像した場合の長さ、つまり地球がその軸上で一回転する長さに対応しています。とはいえ、現時点では、この対応はある程度遮断されています。生活システムが秩序立っていたそれほど遠くない過去を振り返ってみるならば、人々はおよそ日の出から日の入りまで働き、日の入りから日の出まで眠っていた、ということが分かります。

今日、この秩序だったあり方は部分的に損なわれています。実際、私はその生活習慣を逆転させていた人々を知っているのですが、彼らは昼間眠り、夜起きていました。私はよくその理由を尋ねたのですが、その多くが詩人や作家であった当の人々は次のように答えたものです。それは仕方がないです、そういったことは文学的な執筆活動とは切り離せないものですから、と。とはいえ、私が夜、彼らに出会ったとき、彼らが詩を書いているのを見たことは一度もありません！

さて、私が強調したいのは、今日の意識にとって最も重要なのは、私たちが昼間あるいはそれに対応する時間帯に起き、暗い間に相当する時間帯に眠る、ということです。多くの事柄がこの意識形態に結びついているのですが、中でも私たちが感覚知覚に特別な価値を置くということ、つまりそれらが私たちにとっては第一義的な現実になる、ということがそれに結びついています。とはいえ、感覚知覚から目を思考に転じるときには、私たちはそれを感覚知覚という現実を欠いたそのかすかな反映として眺めます。

今日、私たちは椅子をひとつの現実とみなします。皆さんはそれを床の上に置くことができますし、それが立てる音を聞くこともできます。皆さんはそれの上に座ることができるのも知っています。けれども、椅子という思考は現実的なものとはみなされません。思考が頭の中に位置していると信じて、それをばんと叩いたとしても、皆さんには何も聞こえません。皆さんは椅子という思考の上に座ることができるとも信じていませんが、そのように信じることは現時点での人間の構成からすると正しいことなのです。このホールの中に単に椅子という思考だけが備えつけてあったとすれば、皆さんはあまりうれしくないでしょう！

そして、その他の多くのことがこのように太陽の軌道周期に関係した意識を経験することと結びついているのです。その生活パターンが秘儀によって、例えば、昨日お話ししたカルディアの秘儀によって秩序づけられ、方向づけられていた人々にとっては状況は異なっていました。それらの人々は今日の意識とは非常に異なった意識レベルで生活していたのです。

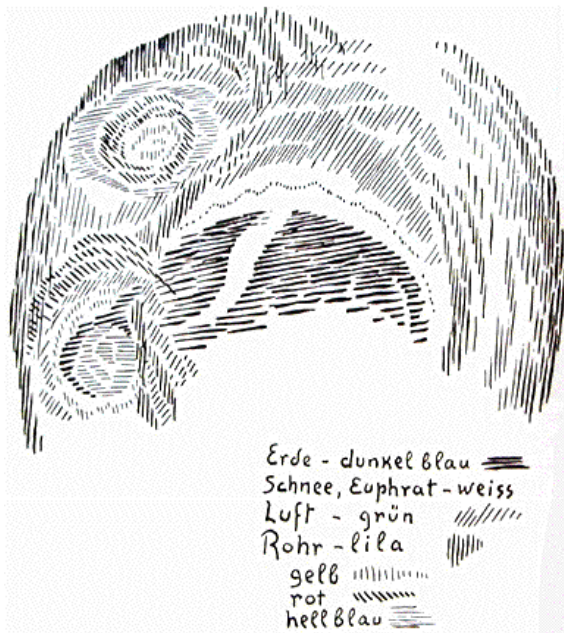
少し卑近な例によってこの違いを描き出してみましよう。私たちの暦によると、一年には365日が割り当てられています。とはいえ、これは全く正確というわけではありません。もし、私たちが一世紀の間、一年を365日で数え続けるとすれば、私たちはそのうち太陽の歩調から逸脱してしまいます。私たちは太陽の位置に追いつけなくなるのです。そこで、私たちは四年ごとに一日を挟みこみます。こうして、私たちは比較的長期間にわたっておよそその一致を取り戻します。

非常に古い時代、カルディア人たちはこの問題にどのように対処していたのでしょうか？彼らは長い間、私たちの方法に似た計算方法を用いていたのですが、彼らはその方法に別のやり方で到達しました。彼らは一年に360日を割り当てていたのですが、そのため、六年おきにまるまる一ヶ月を挟みこまなければなりません。一方、私たちは四年ごとに一日をつけ加えて、閏年として計算します。ですから、彼らの場合、それぞれが一二月からなる六年間の後、一三ヶ月からなる年がそれに続いたのです。

現代の学者たちはこの事実を記録し、確認しました。しかし、彼らはこの年代的な違いが人間の意識に関する奥深い変化に結びついていることに気づきません。四年ごとに余分な一日を置く代わりに、六年おきに一ヶ月を挟みこんだこれらのカルディア人たちは私たちとは全く異なる世界観を有していたのです。彼らは昼と夜の違いを私たちと同じようには経験しませんでした。昨日触れましたように、彼らの昼間の経験は私たちの経験のように明確で生き生きとしたものではありませんでした。もし、私たちのように現

在の意識を持った誰かがこのホールの中に入ってきて周囲を見回したとすれば、もちろん彼はここにいる聴衆を、何人かは近くに一緒にいて、別の人々は遠く離れている等々の違いはあっても、明確に規定された輪郭を持つ人々として見ることでしょう。

カルディアの秘儀からインスピレーションを受けていた人々の間ではそうではありませんでした。当時、彼らは、例えば、座っている人物を今日私たちがその人を見るようには見ませんでした。と申しますのも、当時、そのようなことはまれであり、その人は彼の一部であるオーラの雲に包まれていたからです。私たちが私たちの世俗的なやり方で、明確に規定された輪郭をもって椅子に座っている個々の人とその人々全体をそこにいる人の数を数えることができるほどにはっきりと見るのに対して、古いカルディア人たちは通路の右と左に続くそれぞれの椅子の列が流れる霧のかたまりに似た一種のオーラの雲に包まれていたのを見たはずです。ここにも雲が、あそこにも雲が、そして少し暗い領域があり、それらの暗い領域が人間を示していたことでしょう。



Erde:地球 - dunkel blau暗い青
Schnee, Euphrat:雪、ユーフラテス - weiss白
Luft:空気 - grün:緑
Rohr:管 - lila:淡紫
gelb:黄色
rot:赤色
hell blau:明るい青

この種の視覚経験はカルディア時代の初期にはまだ知られていなかったはずですが、後の時代においてはそうではありませんでした。古いカルディア人たちは昼間はこの漠としたイメージの暗い領域だけを見ていたことでしょう。彼らは夜にも、それと非常に似た何かを、眠っている状態においてさえ、見ていたはずで、何故なら、彼らの眠りは私たちの眠りほど深いものではなかったからです。それはどちらかという夢に似たものでした。今日では、もし誰かが眠っていて、皆さん全員がここに座っていると見ても、彼は皆さんのことを全く何も見ないでしょう。古い時代には、このような深い眠りは知られていませんでした。人々は右や左に続くオーラの雲の視覚的な形態を、その中にある光の点としての個々人とともに見たことでしょう。ですから、当時、昼と夜における状態の知覚に関して、今日ほど顕著な違いはなかったのです。この理由から、彼らは昼間には日の光があり、夜にはそれが無い、という違いに気づいていませんでした。彼らは昼間、太陽をすばらしいオーラに包まれた光り輝く球として見ました。

彼らは自分で次のように思い描いていました。下方には地球が、地上の至るところに水、そしてもっと高いところには雪がある。それはユーフラテス川の源と考えられる。このすべての上に空気が、そして高みには、最も美しいオーラに包まれて東から西へと旅する太陽がある、と。そして、彼らは、今日で言えば何か漏斗に似たものの存在を想像しました。つまり、夕方になると太陽はこの漏斗の中に降り、朝再び現れ出たのです。

とはいえ、彼らは本当にこの漏斗の中にある太陽を見たのです。夕方、太陽はおよそ次のように見えました。つまり、光り輝く緑がかった青い中心が赤みがかった黄色の後光に包まれているように見えたのです。彼らが太陽に関して抱いていたイメージとはこのようなものでした。朝になると、太陽は輝く中心が後光に包まれて漏斗の中から現れました。それは天蓋を横切って旅し、より深い色合いを帯びて西の水平

線から漏斗の中に潜り込み、漏斗を越えて放射する後光を示した後、視界から消えました。彼らにとってその太陽は暗く、黒かったために、彼らは漏斗あるいは穴のような空間について語りました。彼らは物事を見たおりに、正確に記述したのです。

そしてまた、当時、彼らに深い印象を与えたのは、彼らが彼らの子供時代の最初の6年か7年を振り返り、その時代には、いかに彼らとその受肉以前に間違いなくその中に住んでいたところのあの神秘的な要素にまだ包まれていたかを、そして、7才から14才の間に精神的な卵の中から現れ始め、ついには彼らが20才になったとき、いかにその過程が最終的に完成するかを知覚したときです。彼らが彼ら自身、地上の存在であると本当に感じたのはただこの年齢に達したときだけでした。そしてそのとき、彼らはよりはっきりと昼と夜の間の違いに気づいたのです。

彼らは自分の中で六から七年ごとに起こる発達上の周期的な変化を観察しましたが、これは月の相に一致していました。二十八日周期の月の相は、彼ら自身の六から七年という生活経験の期間に対応していたのです。そして、彼らは一ヶ月という月の相が人間の生活においては二十八年（四×七年）という期間に相当すると感じていました。彼らはこのことを七年ごとに一ヶ月を挿入することによって暦の中に表現したのです。要するに、彼らの数え方は月に基づいていたのであって、太陽にはありませんでした。

さらに言えば、彼らは外的な自然を、今日、私たちがそうするにはっきりと規定されたもの、精神を欠いたものとして見たものではありません。彼らが昼と夜の両方に観察した自然は精神的なオーラに浸透されていたのです。今日、私たちは明確な昼の意識を有していますが、夜には何も見えません。このことは私たちが昼と夜の交代を生じさせるところの太陽に重きを置くことに表現されています。

古代カルディア人たちの秘儀の叡智においては太陽ではなく月が強調されたのですが、それは月の相が成熟に向けての彼ら自身の成長を忠実に反映していたからです。彼らは彼ら自身をそれぞれの段階ごとに - 子供として、若者として、そして大人として - 異なった仕方で構成されていると感じていましたが、今日、私たちはもはやこのことを経験しません。振り返ってみると、最初の七年とその次の七年の間にそれほどの違いがあったとは思われません。今日、子供たちはあまりにも賢く、彼らとうまくやっていくのはほとんど不可能なほどです！彼らに太刀打ちするためには特別な教育方法が工夫されなければならないでしょう。彼らは大人と同じくらい賢く、そして、どの年齢層の人も等しく賢いように見えます。

古代カルディア人たちはそうではありませんでした。当時、子供たちはまだ精神世界に結びつけられていました。彼らは成長してもこのことを忘れず、オーラの卵の中から現れ出た後で初めて地上的な存在になったのだ、ということを知っていたのです。ですから、彼らの計算は太陽ではなく月に、つまり彼らが天上に観察したところの七つの周期で計算した四つの相に基づいていました。こうして、彼らは月の相にしたがって、七年ごとに一ヶ月を余計に登録したのです。

文明史におけるこの外的なしるしは、つまり私たちが四年ごとに一日を追加的に挿入するのに対して、カルディア人たちは七年ごとに一ヶ月を追加的に挿入したという事実は、彼らの昼の意識が夜の意識からはっきりと分けられていなかったのに対して、彼らが相前後する人生の諸期間を通しての意識状態の大きな違いを経験していた、ということを示しているのです。

今日、私たちは朝目覚めたとき、眠い目をこすりながら、「私は眠った」と言います。古代カルディア人たちは二十一才あるいは二十二才になったとき、自分は目覚めた、と感じたのです。そのとき彼らは世界をはっきりと見るようになり、「私はこの瞬間までずっと眠っていた」と言いました。その覚醒意識は彼らが五十才になるまで保持され、彼らが年老いたとしても以前の状態に立ち戻るのではなく、より十全で明確な視界を発達させると信じられていました。そのため、二十才になった後に獲得した意識を保持しながら、今や眠りの領域に入るとはいえ、高度に超感覚的な能力を有する老人たちが聖人として尊敬されたのです。

こうして、古代カルディア人たちは三つの意識状態に通じていました。私たちは二つの意識状態を経験しますが、それに加えて私たちが夢の状態として特徴づけるところの三番目の状態があります。つまり、目覚め、眠り、そして夢の意識です。カルディア人はこれら三つの意識を毎日経験したわけではありません。彼は減退した意識状態を二十才になるまで経験し、そして意識的に目覚めた状態を五十才になるまで経験したのです。そして、彼に関して次のように言えるような状態、つまり彼は彼の地上的な意識を精神世界へと持ち込もうとしている、彼は他の人間よりもはるかに多くのことを知り、より賢くなる段階に達したのだ、と言えるような状態がありました。

年を重ねた人は聖人として尊敬されていたのです。今日、彼らは老いぼれていると考えられます。この

大変な違いは人間存在の正に根幹に関わっているのです。私たちはこのことについて全く明確でなければなりません。何故なら、それは人間存在にとって途方もなく重要なことだからです。私たちは単にたったひとつの意識状態を通して世界を探求するではありません。私たちが世界を知るようになるのは、例えば、古代カルディアの子供たちに共通していた意識形態を理解するときだけです。それは私たち自身の夢の状態に似たものであったとはいえ、より活動的で、その人物を行動へと駆り立てることができました。それは今日では病理的な状態と考えられるであろうようなものです。当時は、今日あまりにも散文的であたりまえのものと思われているこの覚醒意識は知られていませんでした。私は散文的という言葉をやざと使っているのですが、それは人間の物理的な側面だけに注目し、それだけしか存在していないかのように表現するのは散文的だからです。もちろん、このことは容易に認められるようなことではないかもしれませんが、しかし、本当にそうなのです。古代カルディアにおいては、人間は物理的な実体としてだけではなく、私が記述したようなオーラを付与されたものとして感知されていました。そして、聖人たちは物理的なものを超えて人間の魂をのぞき見ていたのです。

それは今日ではかき消されている第三の意識状態であり、夢のない眠りに比肩されるようなものです。もし、私たちがその状況を歴史的に眺めるとすれば、私たち自身の意識とは非常に異なった意識に出会うのが分かります。そして、時代を遡れば遡るほどその違いは大きくなります。比較してみますと、私たちの通常の意識はそれほど自慢できるほどのものではありません。私たちは誰かが夢のない眠りの中で経験しているであろうことを全く重視していませんが、それは普通、その人がそれについて語るべきものをほとんど有していないからです。今日では、夢のない眠りの中で経験したことについてなにがしかのことを語る人可以とて、とても少ないのです。夢の生活はファンタジーであり、単に脳が勝手に作り出したものである、唯一頼りにすることができるのは目覚めた意識状態である、と言われます。

古代カルディア人たちにとって、このような態度は与り知らぬものでした。前向きな行動へと誘う新鮮で生き生きとした夢の生活に連なる子供の意識は彼らがまだ天国に住んでいる状態にあり、彼らが口にするのは神から出た言葉である、という状態にあることを示していると考えられたのです。人々が彼らの言うことに耳を傾けたのは、彼らが精神世界からの豊かな情報をもたらしていたからです。

時の経過の中で、彼らは地球存在としての意識状態に達しましたが、彼らのオーラの中ではまだ魂の存在、精神的な存在でした。見者や聖者が享受したのはこのような意識状態だったのです。人々は、彼らの言うことに耳を傾けると、それが精神世界からの伝言であるということを確認していました。

そして、秘儀においてますます高みへと上昇した人たちについては、彼らが五十才になったとき、純粹に太陽的な要素を超越し、精神世界に参入したのだ、つまり彼らは「太陽の英雄」から「父たち」になり、人間の精神的な故郷との交わりを持つようになったのだ、と言われました。

以上のことを皆さんにお話ししたのは、歴史的な観点から、人間がいかにしてこれらの様々の意識状態に与るようになったかを示したかったからです。

意識状態についての探求を続けるにあたって、今日の人間が有しているような夢のない眠りについてはしばらくおいて、皆さんがいつものように、私は十分に意識的だ、私の周りにあるものを見たり、他の人が私に話しかけるのを聞いたり、彼らと会話を交わしたりする、と言うときのような通常目覚めている状態について検証してみましょう。

それに続いて、皆さんがよくご存じの第二の状態、皆さんが、自分は眠っている、と想像するときの状態を取り上げましょう。皆さんがその状態で見ると、しばしば皆さんをあまりにも驚かせ、あるいはすばらしく自由にさせるようなものであるために、もし皆さんが通常の健全な状態にあるとすれば、皆さんは、これは普通の日常生活の一部ではない、自然な想像力の働きによって創り出された万華鏡のような効果がありとあらゆる仕方人間意識の中に無理矢理押し入ってきたものだ、と言わざるを得ないようなものです。散文的なタイプの人ほとんど夢に注意を払わず、迷信的な人はそれを外的な仕方説明しようとするでしょう。迷信を信じることもなく、またそんなことは当たり前だとも思わない詩的な才能に恵まれた人は、まだこの万華鏡のような夢の生活についての意識を有しています。と申しますのも、腐敗していない人間本性の深みから現れてくるのは迷信的な人々によってそれに帰せられるような重要性ではなく、ちょうど山が隆起して、長い年月を経て再び消えていくように、経験が本能的な生活から霧や雲のように生じることを示すような何かであるからです。ただ、夢の生活においてはこのすべてが速やかに生じるのに対して、宇宙における夢の像はゆっくりと組み立てられ、ゆっくりと消えていくという違いがあるだけ

です。

夢には別の特徴があります。周囲がヘビだらけ、体にもヘビが巻きついている夢を見ることがあります。例えば、コカインの常習者はこのようなヘビについての夢の経験を誇張された形で持つかも知れません。この悪徳の犠牲者は起きているときでさえ、その体のいたるところからヘビが這い出すのを感じます。

私たちは、私たち自身の生活を観察するとき、そのような夢が何らかの内的な障害を示しているのに気づきます。ヘビの夢は何らかの消化に関する障害を示しています。腸の蠕動運動がのたうつヘビとして夢の中で象徴的に示されるのです。

また、散歩に出かけて、白い杭 - 上部が損傷した白い杭あるいは石柱が立っている場所に出る夢を見るかもしれません。彼は夢の中でこの上部の損傷に不安を感じます。彼は自分の歯が痛んでいるのに気づいて目覚めるのです！彼は無意識の内に彼の歯の一本に指をやりたい衝動に駆られます。(これは今日の人間についての話です。太古の時代には人間はそのようなことから超越していました。)今日の標準的な人間は歯医者に行って悪い歯を詰めてもらおうと決心します。

このことはどのように説明すればよいでしょうか？何らかの有機的な障害を示す痛む歯に関連したこの経験の全体はひとつの像によって象徴化されます。歯は何らかの損傷あるいは腐食の兆候を示す白い杭になりました。夢の像の中で、私たちは私たちの有機体の中に実際に存在する何かに気づくのです。

あるいはまた、不安で落ち着かない気持ちで窒息しそうな部屋の中にいる生々しい夢を見ることがあります。そして突然 - 今まで気づかなかったのですが - 部屋の隅にあるストーブが非常に熱くなっているのが目に入ります。部屋は暑くなりすぎていたのです。私たちは今や、夢の中でなぜ息ができなかったのかを知ります - 部屋があまりにも暑かったのです。私たちは動悸と速い脈拍で目覚めるのですが、夢の中で外的な形で象徴化されたのは異常な脈拍だったのです。何らかの有機的な障害があり、私たちはそれに気づくのですが、昼間のように直接的な仕方ではありません。私たちは象徴的な像を通してそれに気づくのです。あるいはまた、私たちは外から太陽が照りつけている夢を見るかもしれません。日差しは私たちのじゃまをし、通常であれば私たちは日光を歓迎するはずなのに不安になります。目が覚めて隣家が火事になっているのに気づきます。外的な出来事はそのまま表現されるのではなく、象徴的な形態の衣をまとったのです。

このように私たちは、自然で創造的なイマジネーションが夢の中で働いているのを、つまり外的な事象が夢の中に反映されているのを見ます。けれども私たちはこのことにこだわる必要はありません。夢はいわば生命を獲得し、それ自身の内的な意味と本質的な現実性を帯びることができるのです。私たちは外的世界のいかなる事物にも関連づけることができない何かを夢に見るかもしれません。この点に段階を追って近づくと、私たちは、全く異なる世界が夢の中に示されている、と言います。すなわち、私たちは、悪魔的であったり、美しく妖精のようであったりする全く別のものに出会うのです。夢の像の中に現れるのは現象世界だけではありません。そうではなく、全体として異なる世界が私たちの中に侵入してくるのです。人間は感覚によって知覚可能な形態において超感覚的な世界を夢に見ます。

このように、今日、人間の意識は通常の覚醒した生活に並行して夢の生活を有しています。実際、夢への傾向こそが私たちを詩人にするのです。夢を見ることができない人々はいつでもあまりよい詩人ではありません。と申しますのも、詩人あるいは芸術家であるためには、夢における自然な素材を目覚めの生活における想像的なファンタジーへと翻訳できなければならないからです。

例えば、外的な対象物からその象徴的な表現を引き出すような夢、窓から部屋に差し込む日差しが隣家の火事を象徴化しているような夢を見る人であれば誰でも、次の日に創作活動をしたいような思いに駆られることでしょう。彼は潜在的な音楽家です。心臓の動悸を加熱したストーブとして経験する人は次の日にモデルの描写や建築デザインに向かいたいような気にさせられるでしょう。彼は潜在的な建築家、彫刻家、あるいは画家なのです。

これらの事柄はお互いに関連しています。つまり、通常意識においては、それらは私がお話したような仕方に関連しあっています。けれども、私たちはさらに先に進むことができます。「より高次の世界の認識」や「神秘学概論」に書きましたように、この通常意識はある種の精神的な訓練 - これについては後でお話ししますが - に取りかかることで発達させることができます。つまり、ある明確な概念や言語上の関連に心を集中することによって、私たちの思考、感情、そして意志の内的な生活全体に新しい生命と活力が与えられるのです。これらの訓練を通して、思考は事実上、はっきりと見ることができる現実に、

感情は生きた実体となります。

そのとき、現代における秘儀参入の第一段階が始まります - 私たちは私たちの夢を目覚めの生活へと持ち込むのです。しかし、この点で容易に誤解が生じます。私たちは昼間見る夢に全く自然に耽るような人が見る夢をほとんど重視しませんが、その昼間の夢にもかかわらず、感情や思考を他の人よりもより生き生きと活力あるものにしたことによって、十全なる意識を保持したまま夢を見続けることができるようになった人は秘儀参入者になるための最初のステップを踏み出したのです。この段階に到達した人には次のようなことが起こります。彼は敏感な人であり、目覚めの生活においては他の人と同様にまじめで感覚が鋭いために、彼の仲間の人間に関して、一方では普通の意識に現れるようなものとして、つまり、鼻の形や目の色、髪がきちんとしているかどうか等々を見るのですが、他方では、彼らの周囲に何か別のもの、何か真実であるものを夢に見はじめます。つまり、彼は彼らのオーラ、彼らの関係についての内的な意味を夢に見るのです。それは彼の精神の目を持って見るということです。彼は、十分に目覚めた意識において、意味のある夢、現実と合致した夢を見るようになります。彼が朝目覚めるときにも彼の夢は終わることがなく、一日中続き、眠りの中で変化させられるとはいえ、意味に満ちています。彼は人間の魂の真の性質、彼らの行動の精神的な源泉を見ます。彼はそうでなければ単なる名残あるいは通常の夢であるところのものに関連した活動の中に生きるのですが、それでもこれらの夢は精神的な現実なのです。

さて、第二の意識が最初の意識につけ加えられます。目覚めて見る夢は日常生活における通常の知覚よりも高次の知覚形態を取るようになります。十分に目覚めた意識状態において、日常生活の現実、より高次の現実が付け加えられたのです。通常の夢においては、何か現実的なものが失われています。つまり、ファンタジーに担われた現実の断片のみが私たちに与えられます。けれども、私がお話したような目覚めた夢においては、個々の人間の形態、植物や動物等あらゆるものが明示されてそこにあり、人間の行いは十全なる意味を持ったものとして見られます。このすべてが日常的な現実と何かをつけ加え、それを豊かなものにするのです。

通常の意識による知覚に第二の意識がつけ加えられます。人は異なった光の中で世界を見始めるのですが、このことは私たちが動物の世界を見るときに最も衝撃的に示されます。それは今やあまりにも異なったものとして現れるために、私たちは実際、以前には一体何を見ていたのだろう、といふがるほどです。私たちはそれまで動物界の一部、その外的な側面だけを見ていたのです。さて、ひとつの全体としての新しい世界がつけ加えられます。それぞれの動物の種、ライオンや虎、そしてありとあらゆる種の中には何か人間に近いものが横たわっているのですが、これを人間との比較で示すのは困難です。次のように考えてみてください。

皆さんが、両手の指全部に一定の長さのひもを結びつけ、そのそれぞれのひもの端に様々の色の模様がつけられたボールを固定することによって皆さんの体を延長すると想像してみましょう。皆さんには今や10本のひもが結びつけられています。さて、ボールがあらゆる方向に動くように指を使ってひもを操作してください。今度は足の指で同じことをしてみましょう。次は空中に跳び上がった、足の指を上手に使うとすばらしい形が生み出されるようにしてください。このようにして、それぞれの指は先端についたカラーボールで長くなりました。それぞれの足の指も同じです。

このすべてが皆さんの人間としての形態の一部であり、その全体が魂によるコントロールの下にあると想像してください。それぞれのボールは別々の実体ですが、このすべてを探求する瞬間、皆さんはそれがひとつの全体を構成している、という印象を持ちます。これらのボールや糸のすべては皆さんの指や足の指と違って皆さんの一部ではありませんが、そのすべてが単一の全体を形成し、皆さんはそれをコントロールしています。皆さんは、今お話したような方法でボールと糸を操りはじめるとき、上方にあるライオンの魂とそれに結びつけられたボールのような個々のライオンが全体としてひとつの統一体を形成しているを見ます。もし、皆さんが以前は20個のボールがそこにあるのを見ていたとすれば、それらはそれら自身にとってひとつの世界を表していました。そこに活動の主体である人間を加えます。すると新しい状況が生まれます。

皆さんの知覚様式についても同じことが言えます。皆さんは個々のライオンがそれぞれ独立して動き回っているを見ますが、それらは独立した単位としてそこにあるボールです。次に、皆さんは自意識を付与されたライオンの魂、すなわち精神世界においては人間に似たものに見えるライオンの魂と、一見したところ動き回るボールのようにつり下げられた個々のライオンを見ます。自意識を持ったライオンの魂は

これらの個々のライオンとして表現されているのです。

こうして皆さんは動物世界におけるあらゆる生き物のより高次の形態を知覚します。動物はその成り立ちの中に人間に近い何かを、つまり人間の魂とは異なる領域に属する魂的な性質を有しています。皆さんは皆さんの人生において、どこに行くにしても自意識を有する魂の生活を断固として担っています。皆さんには皆さんの自我を誰かれなく押しつける自由があるのです。個々のライオンにはそれがありません。ところが、このお互いに対立する自我の領域に接して別の領域が存在しています。精神世界では、ライオンの魂たちは全く同じことをしているのです。彼らにとって個々のライオンは系の先についた多くの踊るボールにすぎません。そのため、私たちが新しく獲得した意識を持って動物界の真の本性を見ると、ちょっとしたショックを受けることになります。

私たちは新たな世界に参入し、自分に次のように言います。私たちもまたこの別の世界に属している。しかし、私たちはそれを地上に引きずりおろしている、と。動物はそれ自身の中のなにがしかを、つまり集合魂あるいは種の魂を後に残してきています。地上で見ることができるのは四つ足だけです。私たちは動物が精神世界に残してきたものを地上に引きずりおろし、その結果、動物とは異なる形態を獲得しています。私たちの中に生きているものもまたこの高次の世界に属しているのですが、人間としての私たちはそれを地上に引きずりおろしているのです。

こうして、私たちは別の世界を知るようになりますが、それは動物たちを媒介として知ることになります。けれども、そのためにはさらなる意識形態が必要です。つまり、私たちは私たちの夢の意識を目覚めの生活へともたらさなければなりません。それによって、私たちは動物界の内的な成り立ちに対する洞察を獲得することができるのです。

この第二の世界は魂の世界、あるいは物理的な世界と区別するために魂界またはアストラル界と名づけることができるかも知れません。私たちは別の意識形態を通してこのアストラル界を知るようになります。私たちは私たちが日常的に存在する世界とは異なる世界への洞察を別の意識を通して獲得しなければならないのです。

魂の生活をもっとさらに強化し、活性化することも可能です。つまり、先に触れた本に記述されているように、集中や瞑想を行うだけでなく、強化された魂の内容を再び排除するように努力することもできるのです。魂の生活を強化し、思考と感情を強めるという最も骨の折れる努力の末に、私たちはそれを再び変化させ、最終的に無に帰することができる地点にまで至ります。そのとき、私たちは「空になった意識」の状態と呼ばれる状態に帰着します。

さて、普通、「空になった意識」の状態は眠りを誘起します。このことは実験で確かめられます。まず、被験者からすべての視覚的な印象を取り除き、彼を闇の中に置いてください。次に、すべての聴覚的な印象を取り除き、彼が沈黙に包まれるようにしてください。そして、他のすべての感覚印象を奪うように努めてください。そうすれば、彼は徐々に眠りに落ちてしまうでしょう。

このことは、もし私たちがあらかじめ私たちの思考や感情を強化していれば、起こり得ないことです。私たちの意識を意志の働きによって空にしていたとすれば、そのような場合にも起きたままでいることが可能なのです。そのとき、現象世界はもはや存在していないでしょう。私たちの通常の思考や記憶は忘れ去られます。空になった意識を有している私たちの中には真の精神世界が直ちに侵入してきます。ちょうど私たちの通常の意識が感覚世界の色や音、熱で満たされるように、精神世界がこの空になった意識を満たします。私たちは、私たちの意識を意識的に空にするときだけ、精神世界に取り巻かれることになるのです。

ここでもまた、新しい意識とその精神世界との関係を特別に生き生きと理解するために役立つ何かが外的な自然の中にあります。ちょうど動物界を普通とは異なる仕方で知覚することによって通常の意識よりも一段高い意識に気づいたように、私たちは今や、それとは全く異なった仕方で構成されている植物界の中で、この新しいレベルの意識を認識することができるのです。

通常の意識には植物界はどのように見えるでしょうか？ 私たちは青々とした牧場のあちこちに鉱物的な地球の中から花々が咲きでているのを見ます。私たちは青色や金色、赤や白の花々、そして生き生きとした緑の中に、つまり私たちの目の前に絨毯のように広がる植物界の美しさの中に喜びを感じます。地球が花と植物に彩られたこの光り輝く衣に包まれるのを見て、私たちは心を躍らせ、喜びに満たされるのです。

そして、目を上方に向ければ、まぶしく輝く太陽、いつもの透き通った昼間の空や曇った空があります。

私たちは天と地球の間に、つまり、花々に彩られた野原を見下ろすこと、そして空を見上げることとの間に何らかの関係がある、ということに気づいていません。昼間、私たちの前に広がるこの花のカーペットを見て強烈な喜びを感じた後、夏の一日が終わって夜の帳が下りるのを待つと仮定してみましょう。私たちは目を天蓋に向け、星々が空いっぱいに広がる様々の輝く星座として配列されているのを見ます。そして今、新しい歓喜が上方から私たちの魂を捕らえます。

このように私たちは昼間、地上を覆う植物を私たちの心を内的な喜びと歓喜で満たすものとして見下ろすことができます。そして夜空を見上げれば、昼間にはあれほど青く見えた空に今や光り輝く星々がちりばめられているのが見られます。私たちは私たちの魂に現れる美しい空を見て内的な喜びを感じます。これが私たちの通常の意識による反応です。

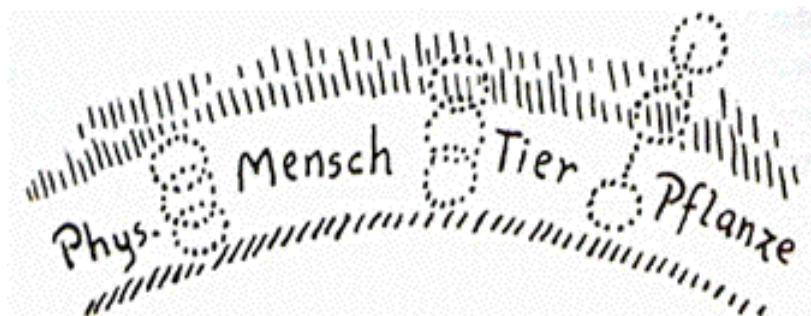
もし、私たちが空になってはいるけれども目覚めたままにとどまり、精神に浸透された意識を完成するならば、昼間植物に覆われた地球を探求し、夜にはきらめく星々を見上げるとき、私たちは自分に次のように言うことができます。確かに、昼間、花々がちりばめられた地球の豊かな彩りが私を喜ばせ、魅惑した。けれども、私は本当のところ何を見たのだろうか？と。そして、私たちは無数の天の星々を見上げます。空になった覚醒意識には、つまりすべての地球的な内容を除去された意識には、星々は単に輝いたりきらめいたりする以上のものであり、実に様々の形態をとります。何故なら、あのより高次の領域には、すばらしい真髓の世界、すなわち壮大で力強く崇高な動きと流れがいたるところに存在しているからです。この光景を前にして、私たちは感謝に満ちた尊敬と、尊敬に満ちた感謝の中で頭をたれ、その崇高さを認識します。私たちは秘儀参入に至る中間段階にさしかかったのです。私たちは植物の起源がより高次の領域に横たわっていることを知っています。私たちがこれまで個々の星々のひらめきと輝き以上のものではないと考えていたところのもの、それこそが真の植物存在であり、私たちは今初めてそれを見るのですが、今まではすみれそのものではなく、ただ朝露の中にあるすみれの花の上の一滴の露を見ていたかのようです。私たちはひとつの星の中にひとつの輝く露を見ますが、実際には、動き、流れる力強い世界がその背後に横たわっているのです。私たちは今や、植物界とは本当は何なのかを知ります。それは地上にではなく、壮大で力強く、崇高なあの大宇宙の中に見いだされるべきものです。そして昼間、私たちが彩り豊かな花のカーペットの中に見ていたものはより高次の世界が反射したイメージなのです。

私たちは今や、真の形態や存在たちが動き、流れる大宇宙が地球の表面に反射している、ということを知っています。私たちは、鏡を覗き込むとき、私たち自身がそこに映し出されているのを見ますが、そこに反射しているのはただ私たちの外的な形態であり、私たちの魂ではない、ということを知っています。天は地球にそれほどはっきりと反射されるのではなく、黄色、緑、青、赤や白の植物の色として映し出されるのです。それらは反射された像、影のように微かな天の反映なのです。

私たちは今やひとつの新しい世界を知りました。そのより高次の世界には「植物人間」、すなわち自意識を付与された存在が見いだされます。ですから、私たちは現象世界とアストラル界の他に、第三の世界、真の精神世界をつけ加えることができます。星々はこの宇宙世界のしずくであり、植物はそれが反射したイメージです。その外見は現実を表現しているものではありません。すなわち、彼らはこの地球上におけるその表現において実体的なものではなく、そこからひとつひとつの星々がしずくのように輝き出しているところのあの超越的な世界の無限に多様な豊かさとの関係で言えば、単にそれが反射した像に過ぎないのです。

そして、私たちは今や、人間としての私たちが、より高次の領域にある真の植物存在であるところのものを私たちの内に担っている、ということに気づきます。私たちは植物が精神の世界に残してきたもの、と申しますのも、植物存在はあの世界に滞在し、それが地球に送り込むイメージが地球によって地球の実質で満たされるに過ぎないからなのですが、それをこの鏡像の生活へと引きずり下ろしているのです。私たち人間は、私たちの魂的な本性を、そしてそれもまたあのより高次の世界に属しているのですが、この像の世界に持ち込みます。私たちは単なる像ではなく、ここ地球上において、魂を持った精神的な存在でもあるのです。私たちは地球上において三つの世界に参加しています。私たちは物理世界に住んでいます。自意識を持った動物はそこには見いだされません。同時に私たちも住んでいるところのアストラル界に彼らの自意識は存在しているのです。私たちはこのアストラル界を物理世界の中に引きずり下ろします。私たちはまた第三の世界、真の植物存在が住む精神の世界にも住んでいるのですが、植物存在がその反射された像だけを地球に送り込んでいるのに対して、私たちは私たちの魂的生活の現実をそこに引きずり下

ろしているのです。



Phys.:物質界 Mensch:人間 Tier:動物 Pflanze:植物

ですから今や、私たちは次のように言うことができます。ここ地球上において、体と魂と精神を有している存在とは人間である。ここ地球上において、体と魂を持ってはいるけれども、その精神は物理世界に境を接する第二の世界にあるため、より現実性のない存在とは動物である。物理世界にはその体だけを有している存在、魂は第二の世界に、精神は第三の世界にあるために、地球の実質に満たされた単に反射した像であるところの体を持つ存在とは植物である、と。

私たちは今や、自然における三つの世界を理解し、人間が彼の内にこれら三つの世界を有していることを知ります。私たちは、植物が星々に到達するものであることをある程度感じています。植物を見るとき、私たちは自分に次のように言います。ここには地球上にそれが反射した像、その真の現実性から引き離された像だけを表している存在がいる、と。私たちが夜、星々に眼差しを向ければ向けるほど、私たちはそのより高次の世界の中にその真の存在をますます見るようになります。地球から天を仰ぎ、宇宙が地球とひとつであることを知覚するとき、そのとき私たちは自然の世界をひとつの全体として見ているのです。

そして、私たちは人間としての自分自身を振り返って次のように言います。我々は、植物においては天に至るあの要素を我々の地球的な存在性の中へと切り離した。我々は我々自身の中に、物理世界、アストラル界、そして精神世界を担っているのだ、と。

客観的ではっきりとした知覚を発達させること、様々の領域を通過しながら精神の世界に至るまで自然を追求すること、人間に対する洞察をその精神的な本質に至るまで獲得すること、それが精神的な探求において踏み出すべき最初の一步です。

第三講

人間の意識状態に関係する鉱物世界の形態と実質

昨日試みたのは、精神的な訓練と瞑想を通してより高いレベルの意識を発達させるときの人間の魂の経験に関して、何らかのアイデアを示すことでした。同時に、通常の意識によく見られる不調和で混乱した夢の経験を目覚めの生活における完全に意識的で具体的な経験へと変化させることができる、ということも示しました。このようにして、通常の意識にある程度連なるところの意識レベルを達成することが可能になります。そのとき、私たちは、例えば、より高次の魂の世界、すなわちアストラル平面と関わりを持つ動物界をその全体性において知覚することになります。次に私が示そうとしたのは、私たちが、感覚印象を脱ぎ捨てた十全なる覚醒意識、つまり、この第二段階の意識レベルにおいて、星の世界に到達し、地球を覆う植物の真実をそこで初めて知るようになるとき、いかに植物界がその全体性の中で顕現するか、ということでした。そのとき私たちは、地球から生えだしているように見える植物とは、星の世界のただ中から、植物の上の露のように輝き出すあの壮大さと偉大さを映すイメージである、ということに気づきます。実際、天空とそこにあるものすべては、私たちが、感覚印象を脱ぎ捨てたこのより高次の意識をもってそれを理解するとき、実質的な現実性、形態、色、そして音さえをも担うようになるのです。私たちは、そのとき、地球を振り返り、植物界が実際には宇宙存在のイメージ、宇宙的な行為を映すイメージである、ということを知覚します。

皆さんが、一方では星の世界を、他方では植物界を観察するときに出会う特別な現象に注意を払っていただきたいと思います。私はこれらの事柄を、まったく内的な経験の観点から、正確にそれらが起こるとおりに、つまり、それらが直接的かつ精神的な経験や探求によって明らかになるとおりに記述するつもりです。私の話しを裏付けるいかなる文献やその他の伝統も存在しないでしょう。しかし、私がお話しした方法で精神的なものを探求する人であれば誰でも知っているような特別な現象について、まず最初に指摘したいと思います。

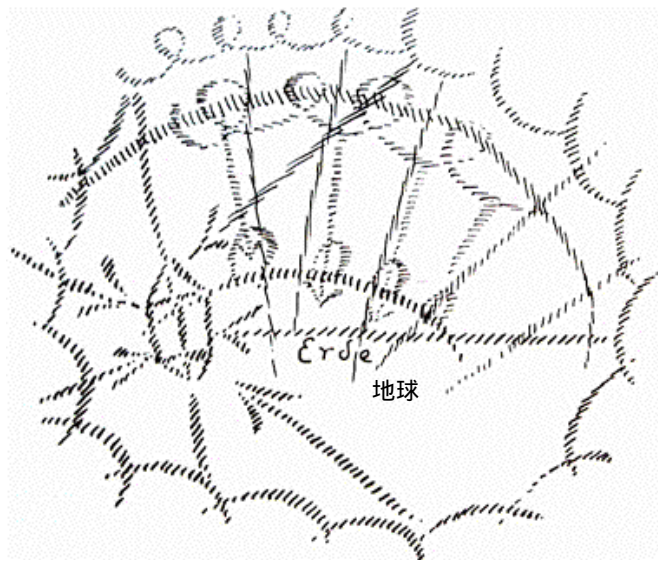
次のような像を思い描いてみて下さい。私たちの上方には星の世界が、下方には地球があります。私たちは探求を開始する地点を私たちの観察地点と呼びます。私たちが第二段階の意識、つまり、すでにお話ししたような仕方では星の世界と植物界を見る意識に達しているとすれば、宇宙には元型が存在しており、その元型が、鏡に写るイメージのようにではなく、生きた植物の形で地球に映し出されているのだ、ということを確認することができます。これらの植物は生命のない非現実的で漠としたイメージとして現れるのではなく、地球によって創造された具体的な反射像として現れるのです。宇宙にある植物存在が地球という鏡から萌え出ることができるために、地球は鏡としての働きをもってそこになければならないのだと感じられます。

固い地球がなければ植物も存在し得ないでしょう。そして、ちょうど鏡が光を遮る抵抗として働く - と申しますのも、もしそうでなければそれは何も反射しないであろうからですが - ように、植物が存在するためには、地球は反射媒体として働かなければならないのです。

私たちは今や、このことをさらに追求していくことができます。私たちは、この第二段階の意識、すなわち感覚印象から独立した目覚めの意識を発達させた後、魂の内的な強さ、つまり、すべての被造物、すべての生きるものに対する愛の精神を発達させることに向けて、次の一步を踏み出すことができます。この新しい力を獲得することが認識に向かう確かな力として認められることは滅多にありません。もし、このきわめて別様に構成されている領域、そこではもはや宇宙が星々で輝いているようには見えず、精神的な存在たちが住む場所になっているような領域に参入した後、この愛の力が私たちの心と魂を満たすならば、もし、いわば宇宙の精神的な大海に乗り出した後、私たちが自分の精神的、魂的、そして肉体的なアイデンティティを保持し、そして、無限の愛と献身の力をすべての存在に拡張することができるならば、私たちは私たちの洞察と理解を段階を追って完成に導くことになります。私たちは、そのとき、動物界や植物界だけでなく、鉱物界、特に結晶構造をもつ鉱物を超感覚的に知覚する能力をも発達させるのです。と申しますのも、鉱物結晶は、より高次の世界を探求することを望む人々にとって、観察と研究のためのすばらしいフィールドを提供するからです。

動物界と植物界に十分に精通したとき、私たちは鉱物 - 結晶世界を探求することができる立場に立ちま

す。以前もそうであったように、私たちは私たちの注意を地上の鉱物界から宇宙についての思索に向けるように促されるのを感じます。そして、私たちは、そこで再び、生きた現実、植物界の元型に近いものを見いだすのですが、今私たちに示される像はそれとは全体として異なっています。私たちは宇宙の生きた現実、つまり、地上で見られる鉱物 - 結晶世界は宇宙の中で働く精神的な原則が創造したものである、ということを知ることになります。それは段階を追って地球に下降して来るのですが、地球上で、あるいは地球によって反射されるのではありません。これが決定的な点です。私たちが私たちの意識を鉱物 - 結晶世界についての思索から宇宙へと上昇させ、再び地球を振り返るとき、地球はもはや鏡として働いてはいません。つまり、私たちは、地球が私たちの視界から消え去っている、という印象を持ちます。植物の場合のように私たちの下方にある地球がより高次の存在たちを反射している、とは言えないのです。地球は反射媒体として働いているのではなく、消滅しているように見えます。私たちが鉱物 - 結晶世界によって喚起される精神的な光景について瞑想するとき、つまり、私たちの精神的な眼差しを宇宙空間から地球に向けるとき、恐ろしい深淵の上に、無の上に吊されているように見えます。私たちは待つ態度を保持するとともに、自分をしっかりと支え、心がそこにあるようにしなければなりません。待つ期間が余りにも長引くようであれば、私たちの恐れは増幅され、恐怖に駆られるようになるでしょう。私たちの足下に地面はありません。ですから、もし、私たちが自制心を、つまり、その深淵のかなたを見ることに向けて能動的な歩みを進めることを可能にする心のあり方を維持していなかったとすれば、私たちはこの全く見知らぬものである感情によってパニック状態に陥ってしまうでしょう。私たちの精神的な視界にとってはもはや存在しない地球を越えて、かなたを見なければならぬ、というのはこのためなのです。そのとき、私たちは、あの宇宙に関連した鉱物世界の側面ばかりではなく、環境全体に対するその関係についてもじっくりと考えるように強いられます。私たちにとって地球は存在することをやめます。鉱物世界とはひとつの全体として見るべきものなのです。



そのとき私たちが経験するのは、上方から流れ下る宇宙的な植物のエネルギーとは対照的な、下方から流れてくる宇宙のエネルギーです。私たちはいたるところに流れとそれに対抗する流れ、あらゆる方向から一点に向かう宇宙的なエネルギーの流れを見ます。植物の場合には、この宇宙エネルギーの流れは上から下に向かい、それに対する抵抗を提供する地球から植物が生えてきます。鉱物界の場合、それは全宇宙からやって来るこれらの流れの自由な相互作用によって創造されたのだ、ということが分かります。鉱物 - 結晶世界の場合、何も地球から反射されません。すべてがそれ自身の要素の中で反射されるのです。

皆さんが山の中で水晶の結晶を見つけたとしますと、それは普通、垂直に立っており、その基の部分岩の中に埋め込まれています。これは妨害的な要素として働く地球的、アーリマン的な力の介入によって説明できます。実際には、水晶はあらゆる方向からくる精神的な要素の圧力によって形成されるのです。つまり、宇宙空間の中では、反射する結晶面の相互作用による自由な結晶を見ることができません。そのすべての結晶面が完全に形成されたそれぞれの結晶では、それ自身がひとつの小さな世界になっているのです。

さて、多数の結晶形、立方体、八面体、四面体、斜方晶系、十二面体、単斜晶系、三斜晶系等、実際に考え得るあらゆる種類の構造があります。私たちは、それらを検証するとき、いかに宇宙のエネルギーの流れが一点に集中し、相互作用することによって、先端が六角錘になった六角プリズム形的水晶や恐らく立方体の形をした食塩の結晶、あるいは十二面体の形をした黄鉄鉱の結晶が形成されるかを書き留めます。これらの結晶のどれもが今お話ししたやり方で形成されます。そして、宇宙空間には、地球にある様々な結晶の数と同じだけ多くの宇宙的な力が、つまり、本当にそれだけ多くの世界があり、私たちは世界の無限性を洞察し始めるのです。

食塩の結晶を見るときには、精神的な原則が宇宙の中で働いているのが分かります。食塩の結晶は全宇宙に浸透するあの精神的な現実の顕現であり、それ自身でひとつの世界なのです。そして、十二面体を検証することによって、宇宙には空間世界に浸透する何かが存在しているということ、つまり、結晶とはあるひとつの世界全体が刻印され、顕現したものであるということが分かります。私たちはそのそれぞれがそれ自身でひとつの世界であるところの無数の存在を見つめているのです。ここ地上の人間として、私たちは次のように結論づけます。地球の領域とは多数の世界の活動がそこに集中するところの焦点である、と。実に様々な存在の思考と行為がここ地上における私たちの思考と行いの中に映し出されています。結晶形態の無限の多様性の中に見られるのは、結晶の数学的 - 空間的な形態の中にその活動の頂点が見いだされるところの多様な存在による表現です。私たちは結晶の中に神の存在を認識するのです。この宇宙の崇高な秘密が私たちの魂を捉え、宇宙に対する尊敬や崇拜の感情として現れることの方が、純粋に知的な基盤から理論的な知識を集めることよりもはるかに重要なことなのです。

人智学は、この「宇宙とひとつである」という感情へと導くものであるべきです。人は、人智学を通して、神的存在が織りなす働きをどの結晶の中にも知覚することができるようになるでしょう。そうなれば、宇宙的な知識と理解が人間の魂全体に溢れ始めます。人智学の使命とは、知的な能力だけに訴えるのではなく、人間全体を照らし出し、彼が全体として宇宙に包含されていることを示すとともに、宇宙に対する尊敬と崇拜の念を彼の中に呼び起こすことなのです。世界の中のいかなる対象にも、いかなるできごとにも、人間の心と魂から出る無私なる奉仕の精神が向けられるべきです。その無私なる奉仕に対しては知識や理解という報償が与えられるでしょう。

私たちは、すべてであるところの宇宙と関わりを持ち、結晶 - 鉱物世界の顕現として個々の結晶が現れてくるのを見るとき、満足感に満たされます。しかし、既にお話ししたあの恐怖と不安の状態がたちまち戻ってきます。神的に秩序づけられた結晶の世界を見いだす以前、私たちは恐れに満たされていました。神的なインスピレーションを受けた世界に気づくとき、この不安の感情は消え去るのですが、しばらくすると不思議な胸騒ぎが私たちを捉え、恐怖が、つまり、結晶の形成過程全体が実体のないものであり、それはただ部分的な支えを提供するに過ぎない、という感情が戻ってくるのです。

既にお話しした二種類の結晶、食塩と金属の結晶である黄鉄鉱を例として取り上げてみましょう。黄鉄鉱は、私たちにしっかりと支えを提供することができる、つまり、それは堅固で耐久性がある、という印象を与えます。一方、食塩の結晶はいかなる支えにもならないように見えます。それは実体がなく、私たちはそれを突き抜けて落下してしまうかのようです。

ですから、要するに、ある種の形態に関しては、一度私たちを捉えた恐怖、つまり、地球が無になり、深淵の上に吊り下げられているという恐怖は最終的には克服されていなかったのです。この恐怖の感情ははっきりと道徳的なものを示唆しています。この恐怖が戻ってくるとき、私たちは私たちが過去に犯したすべての罪ばかりでなく、これから犯す可能性のある罪にも気づかされることとなります。

このすべては私たちを引きずり下ろす鉛の重りとして働き、鉱物の結晶が今にも私たちを飲み込もうとして私たちの前に広げる深淵の中へと私たちを投げ込む恐れがあるものです。この時点で、私たちはさらなる経験に備えて準備していなければなりません。私たちの経験の総和は私たちが勇気を持つことを要求している、ということが分かります。そして、私たちは確信を持って次のように宣言します。私はしっかりとつなぎ止められている、私は自分が繫留されているところから漂流したりしない、私という存在の重心は今や私自身の中にあるのだ、と。

私たちの人生全体を通して、結晶の世界に直面し、利己主義という鉛の重りが - そして、利己主義とはいつでも道徳的な罪なのですが - 魂の上ののしかかる瞬間ほど、自信や道徳的な勇気が必要とされることはありません。その上に私たちが吊り下げられているあの透明な無の空間が今や私たちに対して恐ろしい

警告を發します。もし、私たちがしっかりと立ち、自信を保っているとすれば、私たちは次のように言うことができます。私の中には神の火花がある、私は消えたりしない、何故なら、私は神的な本質に与っているのだから、と。もし、このことが単なる理論的な確信ではなく、具体的な経験になるならば、私たちは自足し、自分自身の足で立つ勇氣を持つこととなります。私たちは決意し、さらに先に押し進むための準備を整えたのです。

さて、私たちは、鉱物界に関して、さらに何かを学びます。私たちはこれまで鉱物の結晶についての話を聞いてきました。私たちは既にその外的な形態について議論しましたが、今や、その組成や構造、その実質や金属性について気づくとともに、ある種の基本的な金属がいかんにかの仕方で安定化させる要素として働くかを見いだします。今、私たちは初めて、人間がいかんにか宇宙と関連しているかを理解し始めるのです。私たちは、様々な金属の特徴、鉱物存在の実質について学び、そして、先ほど触れたあの私たちの中にある重心を本当に感じ始めるのです。

これからお話しすることに関しては、鉱物界を記述する用語をどうしても使わざるを得ないのですが、それを言葉の上だけで受け取らないようにして下さい。私たちが心臓や頭について語るとき、常識的な見方では、物理的な心臓や頭が魔法のように現れるのですが、それらはちろん起源としては精神的なものです。ですから、私たちが人間をその全体性において、つまり、体と魂と精神から構成されている実体として見るとき、彼の重心は心臓にあるというはっきりとした印象が得られます。この中心は、彼を極端に走ることから守り、彼が外的な状況によって翻弄されることを防ぐとともに、彼に安定性を付与します。もし、私たちが、先ほど触れたあの勇敢な精神を保つとすれば、私たちは、結局は、自分がしっかりと宇宙につなぎ止められているのを見いだすことになるのです。

意識を喪失している人はそのようにしっかりととはつなぎ止められていません。もし、彼が魂にショックを受けた状態 - と申しますのも、そのような条件下では、彼は普通よりも痛みを感じやすくなっており、結局のところ、痛みとは内的な感情が増幅されたものであるからなのですが - であれば、彼は普通の意識状態にはありません。痛みのある状態では、通常の意識は排除されるのです。人は生まれてから死ぬまでの間、一種の中間的な意識状態の下で生きているのですが、これは日常生活における通常の目的にとっては都合のよいことでしょう。ところが、この意識があまりにも弱く、あまりに希薄なものになれば、彼は気を失います。もし、それがあまり濃厚に濃縮されるならば、結果として痛みが生じるのです。気絶状態で意識を失うこと、そして、痛みの影響で緊張状態にあること、これらは正常からはずれた意識状態における両極端を示しています。これらは、正に、私たちが鉱物的な結晶の世界の実質に気づくようになる以前のその世界に対する私たちの反応、つまり、一方では、気絶状態において、自分が絶えず宇宙の中に解消されてしまうかのような感情、他方では、痛みの影響下で、自分が崩壊してしまうかのような感情を示しているのです。

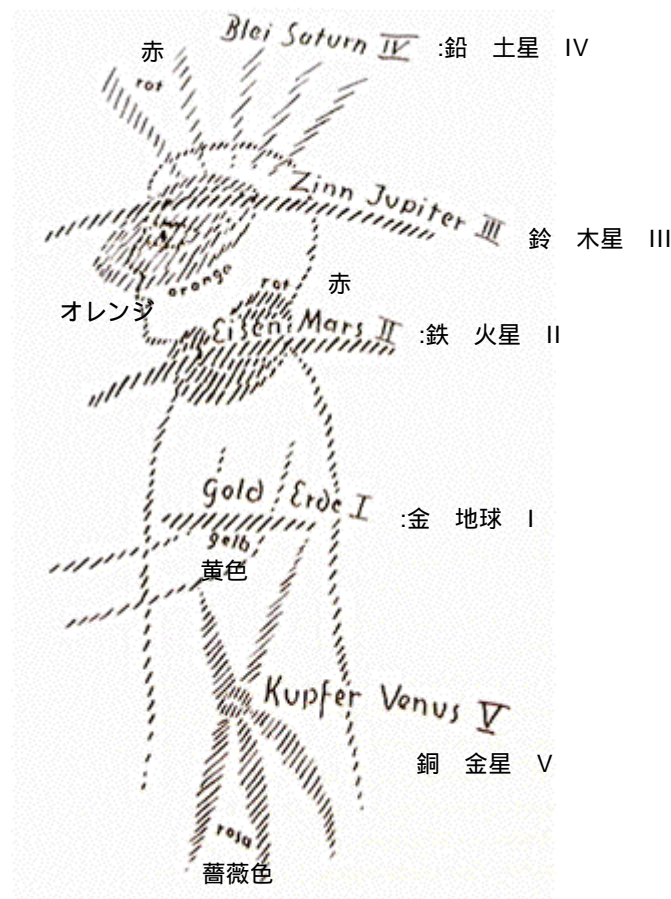
そのとき、安定性を付与するあらゆるものが心臓の領域に集中していると感じられます。そして、もし、私たちが既に示されたレベルにまで自分の意識を發達させているならば、通常が目覚めの意識を支えているのは、つまり、いくらか粗雑な表現になりますが、それを「当たり前」ものにしてしているのは、地球上に細かく分散し、他のどの器官に対してよりも特に心臓に対して直接的に働きかけるところの金、金元素である、ということが分かります。

以前、私たちは、鉱物の形成、結晶化に関する知見を得ました。今や、その実質、その金属性を知るとともに、いかに金属質が人間そのものに働きかけるかを認識します。

外的には、鉱物界において金属が結晶として形成されるのが見られます。内的には、地球上に細かく分散した金の力が、私たちの心臓を維持し、日常生活における私たちの通常の意識を支えている、ということが分かります。金は人間の心臓という中心点に働きかけるのです。この知見を基にして、私たちは今や、私たちの探求をスタートさせる地点に立ちました。もし、私たちが知っているような金属の金を取り上げ、その色や固さ、そしてその成り立ちや構造についてのあらゆる側面に集中するとともに、その経験を内的な現実へと変化させるならば、金は心臓に関係している、ということが見いだされるのですが、別の金属、例えば鉄とその性質に集中するならば、私たちは鉄が私たちにどのような影響を及ぼすかを見いだすこととなります。金には調和をもたらすような、緊張と対立を解消させるような効果があることのために、人はそれによって平衡状態を取り戻すのです。もし、私たちが、金のすべての側面に精通した後、鉄に心を集中させるならば、つまり、宇宙全体を忘れ去り、鉄という金属だけに集中することによって、いわば内的

に鉄と溶け合い、それとひとつになるならば、私たちはあたかも自分の意識が心臓の領域から上方に移行するのようになります。意識が心臓から喉頭へと上昇するのを追っていくときにも、私たちは全く意識的であり、十分に精神的な訓練を遂行していれば、何も害はありません。そうでなければ、多少のめまいを感じます。私たちの意識が上昇するとき、私たちは、強力な内的活動、高められた意識を発達させている、という事実によってこの状況を認識します。そのとき、私たちは、この上昇する意識の中に徐々に自分を移行させ、動物の集合魂が見られる世界に接触します。鉄の金属性に集中することによって、私たちは今やアストラル界に参入するのです。

私たちが金属の形態に精通するとき、私たちはより高次の精神的な存在たちの領域に至ります。つまり、金属の実質と金属性に精通するとき、私たちはアストラル界、すなわち魂の世界に参入するのです。私たちの意識が喉頭へと上昇するとともに、私たちは新しい領域の中に現れ出ますが、このような意識の移行が起こるのは鉄に意識を集中したからです。私たちはもはや自分が以前と同じ人間であるとは感じません。もし、この状態が十分に明晰な意識の中で達成されるならば、私たちは、それまでの自分の自我を超越し、エーテル界に参入したと感じます。地球は消滅し、私たちにとって興味のないものになります。私たちは惑星の領域に上昇し、そこをいわば私たちの住居にします。このようにして、私たちは徐々に私たちの肉体から退き、宇宙の中に組み込まれるようになります。金から鉄への道は宇宙へと続く道なのです。



金と鉄に次いで、私たちは錫に、つまり錫の金属性、その色や実質に意識を集中し、それによって私たちの意識が錫と全く同一視されるようになります。私たちは今や、意識がさらにもっと高いレベルに上昇するのを感じます。もし、私たちが十分な準備なしにこの段階に取りかかるとすれば、ほぼ完全に気を失い、ほんのわずかな意識の兆候も残らない、ということになるでしょう。もし、前もって十分に準備していたとすれば、この減退した意識状態の中でも自分を保持することは可能なのですが、意識が体からさらに遠くに退き、最終的には両目の間にある領域にまで達するのが感じられます。宇宙の広大な広がり私たちが包み込むのですが、私たちはまだ星の領域の中にいます。とはいえ、地球は遥かな星のように見えはじめます。そして、私たちは、地上に体を残してきたのだと、宇宙へと上昇し、星々の営みに与っているの

だと確信します

このすべては決してそのように聞こえるほど単純なものではありません。皆さんにお話ししたような秘儀参入の道に従うときに経験すること、すなわち、意識は喉頭や頭蓋底部、あるいは眉間にあるというようなことは、これらの様々の意識が人間の中にはいつでも存在している、ということを示しています。ここにお座りになっている皆さんのすべてが皆さんの内にこれらの意識状態を有しているのです。しかし、皆さんはそれに気づいていません。それは何故でしょうか？ そうですね、人間とは複雑な存在です。それは、もし、皆さんが、喉頭組織全体に意識的である瞬間に、脳と感覚器官なしですませることができていたとすれば、皆さんは決してこのぼんやりとした感情、かすかで無意識的な感情から自由ではなかったであろうからです。そして、それは実際にそうなのです。それは単に通常の心臓意識、金の意識によって覆い隠されているのです。それは皆さんのすべてが共通して持っているものであり、皆さんを人間として成り立たせているものの一部なのですが、皆さんを構成するところのこの意識に与る部分は星々の中に存在しており、地球上には全く存在していないのです。

錫の意識は遙かな宇宙の中に横たわっています。地球が皆さんの唯一の住居である、というのは真実ではありません。皆さんの意識を地球につなぎ止めているのは心臓です。その中心を喉頭に有するところのものは宇宙の中に存在しています。さらに遙かな宇宙の中に位置しているのはその中心を眉間に有するところのもの（錫）です。鉄の意識は火星の領域を包含し、錫の意識は木星の領域を包含しています。金の意識においてのみ、皆さんは地球に属しています。皆さんはいつでも宇宙に織り込まれているのですが、金の意識がこのことを皆さんから覆い隠しているのです。

もし、皆さんが鉛もしくは同様の金属について瞑想し、そこでもやはりその実質と金属性に集中するとすれば、皆さんは完全に体を棄て去ることになります。皆さんの肉体とエーテル体は確かに地球に取り残され、奇妙で遠くかすんだもののように見えます。岩の上ののった石ころが岩にとっては何の興味もないものであるように、皆さんにとってそれらは何の興味も起させないものです。意識が頭頂冠（頭蓋の縫合線）を通して、体から抜け出しているのです。宇宙の中では、どこを見ても微量な量の鉛、鉛の風味がいつでも見いだされます。この意識形態は遙かな空間へと達します。そして、頭蓋にその中心を有する意識によって、人はいつでも完全に無感覚の状態に留まるのです。

人間がその中で習慣的に生きているところの幻想状態を思い描いてみてください。人間は、机の前に座って計算をしたり、文章を書いたりするとき、頭を使って考えているかと思いたがるものです。実際はそうではありません。地球に属しているのはそのようなものとしての頭ではなく、その物理的な側面です。頭部意識は喉頭から上へと、遙かな宇宙にまで広がっています。宇宙が顕現するのはただ頭部中心においてのみであり、誕生から死までの皆さんの人間としての条件を決定するのは心臓中心なのです。皆さんがよい文章を書くか下手な文章を書くか、皆さんの利益が隣の人の不利益になるかどうか、このようなことは心臓中心によって決まります。人間の頭部意識が地球だけに限定されていると考えるのは全くの幻想です。何故なら、頭部は、実際には、永続的な無感覚状態にあるからです。他の器官がそれから解放されているところの痛みによってそれが奇妙に苦しめられるのもこの理由によります。この点についてもう少しお話ししましょう。現在の状況において、私たちがこの状態になる理由を見いだそうとするときには、私たちは、自分の知的な意識が根絶やしにされる、つまり、意識全体が崩壊し、完全な無感覚状態に陥る、という精神の側からの絶えざる危険にさらされることとなります。

そのとき、私たちが人間について思い描くことができるのは次のようなことです。人間は喉頭（鉄）において、動物界の元型にまで達する意識を発達させます。それは星々に属する意識ですが、通常の生活においては、私たちがそれに気づくことはありません。より高いところでは、植物界の元型に関する意識が両目の領域（錫）にあり、下方にはそれを映し出すイメージがあります。すべての頂点に冠せられるのは土星の領域に達する鉛意識の中心ですが、その頭部中心は私たちが書く記事の内容には注意を払いません。それらは心臓中心の産物なのです。とはいえ、頭は宇宙空間で起こっていることを完全に意識しています。地上の出来事や活動についての私たちの記述は心臓に発するものですが、一方、頭が集中することができるのは、神的な存在が黄鉄鉱の中に、あるいは食塩や水晶の結晶の中に自らを現すその方法についてなのです。

秘儀参入者の意識がここにいる聴衆の皆さんをざっと眺めるとき、皆さんは私の話すことを皆さんの心臓で聞いている、その間、皆さんが有する三つのより高次の意識は外なる宇宙にある、ということが明ら

かになります。宇宙は通常の地球意識に知られているような活動とは完全に異なる階級に属する活動の舞台なのです。宇宙の中で織りなされるもの、特に、そこで活発にされ、遠くに、そして広範に放射するものの中で私たちのために織りなされるものとは、私たちの運命の織物、私たちのカルマなのです。

こうして、私たちは、人間の宇宙に対する関係を通して、徐々に彼を理解するようになりました。つまり、私たちは、いかに彼が外的な世界と根元的な関わりを持っているか、いかに外から根絶やしにされる危険、無感覚へと還元される危険に曝されているか、そして、結局のところ、いかに心臓によって支えられているかを理解するようになりました。

他の種類の金属について瞑想するときの私たちの精神的なアプローチは異なっています。私たちは銅についても鉄、錫、そして鉛について行ったのと同様の手続きを踏むことができます。私たちは、銅の金属としての性質について瞑想するとき、いわばそれと溶け合い、ひとつになります。そのとき、私たちの魂全体が銅によって、つまり、その色や密度、その奇妙な筋の入った表面によって浸透されます。要するに、私たちは、銅の金属性に対する私たちの魂的な反応と完全に同一視されるようになるのですが、そのとき、私たちが経験するのは、無感覚への段階的な移行ではなく、むしろその反対です。私たちは私たちの内的な存在全体が何かで溢れるという感覚を持ちます。つまり、私たちの反応はより鋭敏になるのです。私たちは、銅について瞑想するとき、それが私たちの存在全体に浸透する、というはっきりとした印象を持ちます。それは心臓より下にある中心から放射し、そして、体全体に分散します。

自分の中に第二の体、第二の人間を有しているかのようです。そして、内的な圧力を感じます。このことはいくらか痛みを伴うのですが、それは徐々に増加します。あらゆるものが内的な緊張状態にあるかのようです。

秘儀参加者の意識を持ってこの状態に向き合うとき、私たちは自分の中に第二の人間の存在を感じます。そして、この経験は重要な示唆を含んでいます。と申しますのも、私たちは自分に次のように言うことができますからです。誕生と教育の産物であり、世界を理解するための道具であるところの通常の自我は、我々の人生を通して、我々とともにある。しかし、今や勢いを得たこの第二の人間の中に、訓練と瞑想を通して、その知覚能力を目覚めさせるのだ、と。この第二の人間は実際、特筆すべき存在です。彼は目と耳を別個のものとして有しているではありません。そうではなく、それ自体が同時に目であり耳である存在なのです。彼は繊細な知覚能力を有する感覚器官に似て、私たちが通常は知覚しないものを知覚します。私たちの世界は突然、豊かなものになるのです。

ちょうど蛇が脱皮するように、わずかの間 - そして、その2、3秒の間に多くのことが経験されるのですが - とはいえ、この第二の人間、「銅」人間は体を脱ぎ捨て、精神世界を自由に動き回ります。痛みが増すという代償を払ってですが、彼は体から離れることができます。体から離れるとき、さらに幅広い経験が得られます。体を捨て去ることができる地点にまで達しているならば、死の門を通過した人を追っていくことが可能になるのです。

その場合、亡くなった人と私たちとの地上的な関係は今すべて終わりを迎えます。彼は埋葬されるか荼毘に付され、地球との関係を断ち切りました。私たちが第二の人間とともに、つまり、超感覚的な知覚とともに体を捨て去るとき、死後の魂が迎える旅路を追っていくことが可能になります。そして、私たちはそのとき、その魂が死後の最初の何年あるいは何十年かを、地上における人生を逆向きに辿りながら過ごす、ということを知ります。これは観察することができる事実です。何故なら、私たちは死の門を通過してその魂を追っていくことができるからです。私たちが人生を要約するのにかかる時間は人生の三分の一の長さです。60歳で死ぬ人はおよそ20年かけて人生の経験を要約することになるでしょう。私たちは彼の魂をこの期間を通じて追っていくことができます。私たちは今や、死後に迎える人間の経験について多くのことを知ります。人生を要約するとき、その経験は逆向きになります。いくらか粗雑な例をあげることをお許しいただきたいのですが、皆さんが死ぬ三年前に誰かの横面をひっぱたいたとしましょう。皆さんは彼にうんざりしていたので、怒りを爆発させ、彼に物理的、道徳的な痛みを与えました。皆さんは彼が自分を怒らせたという理由で彼に与えた罰によって一定の満足を得ました。さて、皆さんは皆さんの人生を逆向きに要約します。一年後にこのエピソードのところに戻ってきたとき、皆さんは元の怒りの爆発ではなく、その爆発の餌食になった人の物理的、道徳的な痛みを経験します。皆さんは正に彼の感情の中に入り込み、その横面の手形を物理的に経験するのです。つまり、皆さんは皆さんが与えた痛みを体験するのですが、同様のことはあらゆる行いにあてはまります。皆さんはそれに巻き込まれた人が経験することをそ

の通りに経験します。人間の魂が死後に通過するすべてのそのような経験を追っていくことができるのです。

その文化的な衝動を秘儀の教えに負っていた古代カルディア人たちは、これらのことに関して、今日の人間よりもはるかに深い洞察を有していました。注目すべきは、今日の私たちが心臓意識の中で生きているのに対し、当時、これらの古代カルディア人たちは実際、喉頭意識の中で生きていた、という事実です。彼らにとって自然な意識とは一種の鉄意識だったのです。彼らの経験は宇宙に関連していました。彼らにとって地球は、今日の私たちにとってそうであるようなしっかりとした一貫性を有していませんでした。彼らがある特別に好ましい条件下、例えば、火星存在との親しい交わりの中で生きるとき、私たちが第二の人間の意識によって知覚するような存在たちを伴って、ある存在たちが月からやってくる瞬間がやって来ました。カルディア人たちは死後の生活に関する崇高な真実をこのように間接的な仕方でも知りました。つまり、彼らはこれらの真実についての教唆を外なる宇宙から受け取ったのです。

仲介者の助けなしに死者を追っていくことができる今日の私たちにとって、そのようなことはもはや必要ではありません。私たちは彼らの経験を逆の順番に、そして、それぞれの経験を逆方向に辿ることができるのです。そして、私たちが、この第二の人間と同化するとき、現象世界よりもはるかに現実的な世界に自分が置かれているのを見いだす、というのは不思議なことです。現在のこの世界とそこにおける私たちの経験の総計は私たちが今参入する堅固で厳格な事実の世界に比べると実体がないように見えます。

今お話ししたような仕方でも死者に同伴するとき、私たちはあらゆることさらに増幅したスケールで経験します。つまり、あらゆることさらに強烈に現実的なものとして現れるのです。それに比較すると、現象世界は漠とした印象を残します。秘儀に参入した意識を通して死者の世界に関係する人にとって、現象世界は色のついた仮面舞踏会のようなものです。瞑想を通して秘儀に参入し、死者とこのように密接な関係を持った人は次のように言うでしょう。お前たちは皆、色のついた仮面だ。お前たちに現実性はない。ただ色のついた仮面が椅子の上に座っているのだ、と。

真の現実とは物理的な存在領域を越えたところにのみ見いだされるのですが、その現実とは、今、ここで経験することができるのです。恐らく皆さんの何人かは私の神秘劇に登場するストラダーという人物を覚えているかも知れません。この役柄は実在の人物に基づいています。ストラダーは一九世紀の最後の三分の一から二十世紀にかけて生きた人物の詩的で非現実的な側面を表現しています。彼は実際の人生において非常に興味深い男でした。彼の人生の出発点はカプチン修道士会の見習いでしたが、哲学のためにその職業を捨て、しばらくの間ドルナッハの修道院に滞在しました。私は彼を神秘劇の中でストラダーに仕立てたのです。それは彼を忠実に再現したものではありませんでしたが、ある程度似たところがありました。覚えておられるかと思いますが、神秘劇第四番でストラダーは死にます。私は、彼のキャラクターをさらに展開するための可能性をすべて使い果たしていたために、彼を死なせるより他になかったのです。もし、彼を生かし続けようと試みていたならば、私はペンを取ることができなかつたでしょう。神秘劇の第五番に彼が再び登場する可能性はなかつたのです。何故そうだったのでしょか？

その役割を僧から哲学者へと変えていた当の人物はその間に亡くなっていました。そして、私は、その人物に対して深い興味を抱いていたために、彼の旅路を精神世界を通して追っていくことができたのです。彼の人物像によってもたらされるそこでの印象ははるかに現実的なものでした。彼の地上における生活と活動は、彼の死後の生活における経験に与ることができる今となっては、もはや私にとって同様の興味を起させるものではありませんでした。

そのとき、奇妙なできごとが起こりました。何人かの人智学徒がこの次第にはたと気がついたのです。彼らは - 人間の手のよさに際限はありません - ストラダーがある程度歴史的な人物の横顔であることを見つけたのです。彼らはその探求の過程で彼の未公開の原稿や彼が書き残していたあらゆる種類の興味深い書類を発見しました。彼らはその発見に私が大喜びするものと思って、それを私のところに持ってきたのですが、それは私にはほとんど興味のないものだったので。一方、私が本当に興味を持っていたのは彼の死後の行為でした。このずっとはるかに現実的なものに比べれば、彼が後に残していった外的な世界に関するあらゆるものは私にとっては何の意味もないものだったので。

それほど骨を折って集めた情報ですが、私がほとんど興味を示さないのに人々は驚きました。しかし、そのとき私はそれを必要としていなかったのです。そして、今も必要としていません。この世界の現実とは、私たちが死の門を通った魂を追っていくときに明らかになるあの崇高な現実と比べれば、空虚なもの

である、というのは本当のことです。その魂が死の門の向こうで滞在しているのは、私たちが、肉体を捨て去ることができる第二の人間と同化するとき、短い間とはいえ経験することができる世界です。しかし、その短時間の間に、私たちは多くのことを経験することができます。

現象世界に直接その境を接するこの世界の存在は全く疑いのないものです。それは死者たちがより豊かに生きる世界です。私たちは肉体を放棄するこの第二の人間を通して彼らを理解するのですが、それは、意識を喪失したというよりも、むしろ私たちの意識がより深く融合したということです。

もし、私たちが心臓中心よりも上に上昇するとすれば、私たちの意識はよりぼんやりとしたものになり、無意識の状態に近くなります。もし、私たちが心臓中心よりも下に下がるならば、私たちの意識は強められます。私たちは現実の世界に参入するのですが、その結果として必然的に生じる痛みや苦しみに耐えることを学ばなければなりません。とはいえ、もし、私たちがこの世界を取り囲む壁を勇気と決意を持って突破するならば、その参入は確かなものになるでしょう。

私たちは今や、通常の日常的な意識、喉頭にあける第二の意識、両目の領域における第三の意識、頭頂部における宇宙に達するところの第四の意識、そして、空間世界とは関係を持たず、時間の世界に私たちを連れ戻すところの第五の意識についての理解へと至りました。この第五の意識レベルを達成するとき、私たちは死者たちと同じ逆向きの時間軸を共有し、時間の中を旅することになります。私たちは空間から出て、時間の中へと足を踏み入れたのです。

ですから、すべては私たちが私たちの前に新しい世界を開示する別の意識状態の中に自分自身を移すことができるかどうかにかかっています。地上における人間はひとつの隔離された世界の囚人です。何故なら、彼はたったひとつの意識状態しか知らず、他のすべての意識において、眠りの状態にあるからです。もし、私たちがそれらを目覚めさせ、発達させることができるならば、私たちは別の世界を経験することができます。

人間はその意識を変化させることによって、自分自身を変化させることができる、というのが精神的な探求における秘密です。通常の方法による探求や研究によって別の世界へと貫き至ることはできません。私たちは、変容を遂げ、意識を通常とは別の新しい形態へと変化させなければなりません。

第四講

意識の変容による別世界への探求の秘儀

人間の様々の意識レベルに関係する限りにおいての鉱物界の形態、実質、金属性についてお話ししましたが、ある種の金属実質にまで観察を広げる前に、私の立場を完全に明確なものにしておかなければならないでしょう。

私がお話したことから容易に想像されるのは、通常とは異なる意識状態を引き起こす方法として、私がかこれらの物質を栄養の形で摂取することを推奨しているのではないかと、ということかも知れません。内的な訓練と規律によって精神的な洞察を達成する方法について議論するとき、しばしば耳にするのは次のような言葉です。別の世界の事物や他の意識状態について知るのは大変結構なことだが、推奨されているような訓練を実行するのはあまりに難しすぎ、時間がかかりすぎる。

多分、このような人々は、その内、訓練を始めるのですが、しばらくすると、生活上の直接的な要求が介入してきます。彼らは自分に染み込んだ習慣を犠牲にたくありません。次第に情熱を失い、訓練はいつのまにか止んでしまいます。これらの人々が何も達成しないのは驚くにあたりません。彼らは、精神的な訓練をする必要があるというのにはあまりにも退屈なことであると考えています。

彼らは、例えば、ある種の金属の性質が別の意識レベルに関係している、というようなことを聞くと安心します。死者との精神的な絆を保つためには若干の銅を摂取するだけでよいならば、そうしない手はない、それでより高いレベルの意識を発達させることができるならば、と考えるのです。

当時は、当然のことながら、秘儀参加者によるつききりの指導の下に行われた、という違いがあったにせよ、古代の秘儀において採用されていた訓練も大体同じようなものだったと聞くと、よけいにその考えが魅力的なものになります。そして、彼らは、このようなことを聞くと、どうしてこれらの古い訓練を復活させないのかと不思議がります。けれども、彼らは、人間の肉体的な組織全体が当時は今とは異なって構成されていた、という事実を見落としています。その当時、そして、カルディア時代に至るまで、彼らは現在の私たちのような知性を欠いていました。考えは今日のように自ずと浮かんできたのではなく、インスピレーションを通して彼のところにやってきました。ちょうど今日の私たちが、自分でバラの赤色を創造したのではなく、バラの印象を外から受け取っているのだということに気づいているように、古代の人々は、思考が外的な対象物を通して伝達されているということ、つまり、思考が彼らに吹き込まれ（イン-スパイアされ）ているということに気づいていました。これについては、彼らの肉体組織が、そして血液の組成さえもが異なって構成されていた、ということの中にもその根拠を見いだすことができます。そのため、人々が精神的な訓練を遂行するのを助けるために、私がお話した金属を高度に効能化した形で、つまり、今日、私たちがホメオパシーと呼ぶ処方にしたがって服用することが可能だったのです。

カルディア時代の人間が高度に効能化された銅を処方されたらと想像してみましょう。彼はそれを服用する前に - 当時、よくやられたことですが - ある特別な精神的訓練を遂行するように指導されました。そのような場合には、高度に効能化された銅を摂取する前、何日間というより、何年にもわたるトレーニングが要求されました。そして、彼は、その肉体的な構成が私たちのものとは異なっていたために、その訓練を通して、彼の血流に乗って循環するこの細かく分散し、高度に効能化された銅が彼の上半身に及ぼす働きを辿ることを学びました。この注意深い訓練の後、銅が処方されたとき、彼は彼の言葉にあたたかさが付け加えられた、という内的な感情を持ったのですが、その理由は、彼自身が彼の喉頭と喉頭から脳に導く神経の中にあたたかさを生じさせていたからです。

さて、彼は、彼の肉体的な成り立ちが異なっていたために、彼の中で起こっていることに対して、非常な感受性を持って反応することができました。もし、今日、誰かが高度に効能化された銅を同じような条件下で服用するとしても、もちろん効果があるでしょうが、喉頭への作用以上のものは生じないでしょう。

このように、当時の人間の肉体的な成り立ちは今日の人間のそれとは異なっていた、ということを理解することが重要なのです。そうすれば、古代においては普通に行われ、中世においてもなおしばしば行われたやり方であったとしても、薬剤を服用することによって別の意識状態を生じさせようなどとは誰も思わなくなるでしょう。

現時点において唯一の有効な方法は、昨日お示した銅の本性を、その本質的な存在を内的に感じ取り、

それによって、磨かれた銅の色や硫酸銅溶液中の銅の振る舞いに対する敏感な反応を発達させることなのです。この反応に集中し、それについて瞑想することによって、この反応が正しく行われていることを確認することができるでしょう。

しかし、皆さんは次のように反論されるかも知れません。私の本、「より高次の世界の認識」には、この銅に対する反応を発達させるためにはどのような準備段階を踏むべきかについての示唆がなされていないではないか、と。それはそうなのですが、原則的には、私の本の中で、銅について特別に触れられてはいませんが、方向性は与えられています。人はどのようにして結晶や植物等の存在の中に入っていきべきかについての記述があり、その予備的な訓練法が示されています。けれども、もちろん、銅の本性についてどのように瞑想すべきかについての情報は与えられていません。そのためには一冊の本、というよりひとつの図書館が必要になるでしょう。既に方向性が与えられていることから、例えば、自信を起こさせるための訓練、何か特別な主題や対象に集中するときの訓練もまた必要がありませんでした。そのような訓練は、実際、銅の本性についてお話しした内容によって既にカバーされているのです。銅の本性について瞑想すべきであるということを示唆する特別な記述はありません。朝夕に瞑想するという目的のためには、何か単純な主題やテーマが選ばれるべきである、ということが示唆されています。それは銅の本性について瞑想するのと同じなのです。それは単にその金属としての性質を引き合いに出すような瞑想のための主題として与えられているにすぎません。

「叡智が光の中で放射する」というような何か特別なテーマについての瞑想は、もし、熱心に実行されるならば、内的な生活に決定的な影響を及ぼします。その効果は、誰かが銅の本性をあらゆる角度から探求し、その物理的な側面に集中するとしても同じでしょう。私たちのアプローチは、まず第一に道徳的な立場から、そして、第二に物理的および化学的な立場からなされますが、化学者でもない限り、道徳的な立場から精神世界に参入する方がずっとよいのです。

ですから、ものごとはその正しい関係性において見る必要があります。と申しますのも、今日の人間が、精神世界への洞察を得るために、古代の方法に無批判に従うのは間違いであるかも知れないからです。外的、物理的なアプローチを、より道徳的、精神的なアプローチに置き換える、というのが現代の正しい道筋です。肉体組織の発達とともに自然に対する人間の関係全体が変化しているのです。今日、血液や体液の組成、そして、肉体的な構成全体が古代カルディア時代とは異なっています。このことを解剖学的な分析によって証明することはできません。解剖学者は死体の解剖にそのほとんどの時間を費やす、というのがその第一の理由です。最近、学会は警告を發し、もっとたくさんの死体を、と騒ぎ立てています。解剖学者は生命の隠された秘密を探求するには、死体が不足していると考えているのです。けれども、この調査を遂行するにあたって、カルディア人の死体を調達するのは容易ではないでしょう！ 第二の理由は、その粗雑な技術をもってしては、生命の隠された秘密に対する答えを見いだすことはできない、ということです。それは精神的な方法によって探求されなければなりません。

私たちの肉体が古代人のそれとは異なって構成されていることから、次の点を明確にしておかなければなりません。今日でも、高度に効能化された物質、例えば、金属の潜在力を調製することが可能ですが、その理由は何なのでしょう？ それは私たちが自然の現実的なあり方に対するより深い洞察を有しているからである、というのがその説明です。もし、私たちが人体の本性を本当に理解しているならば、私たちは、その機能が既にお話しした金属 - 錫、銅、鉛等々 - によって変化させられる、ということを知っています。私は、まず第一に、それらが意識の状態を変化させる、ということを示しました。

しかしながら、今日、私たちはその変化が、いくらか世俗的な表現ですが、普通の生活においてさえ体の中で生じる、ということに気づいています。例えば、私たちが、昨日指摘したあの銅の働きを放射する体の領域において変化を経験すると仮定してみましょう。そのような変化はすべて消化器官の障害の中に、つまり、新陳代謝系の中に - 主として栄養分の代謝、消化や同化に関係する器官の障害の中に投影されます。私たちが病気と呼ぶところの人体組織におけるそのような障害のすべては、異なる意識状態の喚起にも結びついているのです。このことが示唆するものすべてを心に留めておかなければなりません。

さて、有機的な病気の意義とは何なのでしょう？ 私は昨日、今日の人間にとって、通常の状態である覚醒意識は心臓中心にある、と言いました。別の意識状態はその他の器官に関連していますが、それらは絶えず意識下に留まっています。喉頭から脳までの範囲を含む喉頭の領域は、いつでも、昨日記述した通常の状態に連なる意識状態の中で生きています。消化器官近傍の領域は死者と同じ時間軸を共有してい

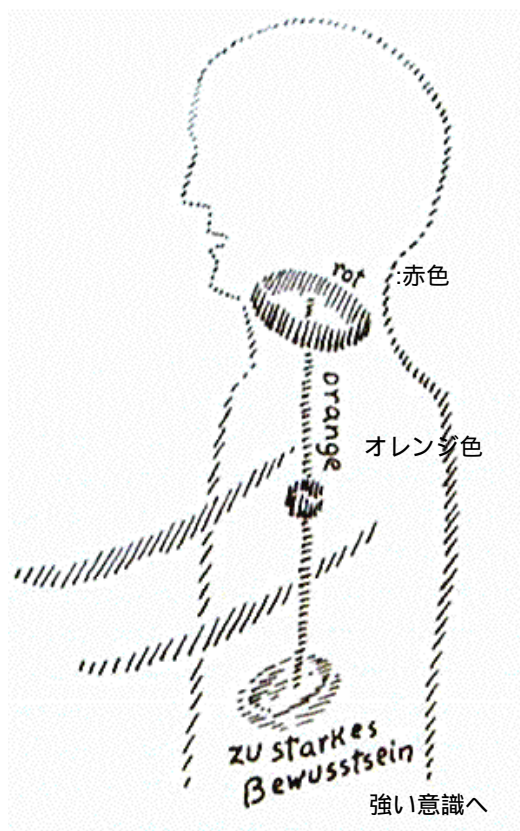
ます。人間は絶えずこの意識状態に与っており、生前、個人的に知っていた人の死後の経験を共有するのですが、それらは心臓においてではなく、心臓の「下」で経験されます。ですから、彼はこの経験について何も知りません。それは無意識の中に、意識の敷居下に留まっているのです。人間が死者と精神的な結びつきを持つそのような領域において、例えば消化不良のような何らかの障害が発生するとき、心臓中心より下の意識が変化し、あまりにも活発に作用し始めるのです。

では、ある種の胃の不調はどのように説明できるのでしょうか？ 物理的な観点から見れば、それは単に臨床医の診断のためのラベルに過ぎません。ところで、ここで提示される観点は決して医学による純粋に物理的なアプローチに反対するものではありません。私はその価値を認め、評価しています。私たちは、人智学徒として、オーソドックスな医学を侮ったり、批判したりする道楽家や素人あるいはいかさま師の態度は取りません。私たちは完全にその発見を受け入れます。誰かが胃の不調を訴えるとき、その兆候を医学的に診断することは可能なのですが、その胃の状態の結果として、彼は死後間もない死者の生活に与ることがより可能になっているのです。もちろん、治療が始まる前には、医学的な診断がなされますが、精神的な立場からは、そのような人は彼が地上で知っていた魂たちとの死後の精神的な結びつき保持する必要性を感じている、と行うことができるでしょう。けれども、彼は心臓の下に横たわる意識の中に入っていくことができません。彼は死者との交わりに気づかないのです。

その種の不調の精神的な側面とはこのようなものです。胃の不調は死者にあまりにも強く引きつけられるために生じるのです。そのような条件下では、人は死者に支配されます。私たちは、昨日示したように、物理世界に比べてずっとはるかに現実的なあの世界からの影響を強く受けているのです。

私たちの前に天秤があると想像してみましょう。針が振れていても、別の天秤皿に負荷をかけることによってゼロの読みが回復されます。あまりにも強く死者に引きつけられ、それに全く気づかないほどこの心臓下の意識に対する異常な感受性を発達させた人に見られる非平衡状態は、一方の側に負荷をかけられた天秤皿に似ています。平衡は反対側に同等の負荷を加えることによって回復されます。

このように、もし、心臓下の意識があまりにも活発であるならば、喉頭の領域における意識を減退させなければなりません。心臓は中央に位置しています。それは調整者であり、その上で天秤棒が振れるくさび形なのです。平衡は銅を服用することによって取り戻されます。今日の人間の体は喉頭が銅に反応するような仕方で構成されている、ということを既に指摘しました。



新陳代謝系と喉頭システムは天秤の両側のように密接に関連しているのです。片方はもう片方によって調整されることとなります。銅が適切に処方されて服用されるならば、患者はいくらか死者の領域から退き、それによって健康を享受する方向に向かうでしょう。そうでなければ、彼はますますその領域に同化します。これが治療の精神的な側面です。

ですから、今日、私たちはすべての物質が物理的な側面と同時に精神的な側面を有している、ということを知っています。昔の秘儀参入者たちは弟子たちのためにその物理的な側面を利用することができたのですが、それはただ弟子たちが広範な訓練を経た後でのことだったのです。今日ではもはや、同じようなやり方でそれを使用すべきではありません。今日、魂を開発するための領域はその道徳的な属性においてであり、物理的な属性は医師の領域なのです。物質の物理的な側面に精通し、それに関する詳細な研究を行う機会を有している人がその情報を物質の道徳的な側面に関する知識によって補う、というのは重要なことです。このことは、現代における知覚や、精神的な手段の分野における知覚にとって、厳守されるべきことです。人間の有機体は時間の経過に伴って根本的に変化してきました。そして、物質の道徳的な側面に関する知識とその物理的な側面に関する知識との間にかつて存在していた密接な関係が失われたのですが、それは再び取り戻されなければなりません。ここで、この失われた関係についてもう少しお話ししましょう。

主として物理的な観点を有する医学と精神科学との間の今日の関係は、遠い過去におけるそれらの関係と同じであるはずがありません。いずれにしても、この関係は続いていくに違いないのですが、それは今日では別の形態を取るようになります。私たちが精神的な探求における真の道と偽りの道を区別することができるかどうかは、そのようなことがらを知っているかどうかにかかっているのです。

知識に対する何世紀にもわたる人間の態度全体を簡単に振り返ってみることは、私が既に議論してきたことに対してさらなる光を投げかけるための助けになるかも知れません。

人類の進化を振り返ってみますと、知識や探求に対する考え方が非常に異なっていたのが分かります。今日、熱力学、電子工学、そして生物という知識の分野で近年になって成し遂げられた途方もない進歩は、自然、自然史、自然科学、そして、英国においては、自然哲学の名の下に分類されています。今日の学校では、自然はきわめて抽象的な仕方では教えられています。自然は「自然法則」 - こういふ言い方をされているのですが - の総計と考えられ、子供たちには期待されているのはそれを覚えることです。そして、この勉強の抽象的な性格は生活の中にまで持ち込まれます。

今日、最も熱心な生徒にとってさえ、自然科学がどんなに冷たく、抽象的なものであるかを考えてみてください。植物学では、植物や植物の種に関する植物学的な一連の用語を、そして、動物学では、動物や動物の種の名前あるいは分類を記憶することが強要されます。彼はすぐにそれらを忘れ、試験のために何度も何度も最初からやり直さなければなりません。そして、しばしば試験が終わればそれらを完全に忘れてしまうために、再びそれが必要になったときには、参考書で調べます。今日の生徒が植物学や動物学に対して、彼が敬愛する人物に対するのと同じ関係を有している、などと言うならば、それは問題外です。

自然は、今日、何かぼんやりとしてはっきりしないもの、重力や熱、電気や磁気の法則、つまり、機械法則のカタログになってしまっています。自然科学が扱うのは石や植物の研究です。しかし、それに加えて、自然科学には私たちが明らかに知らない植物や動物、そして人間の有機体の生命や内的な構成が含まれています。要するに、今日の自然科学や自然哲学は、私たちが知っていると言主張する多くのもの、そして、私たちが全く知らない多くのものを含んでいるのです。

さて、それによって自信を持てるようになるとはほとんど言い難いようなものごとの成り行きとはこのようなものです。つまり、あらゆるものが非常にぼんやりとして、混乱しています。そして、思考は非常に皮相的で抽象的になっています。今日、私たちは、私たちが「自然」と呼ぶところのこの抽象化されたものをマスターしようとして果敢に努力していますが、多くの人がこのアプローチにいくらか無関心になっているのも確かです。そして、自然科学として学校で教えられるものに対して積極的に反抗する若者の世代に属していないとすれば、私たちは好意的な中立の立場を取るようになりますが、いつの時代にもそうであったわけではありません。知識に対する態度が数世紀前にはどのようなものであったかをここで簡単に特徴づけてみたいと思います。

九、十、十一世紀を、そして、十二世紀や十三世紀に至るまで振り返ってみるならば、私たちは、数の上ではかなり少なかったとはいえ、今日でいえば博識者と呼べるような人たち、ベルナルドゥス・シルベ

ストリ、シャルトルのベルナルやアラヌス・アブ・インスリスのような、十一、十二世紀における代表的な学者と判定されるべき人たちが、有名なシャルトルの学院で教えていたのに出会います。当時、これらの人たちはまだ、有名な中世の秘儀参入者、フィオーレのヨアキムやハンビル（ラテン語でアルタビラ）のジョンとして世に知られるあの特筆すべき人物のような秘儀参入者、つまり、存在の秘密に対する奥深い洞察を有していた人たちとの交流を持つことができるほど十分に恵まれていました。

他にも大勢の人たちの名前を付け加えることができるのですが、これらの人たちの名前に触れたのは、その時代の精神を喚起し、当時支配的であった知識に対する態度を特徴づけるためです。

そのような人たちの精神的な観点に参入するならば、彼らの自然についての概念が私たちのそれとは完全に異なっていた、ということが分かります。今日の典型的な植物学者、病理学者、あるいは、歴史学者の場合、その表情は彼の病理学的あるいは解剖学的な神秘に対する深い関心ではなく、前の晩のダンスパーティーでの記憶を反映したものになっています。私たちは自然の神秘について、というよりお楽しみについて、より多くのことを習うのです！

フィオーレのヨアキム、アラヌス・アブ・インスリス、あるいは、ベルナルドゥス・シルベストリの目をのぞき込む、ということは、それとは全く異なることでした。彼らの表情には悲劇が書き込まれていました。彼らは、取り返しのつかない喪失を被った時代に生きている、と感じていました。そして、ますますこの喪失に気づくことで、彼らの心は悲劇的な悲しみで満たされたのです。

そしてまた、その喪失が彼らの顔に書き込まれていたところのあの古代の秘儀を探求したい、という彼らの望みをその場で目撃していた彼らの指、現代の退廃した世界から見れば「神経質」で敏感な指と見なされるであろうような指を見たとするれば、私たちは、過去に存在していた古代の叡智を生き返らせたいというあこがれに気づかされたことでしょう。

彼らの弟子のために、あの古代の場面を魔法のように現出させることができる瞬間がありましたが、それは幻想のような像に過ぎませんでした。

さて、私が皆さんに示そうとしているのは、詩的なファンタジーではなく、事実なのですが、私たちは、今でもすばらしい聖堂が立っているシャルトルの学院において、アラヌス・アブ・インスリスが彼の生徒に向かい、自然について次のように語るのを思い描くことができます。自然とは、それに近づこうとすると離れていく存在である。人は今、別の方向にそのエネルギーを向けるが、かつての聖人たちが有していた自然についての先験的な理解にはもはや与らない。彼らの目には、自然とは精神を付与され、あらゆる場所で - 岩が形成され、植物が地球から生えだし、宝石のような星が天に輝くところで - 働く壮大な存在だった。あらゆる場所で無限に偉大な存在が働いていた。それは自然の織物を編む女性のすばらしい形態の中に自らを現した。古代人たちはこのことを先験的に経験した。彼らの書き記したものから、我々は今でも、彼らの目には、至る所で、つまり熱、光、色、そして、生命の顕現の中で、織りなし働く自然がいかに現れたかを思い描くことができる。彼らは、女神「ナチュラ」が、直接的な知覚を通してのみその真の本質を知ることができるところの神的 - 精神的な存在であるということに気づいていたのだ。

アラヌス・アブ・インスリスのような人物は、シャルトルの学院において、彼の弟子たちに、そのような概念をまだ提示することができました。とはいえ、秘儀参入者たちは、私たちが、女神「ナチュラ」との結びつきを失ったことから、抽象的で生命のないものと見なす自然を、生命と活力に溢れたものとして見ていたために、この古い概念が徐々に薄れ、死に絶えるのを見る彼らの顔には、悲しみと悲劇が書き込まれていたのです。

そしてまた、私たちは有名なダンテの師、ブルネットー・ラティーニのような人物についての話を聞きます。彼は旅の途上で、ある不思議なカルマの事件によって、意識の変化をきたすような発熱に苦しみました。このできごとの重要性は、彼の発達にとって、彼が生まれた町から最後の教皇派が放逐されたときに被った彼の苦しみに比べて、はるかに大きなものでした。彼は、この意識変化のおかげで、まだあの女神「ナチュラ」についての知覚を持つことができ、彼の本「テソレット」の中で彼女について記述することができたのです。彼は、彼の生まれ故郷フィレンツェに向かう旅の途上で、寂しい森のただ中にある丘に行き着き、その丘の上で、いかに女神「ナチュラ」が彼女の織機に向かって織るのを見たかをイメージネーション的、図式的な記述によって表現しました。彼女は、人間の魂にとって、思考、感情そして意志がいかに重要であるかを、四つの気質と五官機能の本質的な性格を彼に明かしたのです。

そして、彼の精神と魂の目が開かれました。抑圧された病理的な状態の影響下で、スペインから彼の故

郷フィレンツェに向かう旅の途上に得られたこの経験はひとつの精神的な現実でした。この内的な変容の結果として、彼は四大 - 火、地、水、そして空気の織りなす生命、惑星の流れと動き、そして、体から出て宇宙の中に現れる魂を見ました。彼はこのすべてを女神「ナチュラ」自身による精神的な教えの影響下で経験したのです。

これらの経験は、当時の人々によって、今日、それよりも改善されているとはほとんど言えないような明晰さと具体性をもって記述されました。彼らは同時に、古代の人々がこの知識を別の方法で経験していたということ、そして、時の経過とともにそれは徐々に失われた、ということを感じていました。これらの秘儀に関する知識を復活させるためには、病的な状態を起こさせる必要があったのです。そして、彼らは、「ナチュラ」の真のイメージを生き生きとしたものに保ちたい、という押さえがたい衝動を感じていました。

そして、人間の自然認識に対する態度全体を振り返ってみるとき、私たちは、私たちの自然に対するアプローチが抽象的であることを、自然が法則の一覧表になっているのを感じます。私たちがこれらの法則をある程度でも全体的に関連づけられたものとして見ることができるとすれば、私たちはそれを誇りに思うかも知れませんが、二、三世紀前を振り返ってみるならば、自然現象の中で - 昇りそして沈む太陽の中で、石や植物に伝わる熱、すべての命あるもの、成長し、繁殖するものの中で活発に働くような熱の中で - 生き、織りなし、そして働くところの神的な存在と人間との間には生きた関係があった、ということが分かります。女神「ナチュラ」の活動を考慮する科学とはそれほど異なったものでした。講義を終えてシャルトルの学院から出てくる学徒たち - その大半はシトー修道会員だったのですが - の気分は、今日、講義室から出てくる学生たちの気分とは大分違っていたのです！ 彼らの反応は絶対的に生き生きとしたものであり、その内的な存在の表現だったのです。そして、有名なダンテの師、ブルネットー・ラティーニのような人たちが書き記したのものの中には、これと同じ生きた現実が映し出されていました。その生き生きとして創造的な時代の精神を容易に想像することができるのは、ダンテの「コメディア」における特徴によってですが、そのすばらしく絵画的な記述は、カルマ的なできごとのおかげで秘儀に参入していた彼の師、ブルネットー・ラティーニによる図式的な記述からインスピレーションを受けたことによります。そして、シャルトルの学院やその他の学院は、当時授けられていた教育の多くを、フィオーレのヨアキムやその他の秘儀参入者たちに負っていたのです。

「ナチュラ」という言葉は抽象的な意味で使われていたのではありません。それは外的に感覚知覚可能な現象の中で創造的に働いていたにもかかわらず、ヴェールがかけられ、人の目に触れないままに留まっていた何かを示していました。

あるいはまた別の要素も考慮されなければなりません。ここでもまた、詩的な想像ではなく、基本的な現実を記述することになるのですが、皆さんが古参の学生としてアラヌス・アブ・インスリスの講義に出席し、議論に参加していたと仮定してみましょう。学生たちが去った後、皆さんは色々な問題について議論しながらアラヌス・アブ・インスリスと二人だけで歩いています。

会話がある特別な点、つまり、現象世界の中に自らを現すとはいえ、皆さんからは隠されている女神「ナチュラ」についての話題に及んだとします。そのとき、議論に熱中していたアラヌス・アブ・インスリスは次のように語ったことでしょう。もし、我々が、眠りの生活において、かつて太古人たちが有していた状態に今でも与っていたとすれば、自然の隠された側面と我々との交渉は保持されていたであろう。我々の眠りは忘却へと導くが、古代人たちは正に無意識において、自然の隠された側面と接触していたのだ。もし、我々が、古代人たちの超感覚的な眠りを再び経験することができるならば、我々は女神「ナチュラ」を知ることになるだろう、と。

そして、もし皆さんが、同じような状況下で、フィオーレのヨアキムと親しく話をしていたとすれば、彼は次のように答えたでしょう。我々の眠りは内容を欠いている。意識が消されているのだ。したがって、すべての被造物の中に、織りなし、働く女神「ナチュラ」を知るのは困難である。古代人たちは彼女の隠された側面と見える側面に気づいていた。彼らは「ナチュラ」という言葉を決して使わなかった。彼らは、我々がぼんやりと感じることができるけれどもその存在を知ることのない存在が女神「ナチュラ」であるとは主張しなかった。彼らは彼女を別の名前 - プロセルピナ、あるいはパーセファニー - で呼んだのだ、と。

このことは当時よく知られていたことでした。私が今お話ししたことは、私たちの抽象的な自然の概念

に変化しました。ベルナルドゥス・シルベストリヤアラヌス・アブ・インスリス、ハンビルのジョン、そして、とりわけ、ブルネットー・ラティーニのような人たちの魂の中に生きていたところのものは、古代人たちがプロセルピナ、すなわちデミター - 全宇宙 - の娘として見ていた女神が変化したものだったのです。プロセルピナ（現代的な用語ではありきたりのものに聞こえますが）とは自然であり、その半分の生のみが上方の世界にあって、人間にその物理的、感覚的な面のみを現しながら、その生の別の半分は、人間が眠りの中で滞するとはいえ、その眠りが真の現実を欠いているために、今日では、もはやそこで活動することのできない領域の中で過ごされるところの自然なのです。

私たちの自然に関する知識は、パーセファニーについての古いギリシャ神話の中に生きていたものの残響なのですが、現在の概念は抽象的なものであり、私たちがそれに気づくことはありません。

悲しみに満ちた表情をした人たちがこのことを知っていたという事実、当時はまだそれを知ることができたという事実は、認識の道が時間の経過とともにいかに変化したかを示すものです。この講義のはじめに申し上げましたが、私たちがこのような事柄の微妙な違いに対する正しい感情と感覚を発達させることができるのは、かつて存在していた知識の本性を時代を遡りながら振り返るときだけなのです。私がこれらの例に言及したのは、古代の知の形態を蘇らせるためではなく、かつての時代に卓越であったそのような種類の知識に対する注意を喚起するためです。

もし、私たちが、フィオーレのヨアキムやハンビルのジョンらによって語られるであろうような、「我々が今日、自然と考えているところのもの、あるいは、我々がそれを精神的に理解できないがゆえに、我々の目から隠されているところのもの、それはかつてプロセルピナとして知られていた。」という言葉をしつかりと把握するならば、そして、もし、このプロセルピナの神話（何故なら、それは神話としてだけ生き残っているからですが）を私たちの中で新たなものにするならば、この神話によって引き起こされるイメージはさらに以前の関係についてのイメージを呼び覚ますこととなります。それらは、人間が女神「ナチュラ」の抽象的な側面も、悲劇的な側面も知らなかった時代、プロセルピナ - パーセファニー自身をその輝く美と悲劇的な陰鬱において見ていた時代のイメージなのです。

では、彼女は、はるか昔のその最盛期には、どのような側面において現れたのでしょうか？

その最盛期とは、プラトン哲学の時代でも、ソクラテスの対話の時代でもなく、もっとずっと昔、知識が、ギリシャ文化の最盛期におけるよりも、はるかに、はるかに生き生きとしていた時代でした。

既に現在の立場から議論し、この連続講義の中でさらに詳細に議論する予定のことがらを正しい観点から眺めることができるように、人間進化の過程の中で知識がもってきた様々の形態に向き合ってみることにしましょう。

私たちの説明は簡単で不完全なものにならざるを得ませんが、ギリシャの哲学者、ヘラクレイトス、彼が自分でそう呼んだところの「暗く、陰鬱な」 - 何故なら、後になって、彼が秘儀に参入することによって得ていたところのものすべての上に魂的な闇が降りてきたからなのですが - ヘラクレイトスが参入していた秘儀の本性に向き合ってみることにしましょう。秘儀の発達におけるあの時代、ギリシャ人たちがイマジネーション的な視界を獲得し、彼らの神話を創造するために秘儀に頼っていた時代を、そして、ヘラクレイトスがそれに参入していたところのエフェソスの秘儀を目の前に思い描いてみましょう。

エフェソスには太古の時代からの知識がまだ残存していたのですが、それはホメロスの時代にまで、そして、衰弱した形態においてとはいえ、ヘラクレイトスが秘儀に参入した時代にまでも生き残っていました。これらの太古の秘儀はまだ生き生きと活動していたのです。その東側が、いたるところで自然の豊かな恵みを象徴する女神「ダイアナ」すなわち豊穡の女神の彫像によって飾られていたあの神殿には、きわめて力強い精神的な雰囲気が存在していました。弟子が秘儀に参入し、エフェソスの神殿における儀式から力強い秘儀の衝動を受け取った直後に会話が持たれるとき、存在の重大な秘密、奥深い精神的な秘密が言葉によって弟子に授けられました。そして、これらの深遠な会話は儀式の参加者が神殿を立ち去った後も続きました。自然が瞑想へと誘うたそがれどき、彼らは、神殿の参道を通り、エフェソスの神殿から扇状に広がる道がはるか遠方で徐々に暗い緑の木々の中に消えていく森へと歩いていくことでしょう。いくらか不十分ですが、この種の会話がどのようなものであったかを皆さんに示してみたいと思います。

当時の秘儀に部分的にでも参入した人にとって、弟子が男女どちらの性であれ、会話を持つということはある程度得ることでした。その後、直ちに引き上げられることになるとはいえ、当時、両性の間における権利の平等は今日よりもずっと生きてきた現実であった、ということをお認めなければなりません。ですから、エ

フェソスでは、男性と女性の弟子について語る事ができるのです。そして、これらの会話の中には、パーセフォニーの神話における精神的な側面についての生き生きとした興味がありました。では、そのような会話はどのようにして持たれたのでしょうか？ まず第一に、教師が、秘儀参加者である牧師がいました。彼は形態の世界における偶然性、その世界に存在するものの間の相互作用について語る力を精神的な衝動から受け取っていました。彼が秘儀参加者として有している知識から話すときには、およそ次のようなことを彼の弟子に語ったことでしょう - 今は黄昏時、精神的な世界を明らかにする眠りが、まもなく我々を捉えるだろう。お前の人間としての形態をその全体性において見なさい。我々の足下には植物が、我々の周りには黄昏時の伸びゆく影が、神殿の森にはぼんやりとした緑の光があり、空には一番星が輝き始めている。上なる天と下なる地にある生命の多様極まりない偉大さと荘厳さを見なさい。次に、お前自身を見て思い出すのだ。お前の中には全宇宙が生き、活動しているということを、すべての有機的な働きや、お前の内的な生命の変化と偶然が、一日のどの瞬間においても、豊富な事実や、お前という存在の無限の変化を目撃しているということ。お前という小宇宙は、お前が眼で見、知性で理解する大宇宙よりも、空間的に限定されているとはいえ、その神秘と不思議さにおいて、より豊かであることを知りなさい。そして、この世界をお前の中に感じ、認識することを学ぶのだ。お前は、地球から星々に続く大きな世界を、お前の小宇宙的世界から眺めているのだということに気づきなさい。そして、眠りがお前を捉えるとき、お前はもはやお前自身の体、お前自身の世界の囚人ではなく、今お前が目の前にしているあの世界、地球や星々を包み込む世界の住人になるのだ。お前の魂と精神は肉体を去り、お前は星々の輝きと地球の放射に与ることになるだろう。お前は風に乗り、星の輝きとともに思考しているだろう。お前は今や、精神の世界に住み、お前の小宇宙的自己を振り返っているのだ、と。

太古の時代には、教師はその弟子に向かってこのように話すことが可能だったのです。何故なら、外的な世界の知覚は今のよう鋭く規定されてはならず、眠りの生活はまだ完全な空虚ではなかったからです。それはまだ経験に満ちていました。この眠りの状態に言及して、教師が次のように言うときには、現実について語っていたのです。お前は今、プロセルピナ、パーセフォニー、あるいはコウラとともにある。コウラは星々の中に、太陽の輝きの中に、月明かりや成長する植物の中に住んでいる。あらゆる場所で、パーセフォニーの活動を見ることができる。何故なら、彼女は宇宙の衣を織ったのだから。そして、そのすべての背後にはデミター、彼女の母親がいる。パーセフォニーは彼女のために、お前が外的な世界として見るところのこの衣を織ったのだ、と。教師は「自然」という言葉を使わず、パーセフォニーあるいはコウラについて好んで語りました。

そして、教師と弟子との会話は続きます。もし、誰かがお前よりも長く起きているとすれば、お前が眠っている間、彼は植物、山々、雲や星、つまり、パーセフォニーの外的な顕現を、ちょうど今のお前と同じように知覚するだろう。幻覚は我々の見方の中にある。パーセフォニーが幻覚なのではない。山や植物、雲、そして星々における彼女の創造的な活動が幻覚なのではない。お前がそれらを見るその仕方が幻覚なのだ。そして今、眠るときが来た。生命の神秘的な器官であるお前の眼を通して、コウラ - パーセフォニーがお前の中に入ってくるだろう。

これらのことは生き生きと経験されていたために、そのように生き生きと描写されたのです。そのため、睡眠中の人は、眠っている間にもその光景を感じ取っていたばかりではなく、聴覚や感覚が消されている中で、パーセフォニーが彼の目を通して、彼の魂と精神が退いた彼の肉体とエーテル体の中に沈み込んでくるのに気づいていたのです。

起きている間、私たちは上方の世界に生き、眠っている間は、下方の世界に生きます。眠っている人の目を通して、パーセフォニーがその人の肉体とエーテル体の中に入ってきました。彼女は、プルートの、眠りの支配者とともに肉体とエーテル体の中に滞在したのです。弟子は眠っている間に、パーセフォニーとプルートの活動を経験しました。彼は、彼が受け取っていた教えによって、コウラが目という通路を通して入ってくるのを知覚するようになったのです。このことは彼にとって生きた現実になりました。そして今や、彼は眠っている間のプルートとパーセフォニーの行いを体験します。そして、弟子がこれを経験している間、彼の教師は形態の世界に関係する相応の経験を持ちました。

そして、教師と弟子が再び出会うとき、各々が自分自身の特別な洞察を有していました。そして、彼らが植物や木々について議論するとき、教師はいかにしてそれらの形態が生じるかを記述するでしょう。何故なら、それらは眠りの中で彼に明らかにされていたからです。彼は葉や茎の配置について、自然界のす

べてについて、そして、上方から地上に下って働く形成的な力について詳細に議論するでしょう。そして、弟子は、恐らく異なる洞察を経験していたかも知れませんが、彼の教師がクロロフィルや浸透圧の神秘について語ることを追っていくことができたでしょう。こうして、会話はお互いを補強し合います。つまり、これらの秘密は、この女神、パーセフォニーの生き生きとした描写の中で、下方世界において、眠っている間に明かされる彼女の別の側面において、人間の魂に明らかにされるとともに、その中に入っていったのです。

このようにして、あのはるかな時代には、弟子は教師から、教師は弟子から学びました。その教えは、一方では、精神と魂について、他方では、魂と精神についてのものでした。この共通のものとなった経験を相互に交換することにより、彼らは知識の最も高度な飛躍に触れました。彼らがこの最も深い洞察を分かち合い、そして、その荘厳な並木が遠方で徐々に視界から消え去る暗い緑の森の上に、東の空に輝く夜明けの星が光の矢を投げかけるとき、彼らの心は喜びに満たされました。彼らは、今の私たちが自然の領域と呼ぶ領域に、短い時間とはいえ、滞在していたのです。そして、彼らは、これらのことがらについて彼らの間で話し合ったときには、確かに、パーセフォニーと会話していたのだ、ということを知っていました。そして、彼らはまた、後にパーセフォニーの神話に組み入れられたすべてのものが、実際に、人間の自然に関する知識の隠れた源泉なのだ、ということを知っていました。

これらのパーセフォニーについての生き生きとした知識に染められていたエフェソスの秘儀に関連した会話がいかに心を強く捕らえるものであったかは、ただ不完全にしか示すことができません。けれども、時が経つにしたがって、この知識は私たちが今日、自然として知っているような抽象物へとトーンダウンしていき、フィオーレのヨアキムのような人物はこの悲劇的な喪失を嘆いたのです。

人間や宇宙の精神的な本性についての理解に導く道程を理解することができるのは、人間の手が届く範囲にある別々の意識状態に注意を払い、特徴づけるだけではなく、これらの状態が人間進化の過程でいかに変化してきたかを示し、エフェソスの神殿における秘儀に参入していた人々の会話に情報を与えていた知識がいかに私たちの知識とは異なったものであったかを、そして、フィオーレのヨアキムやアラヌス・アブ・インスリスのような人物と交わされた会話がいかに異なった性質のものであったかを、また、私たちが精神的な訓練を通して、今日再び達成しようとして苦闘する知識、外的なものから内的なものへ、上方から下方へ、そしてまた、内的なものから外的なものへ、下方から上方へと導く知識の形態がいかに異なったものであったかを知るときだけです

第五講

金属質の本性を通しての魂の内的な活性化

私は、いかに人間が日常生活の意識とは異なる意識状態を発達させることができるかということ、そして、その知識と活動の分野において、人間は今日の私たちのような意識を有していなかったということに関して、進化の歴史がいかに豊富な証拠を提供するかということを示そうと試みてきました。そして、十世紀、十一世紀、そして十二世紀に生きた学者たちの意識と、当時、例えばシャルトルの学院において知識が涵養された方法との間の関係に注意を促す、ということを示すために試みました。それとの関係で、いかに私たちの現在の意識レベルとは全く関連しない知覚形態が生じてきたかということも指摘しました。ダンテの教師、ブルネットー・ラティーニの場合がそうです。

昨日はもっと以前の時代、例えばエフェソスの秘儀の時代における人間の宇宙に対する関係と呼び起こす、ということを試みました。それによって、私たちは、当時、今日の通常の科学的な意識状態にある程度関連しているとはいえ、いかに全体として異なった意識状態が卓越的であったかを知りました。

さて、少し脇道にそれた後、今日は私たちの探求を続けたいと思います。私は既に金属性が、つまり鉱物元素の基本的な物質性がいかに人間とその意識状態に関連しているかということを示しました。すなわち、金属銅に対する人間の関係を示した後、いわば死後間もない死者の経験に参加することを可能にするところの意識状態について記述しました。

私たちは、ルネットー・ラティーニが発熱の後、半ば病理的な状態の中で経験したのはこのような知覚形態であった、ということに気づかなければなりません。

彼が記述することのすべて、女神ナチュラのインスピレーションを通して彼のところにやってきたもののすべては、あの死後間もない死者の経験に与ることができる意識状態 - それは私たちの日常意識に密接に関連しています - の中で、本当に達成することができるのです。私は、それはより現実性の大きい状態であった、と言いました。私たちはより力強く、より光り輝く世界に、つまり、現象世界に比べて、あらゆるものにさらなる完成をもたらす世界に住んでいるのです。

私たちはこのことによってのみ、死の門を通して間もない魂の経験に与る可能性を有しているのです。

それと同時に、この世界のある奇妙な特徴が明らかになります。私たちが、今お話しした意識状態をもって、その世界に滞在するとき、日常生活における通常の経験を観察することはもはや不可能になります。この世に生まれる直前の私たちの生活、生まれる前、まだ精神的な世界にいたころの私たちの経験だけを見るのです。ですから、私たちは、この意識状態の中では、私たちが通常住んでいる世界から引き離されるということに気づかなければなりません。

それがどういうことなのかを示しましょう。ある人がある時点で生まれたとします。もし、彼が40才のとき、銅の意識状態を達成したとすれば - このことは既に一昨日の講義で説明しました - 、彼の知覚はもはや現在の経験にも、彼が30才あるいは35才の時の知覚にも関連せず、ただ生まれる直前の経験を振り返ることができるだけなのです。彼は、これを彼自身についても、他の人についてもできるのですが、日常的な存在の世界を理解できません。それができるのは人間についてだけです。

動物はその見慣れた物理的な姿では現れません。私たちは直上の世界をのぞき、集合魂と呼ばれるものを知覚します。いわば動物の種のオーラを見るのです。そして、現在の唯物的な時代においては完全に無視されているとはいえ、人類にとって最高に重要な何かがその世界に見いだされることになります。

そして、もし、私たちが、ベルナルドゥス・シルベストリ、アラヌス・アブ・インスリスやその他のシャルトルの学院の教師たちによってあれほど生き生きと描写された存在、すなわち女神ナチュラとして絶えず存在していた存在に触れるとすれば、たとえ最高の学院であらゆる学問についてのすべての現代的な知識を学んでいたとしても、私たちには自分がはかり知れないほど無知であると感じられることでしょう。現在の知識は誕生から死までの世界にだけ適合している、死者を死の門の向こう側まで追って行ける意識をもって精神的な世界に参入するとき、それはもはや有効ではない、と感じられるのです。

私たちが化学を探求するとき、その知識の総計は誕生と死の世界にとってだけ有効です。いわゆる化学は私たちが死者と共有する世界においては重要ではないのです。私たちが現象世界において獲得するすべての知識は死と新生の間のこの中間的な状態においては価値がなく、単に記憶として残るだけです。

私たちは、私たちが今や居住するこの中間的な領域に関する直接的な意識を有している、私たちがあれほど多くのことを学んだあの日常的な世界は私たちの意識からかすんでしまった、と感じます。この別の世界が今や私たちの目の前に広がっているのです。

私たちの目の前にぼんやりと山が現れてくると想像してみましょう。それはしっかりとした印象を与えます。遠くから見ると、それは太陽の光を反射しており、その輪郭と岩の様子が分かります。少しずつ近づき、そこに足を踏み入れると、その堅さが感じられます。私たちはしっかりとした地面の上に立っている、その現実性には何の疑いもないと感じられます。

さて、中間的な世界においては、しっかりとしている、輝いているとして記述されたあらゆるものはいかなる意義も持たなくなります。つまり、何かが山から流れ出し、どこまでも大きくなり、そして別の種類の現実性を印象づけるのです。

私たちは、通常の状態の生活において、山の上に雲が懸かっているのを見ます。それは水蒸気の凝縮によってもたらされたのだ、ということに何の疑いも抱きません。この現象もまたあらゆる現実性を失います。何か別のものが雲から現れるのです。それは山と雲が徐々に視界から消えるのにしたがって現れます。この組み合わせの中から、単に漠としているだけではなく、漠としていると同時に形態を与えられた新しい現実が生まれるのです。そして、それはこの中間的な世界におけるあらゆるものに当てはまります。

多くの聴衆の前に立つと想像してみましょう。私たちが精神的な世界に入る瞬間、そのすべてのはっきりと規定された輪郭はかき消されます。私たちはそのかわり、超感覚的なイメージの形で投影された聴衆の魂と精神を知覚します。そして、周囲の神秘的で精神的なオーラが次第に私たちを包み込み、新しい世界、死者が死後に居住する世界が生じるのです。

私たちは今、別の何かに気づきます。つまり、もし、私たちが今や参入したこの中間的な世界が存在していなかったとすれば、それがいたるところに存在していなかったとすれば、私たちは私たちの目や耳を、つまり感覚器官を有してはいなかったであろう、ということにです。化学者や物理学者たちが記述する世界は私たちに感覚器官を提供することはできません。ですから、私たちは見ることも聞くこともできなかつたでしょう。私たちの中に感覚器官が組み込まれることは不可能だったのです。

そして、ブルネットー・ラティーニがスペインから生まれ故郷のフィレンツェ近郊に戻り、彼にこの中間的な世界への扉を開いたところのあの若干の発熱に苦しんだとき、彼が発見した驚くべきこととはこのことだったのです。彼は彼の感覚器官がこの別の世界のたまものであることに、つまり、もし、この中間的な世界が感覚によって経験される世界に浸透していなかったとすれば、彼の感覚は全く発達していなかったであろうということに気づいたのです。私たちの人間としての地位は、私たちが私たちの感覚器官をこの第二の世界、この中間的な世界との結びつきに負っている、という事実によって決定されているのです。

この第二の世界はいつの時代にも元素の世界と呼ばれてきました。酸素、水素、窒素等々の言葉はここでは意味がありません。これらの言葉は誕生と死の間の世界にだけ適用可能なのです。第二の世界においては、土、水、空気、火、光等々の元素について語るただけが意味を持っています。と申しますのも、水素、酸素等の特質は感覚には全く無関係だからです。化学者がスミレやアギ（セリ的一种）の香りについて見いだすこと、つまり、一方はよい香りで、他方はきわめて不快であるというようなこと、そして、その化学的な組成にしたがって名づけられるあらゆるもの、それらの何ひとつとして意味がありません。第二の世界においては、香りや臭いとして現象するすべてのものは精神化されています。第二の世界の立場から記述するならばそれらは空気なのですが、希薄化された空気、精神によって完全に浸透された空気なのです。私たちの感覚は元素の世界に根ざしていますから、そこではまだ、土、水、火、そして空気について語ることに意味があるのです。

私たちは今や、これまで誤解していたものを正しい理解へと発展させることができます。自分を論理的、客観的であるとして、以前の時代の素朴な観点は捨て去ったと主張する現代の哲学者はこれにどのように反応するのでしょうか？ 彼は、このような昔の概念は原始的であり、当時、人々は粗雑な元素である土、水、火、そして空気についてだけ語ったが、今日では四つや五つの元素ではなく、七〇から八〇の元素が知られている、と主張するのです。

さて、もし、ギリシャ時代の典型的な観点を有する人が今日の時代に生まれ、自分の立場についてたずねられたとしたら、次のように答えるでしょう。あなた方はもちろんまだあなた方のやり方で酸素や水素

のような元素について語っていますが、私たちが四つの元素によって理解していたことを忘れていました。あなた方はその構成に気づいていません。あなた方はそれらについてもはや何も知らないのです。あなた方の72や75の元素のすべてが存在していたとしても、感覚器官は決して生まれてこなかったでしょう。何故なら、それは四つの元素から生まれてくるものだからです。人間について、つまり感覚器官を備えた人間の体がどのように組み立てられているかについてもっとよく知っているのは私たちです、と。

ブルネットー・ラティーニのように秘儀参入に向けて第一歩を踏み出した古い時代の人間が受け取った印象について推し量ることができるのは、これらの印象が魂や精神の生活にとってどのような意義を有していたかを、つまりこれらの印象によって魂が受ける活発な刺激とその予期しない衝撃的な影響を心に留めるときだけです。

もし、これまで感覚印象の現実性を信じてきた人が、その現実が彼の感覚器官を創造することさえできなかったであろうということを、その現実の背後には私がここでお話ししてきたことのすべてが存在しているに違いないということを見出すならば、その影響はとにかく大変なものでしょう。

私たちが普通に抱えているような自然についての古い不毛な概念をいつまでも長引かせるならば、そのような知識や理解を発達させることはできない、ということに気づくことが重要なのです。私たちがこの第二の世界に参入するとき、あらゆるものが生命の身震いを始めます。私たちは次のように自分に言いません。感覚的な経験を通して我々が知っていた山は活気のないもののように見える、我々はそれが生きた力によって浸透されていることに全く気づいていなかった、今やそれが我々に明かされる。そして、以前には静的で不活発のように見えた雲の中に、これまで気づけなかった生きた生命が生きているということが今や明かになる。あらゆるものが活気づけられ、この波打ち脈打つ生命の中で、根本的な現実が明らかになるのだ、と。

この第二の世界における自然の法則は知的に構成されているのではなく、精神的な存在に関係していません。私たちに語りかける女神ナチュラが現実の世界からの洞察を指し示し、伝えるのです。こうして私たちは、超感覚的な世界の存在を通して、私たちを取り巻く現実について学びます。私たちは自然法則によって決定される純粋に抽象的な世界から現実的な存在の世界へと上昇させられます。そこではもはや実験や分析によって自然法則に至るのではなく、異なる世界の存在たち、知識や理解を仲介する存在たち - 何故なら、彼らは私たちが人間としてまだ学ぶべきこととは何かを知っているからです -、そのような存在たちがいると感じられるのです。

こうして私たちは正しい仕方で精神的な世界に参入します。もし、私たちが感覚器官だけを、つまり目とその視覚神経、鼻とその嗅覚神経、そして耳とその聴覚神経だけを授けられていたとすれば、そしてこれらの神経がすべてその出発点において結びつけられていたとすれば、私たちは酸素、水素、窒素やその他の元素、そして私たちが生まれてから死ぬまでに知覚するところのすべてを意識することはなかったであろう、ということに気づきます。私たちは元素の世界をのぞき、周囲のいたるところに土、水、空気そして火を知覚していたことでしょう。土とその粗雑な物質、水とその液体要素の間にさらなる区別をつけようなどとは少しも思わなかったことでしょう。私たちは物理的な感覚を持った存在として元素の世界に通じています。けれども、私たちがここで既に記述されたことを意識する瞬間、私たちはまた、人間の中では、頭蓋の空間へと駆け戻る感覚神経がさらに差別化され、特殊化されるとともに、その領域において、脳の最初の兆しが形成される、ということに気づきます。その結果、私たちはそれ以上深く自分自身の中に入りません。つまり、私たちは外に向かうようになり、私たちが誕生から死までの間に経験するところのものを、土、火、空気、そして水という四つの元素の性質に付け加えるのです。

大脳は頭蓋空間へと駆け戻る感覚神経索の段階的な変容に基づいて発達します。人間の中で自分自身へと押し戻されるこの大脳は、誕生から死までの生活においてだけ意味があります。精神的な世界についての理解にとって、知性はほとんど重要ではありません。私たちが私たちの世界と境を接する最初の精神的な領域に参入しようとするときでさえ、知性は沈黙させられなければならないのです。大脳はより高次の知覚を妨害する器官なのです。しかし、知性が沈黙させられたとしても、私たちは感覚的な経験からは逃れられません。そのためには、感覚を精神化し、イメージーションを達成しなければならないのです。通常の過程では、感覚に導き出された外的な世界のイメージは私たちの感覚によって受け取られ、知性がそれらを抽象的で死んだ思考へと変化させます。もし、私たちが知性を沈黙させ、それでも感覚を通して世界を経験することができれば、私たちはあらゆるものをイメージーションの形で受け取ることになります。

私たちはそのことを意識し、通常の生活における意識をより高次でより精神化された状態へと発達させることによって、ついには人生に対するより深い洞察が得られるのだ、ということに気づくようになるのです。

オレンジ色



目や耳のように私たちの体の周囲に配置された器官は元素の世界と絶えず連絡を取り、死後数年を経た死者を知覚しています。この世界についての知覚が失われるのは私たちの知性が介入するからです。人間の周囲に配置された器官は精神的な世界、死者の世界を仲介するのですが、この世界、土、水、火そして空気元素の世界は知性的な意識によって消し去られるのです。人間ははっきりと規定された輪郭を持つ物理的な世界、私たちが誕生から死までの間に滞在する世界だけを見ます。非常に異なって秩序づけられた第二の世界が本当に存在するという事は疑いのないことなのですが、この世界は知性によって消し去られ、人間がながめるのはただ日常意識にとって見慣れた世界だけなのです。

現代人が昨日お話ししたような瞑想を行わなければならないのはそのためです。過去には、そのような瞑想の後、金属実質を摂取するということが行われました。それについては前回の講演でお話ししました。より高次の意識レベルに至ることができるかどうかは、まず第一に、知性を消し去るということ、感覚器官によって仲介される知覚を精神化することにかかっています。動物の場合、大脳が発達していないために、これらの知覚に与ることができるのですが、彼らは自我意識を有していないため、その知覚は精神ではなく、単に原始的な魂の力にだけ浸透されています。彼らは人間のように感覚が精神に照らされたときに知覚されるものを周囲の世界に知覚しません。動物の知覚は人間の知覚と同じ種類のものなのですが、劣ったものであり、個的なものになっていないのです。

金属性について、つまり鉱物世界の現実の実質についてこれからお話しすることは、必要な留保をもって受け取られなければなりません。昨日、金属の性質を通して魂を内的に活性化させることについて、つまり言い換えれば、金属性との内的な交流を道徳的な意味で発達させることが今日の人間の精神的な発達における枢要な部分をなしているということについてお話ししたとき、その留保に対して皆さんの注意を促しました。効能化された金属の人体組織に対する処方は臨床医の役目です。ですから、皆さんには、既に議論した以外の金属の知られざる要素について私がお話ししようとしていることを、必要な留保をもって受け取っていただきたいのです。特に水銀の秘儀は精神的な面から世界に接近する人たちにとって、すなわち物理的な実質の中に精神の働きを知覚することができる人たちにとって特別な重要性を有しています。ただし、金属の水銀は精神科学が水銀的という一般的な言葉で呼ぶところのものの一部に過ぎません。水銀的なものとは液体金属の性格を有するあらゆるものを含んだものなのです。私たちが今日知っているような自然界には、このような性格に与る金属、水銀的と見なされ得る金属はたったひとつ、つまり水銀しかありません。けれどもこれは水銀という種を構成するもののひとつに過ぎません。精神科学においては、水銀的なものとは水銀的な性質を有するあらゆるものを包含しています。水銀は単に水銀的なものの典型例と見なされるに過ぎません。

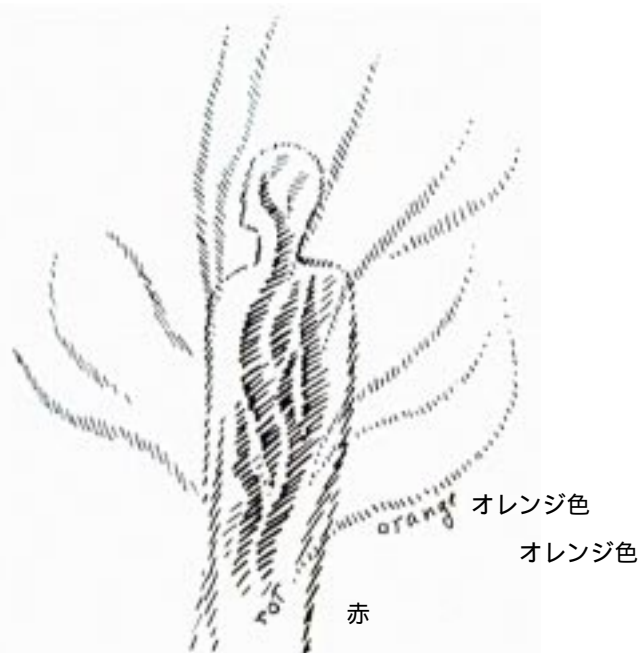
この水銀には奥深い秘密があります。水銀の人間に対する影響とは、人間が物理世界のすべての印象から、そして元素の世界からも引き離されるというものです。

私たち人間は脳のような器官が物理的な世界から作り上げられたのを知っています。私たちはまたこの感覚の世界から他の多くの器官を作り上げたのですが、特に、物理的な生活には不可欠の一連の腺組織全体を作り上げました。

さらに言えば - 感覚器官については既にお話ししました - 、第二の意識レベルに関係する世界として記述された世界からも多くの器官が作り上げられています。銅と鉄は人間をこの第二の意識レベルに引き上げます。水銀の影響は異なっています。それは必然的に宇宙の中に存在していなければなりません。そして、それは実際、微細な拡散状態で普遍的に存在しているのです。私たちはいわば水銀の大気に取り囲まれているのです。人間が通常以上の量の水銀を吸収する瞬間、彼の有機体は物理世界と元素の世界から作り上げられたすべての器官を中和しようと始めます。人間のアストラル体がいわば刺激され、星の世界から作り上げられた器官にだけ頼るようになるのです。

ですから、水銀の金属性に、つまりその金属的かつ液体的な性質、水銀に特徴的な要素、基本的に手で感じられないほど微細でありながら、それでも人間に関係しているところの要素に意識を集中するやいなや、人間は「第三の人間」に浸透されるようになります。人間は銅との関係を通して内的な緊張を創り出すとともに、肉体を捨て去り、死後間もない死者たちを数年にわたって追っていくことができるような第二の人間に内的に浸透されるようになる、ということは既に述べました。水銀はもっとはるかに綿密に織られた魂的な組織に貢献するようなあらゆるものを引き寄せます。水銀の影響を通して、人間の器官における新陳代謝の全体が把握されるかのようです。人間は、水銀の力強い金属的な影響を経験するとき、様々な管組織を通して流れる液体循環の様相に突然注意を向けさせられることとなります。その影響は気持ちがいよものとは言えません。と申しますのも、彼は、心と感覚を失ったかのように、内的な発酵状態、乱れと流れ、脈打つ生命と動きの中にあるかのように感じるからです。そして、彼はこの内的な活動が外の活動とひとつになっているのを感じます。

既に記述しましたように、この状態は内的な生活の意識的な訓練によって生じます。水銀の活動的な影響を通して、人間は彼の脳が存在を感じることをやめるのです。脳は空虚な空間になりましたが、それは精神的な世界の知覚にとって有益なことなのです。何故なら、脳はその目的にとって全く役に立たないからです。彼が実際に感じるのは彼の有機体全体に浸透する動きと活動です。とはいえ、この発酵は最初、内的な消耗に苦しむのと同様に苦痛に満ちたものなのです。



内的な活動があらゆるところで外的な活動と結びつけられます。私たちは地球を離れ、元素の世界が私たちの下方にあるのを感じます。あらゆるものが流れる蒸気を吐き出すのですが、この蒸気の中には、流れる呼気の中には、精神的な存在たちが住んでいるのです。ブルネットー・ラティーニがあればほど生き生きと記述したナチュラ神が今「振り向いた」のです。

昨日お話ししましたように、彼女はギリシャのパーセフォニーと同じ存在です。以前、彼女の眼差しはより地球へと向けられていました。つまり、彼女は死後間もない人間の生活についての経験のようにまだ地球の領域に結びついていたものを明らかにしました。今、彼女は「振り向き」、人間の下方には地球、そして元素の世界、上方には星の世界があります。地上で植物や動物に囲まれていたように、今、彼の周りには星の世界があります。彼はもはや壮大な星の世界を目の当たりにしても、自分がとるに足りないものであるとは感じません。星の世界は、彼の今の大きさでは、ちょうど地上において周りの環境との関係で感じられていたのと同じように感じられます。彼は、その身の丈が大きくなるとともに、星の世界へと成長したのです。とはいえ、その星は私たちが地上から見るような星ではありません。そこは精神的な存在たちのコロニーであるということが分かります。私たちは再び既に皆さんにお話しした世界、つまり錫の金属性との関係を通して人間の中で目覚めさせられる世界の中にいるのです。既にお話ししたように、水銀と錫の間には内的な関係があります。水銀は私たちの存在のある一定の部分に働きかけ、それを分離し、外的、物理的には星の世界として表現される精神的な世界に持ち込むのです。

けれども、私たちは、私たちの意識状態が変化したため、今や異なる世界の中にいます。つまり、その意識はもはや感覚や脳によって決定されるのではなく、水銀の金属性が私たちの有機体から引き出したところのものによって決定されるのです。私たちは全体として異なる世界の中に、星の世界の中にいる自分を見いだします。しかし、このことは別の方法で表現することもできます。「星の世界」という言葉は空間的なものを暗示しますが、私たちは今や本当に、この新しい意識レベルを達成することを通して、誕生から死までの間、空間的に存在する世界を後にし、中間的な世界、死から再生までの間、私たちが滞在する世界に参入するのです。

これが水銀の隠された秘密なのです。つまり、水銀は人間を現象世界から引き離し、中間的な世界への扉を開くのですが、それが可能なのは水銀が人間存在のあの部分、つまり地球から導き出されたのではなく、中間的な世界の存在たちによって彼の中に植え付けられた部分と内的な関係を有しているからです。彼が今経験する液体の循環は彼が死から再生までの間に通過する世界によって決定されるのです。

私たちは今や、ある別のことがらについて知るようになります。それもまたプルネトー・ラティーニが女神ナチュラの影響下に受け取ったものなのですが、宇宙的な液体の循環に関連した液体の循環の中で私たちは生きている、ということが意識されるようになるのです。私たちは肉体という乗り物を感覚から導かれた意識とともに脱ぎ捨て、死から再生までの間に滞在する世界にいる自分を見いだします。そして、液体の循環の本性に通じるようになるとともに、いかにこの内的な活動が、つまり私たちが死と再生の間に滞在する領域が私たちの気質、多血質、胆汁質、憂鬱質あるいは粘液質という性質を決定したかを理解し始めます。私たちは私たちの成り立ちについて単に感覚に頼るとき以上に深い洞察を有することになります。私たちが粘液質として生まれるとすれば、自分の鈍感さ、自分の無精が前回の死と今回の誕生との間の私たちの経験によって決定された、ということに気づくのです。しかし、私たちは物理的な液体の循環の中に自らを現わすこの気質との関連でもうひとつの要因について考慮しなければなりません。この液体の循環には何が含まれているかを少し考えてみて下さい。解剖学や生理学の分野では主として物理的なものが問題になりますが、物理的なものは精神的なものの表現に過ぎません。この液体の循環に関連する精神的な要素は物理的な世界のものではなく、死と再生の間にある人間にまで貫き至る世界に発するものなのです。

私たちが様々な気質を省みるとき - そして、女神ナチュラがプルネトー・ラティーニに気質の存在とその本質に対する彼の目を開かせたことは、彼にとって圧倒的な経験だったのです - 、私たちは、死と再生の間の生活が液体の循環と関連するこれら四つの異なる気質の本性を決定したのだ、と結論づけるのです。もし、私たちがもっと深く探索するならば、運命を司るカルマがその中で役割を果たしているのが分かります。

たとえこの特筆すべき液体金属である水銀の物理的な面をよく考えてみるとしても、それについて理解し始めるのは、その隠された秘密、すなわち液体水銀の微細な一滴が秘儀参入者に奥深い秘密を明かす、ということ十分に意識するときだけです。この滴は死と再生の間の世界にその起源を有し、その構造をその世界に負うところの器官の中に精神的なものを浸透させることができるのです。

このように、世界のあらゆる事物は相互に織りなされ、関係づけられているのです。物質的なものは幻想です。そして、物質の観点からは精神的なものもまた幻想であり、抽象に過ぎません。実際には、物質

的なものは精神的なものに、そして精神的なものは物質的なものに織りなされている、というのが本当のところなのです。

もし、その起源を中間的な領域に実際に有するような器官が関係する障害が人間の有機体の中で発生したとすれば、その障害を修復するような力を活性化しなければなりません。死と再生の間の生活にその起源を有するところの循環器系の不具合を持つ患者が医師の診察を受けると仮定してみましょう。医者は、その循環器系統が精神的な世界との結びつきを断ち切られているような患者に直面することになります。それがその患者がたどった歴史です。精神的な要素と物理的な診断との関係は昨日示唆したような意味で理解されなければなりません。誤解のないようにもう一度繰り返しますと、この患者の循環器系は精神的な世界からひどく断ち切られているという診断になります。何が処置されなければならないのでしょうか？

循環器系と精神的な世界との結びつきが回復されるように、体内に金属性を導入する、というのが正しい処置です。これが水銀の人間に対する作用です。水銀は人間の有機体に対して、精神的な世界からのみ築かれ得るような器官がその精神的な世界との関係を断ち切ったとき、それらを再び接触させるようにする、というような仕方でも働きかけます。こうして、私たちは意識状態に関する知識と病気に関する知識との間に存在するいくらか危険であると同時に必要な関係を理解します。一方の知識が他方に移行するので

す。

このようなことがらは古代の秘儀において決定的な役割を果たしていました。それは私が昨日触れたようなことからも光を当てます。次のようなことを考えてみましょう。自然の秘密についての女神ナチュラの教えを通して、彼女に気づくことができた古い精神的な視界が失われていた時代に、ダンテの教師であるブルネットー・ラティーニがスペイン大使の地位を離れ、興奮状態の中で帰ってきます。生まれ故郷に近づき、彼の党、ゲルフ党の運命が聞こえてきたとき、彼の興奮は高まります。彼はこのすべてを、若干の発熱が彼のところにやってくる、というような心の状態で経験します。正に水銀の金属性が周囲から彼に働きかけていたのです。

若干の発熱を私たちはどのように理解すればよいのでしょうか？ それは環境中の水銀、宇宙全体に細かく分散した水銀の影響を感じる、ということの意味をしています。ブルネットー・ラティーニはこの影響を経験した結果、人間がそのような経験に与ることができない時代であったにもかかわらず、精神の世界に近づくことができたのです。こうして、私たちは、人間の中には、自然科学が見いだすところのものや死後数年以内の死者と接触を持つ人が見いだすところのものが存在しているだけではなく、私たちの根本的な存在はもっとはるかに崇高な何か、私たちが死と再生の間に生きるところの純粋に精神的な領域にも関係しているのだ、ということを理解します。通常の科学的な手続きによって例えば肝臓や肺の形態を理解することができます。もう一段高次のレベルの知識 - そして、その知識はより粗雑な側面においてのみ現代物理学に知られているに過ぎません - をもってすれば、感覚器官の構造を理解することができます。けれども、秘儀に参入する知識を通してそれに近づく以外には、直立姿勢をとる人間の循環器系が示す奇妙な特徴や不思議な金属の特質を理解することは決してできないのです。

このことが示しているのは、秘儀に参入するところの知識なしに、私が記述した意味で病気の本性を理解することは決してできない、何故なら、金属が病気を癒すことができるのはその物理的な性質によってではないからである、ということです。金属の物理的な特質に関する理解をもってすれば、脳の損傷を癒すことは可能でしょう。しかし、循環する液体の障害を治療することは不可能です。ただし、このように言うことは実際には厳密に正確というわけではありません。何故なら、それによって治療することができるのは脳の最も粗雑な実質だけだからです。脳内には液体も循環していることから、現実には金属だけで脳の損傷を治療できるわけではなく、精神的な知識の助けがあってはじめてそれが可能となるのです。

皆さんは、確かにそうかも知れない、しかし治療芸術における今日の医学の成果をどのように説明するのか？と言われるかも知れません。それに対する答は、医学に治療が可能なのは、それが金属の精神的な要素についての古い伝統的な知識の記憶をまだ保持しているからである、というものです。それが使用しているのは伝統的な知識と、ほとんど役に立ちませんが純粋に物理的な発見の組み合わせです。もし、唯物主義が伝統の犠牲の上に立って勝利を収めるとすれば、化学療法だけではいかなる治療効果もない、ということになるでしょう。私たちは今新たに精神的なものに接近しなければならない、何故なら、太古の超感覚的な能力に関する古い伝統は徐々に失われているのだから、というような人間進化における一地点に立っているのです。

銀の金属性の背後にある秘密は非常に特別な種類のもので、銅の背後にある宇宙的な衝動が最初より高次のレベルにある意識を人間の中に目覚めさせ、水銀の背後にある別の宇宙的な衝動が星の世界、つまり私たちが死と再生の間で滞在する精神的な世界に関係する第二の高次のレベルにある意識を目覚めさせるとすれば、銀の金属性は全く異なる段階の意識を目覚めさせるのです。

人間が銅と水銀の本性に対して採用したのと同じプロセスによって銀に対する彼の関係を強化し、高めるとき、彼は彼の内にあるより奥深い組織に関係するようになります。人間は水銀によってリンパ液の循環システムに関係づけられるのですが、それによって今度は宇宙の循環、宇宙の精神性に関係づけられるようになるのです。銀に対する彼の関係を強化することは前世から生き残っているすべての力と衝動との直接的な接触へと彼をもたらしめます。

もし、人間が銀の奇妙な性質に集中するならば - そして、それはときとしてその効果が表れる以前かも知れませんが - 、彼は自分の内部で、液体の血管中における循環だけではなく、血流に乗った熱の循環にも関係するあの力に集中することになります。そのとき彼は、彼の人間としての地位を彼の血液中における熱の循環に、つまり物質ではあるけれども同時に血液中の精神的な要素でもあるところのある種の内的な熱を彼が感じるということに負っているのだ、そして、この熱の中には前世からの力が活発に働いているのだ、ということに気づくのです。人間の銀に対する関係の中に表現されるのは、血の熱的な活動に影響を及ぼすことができるもの、そしてまた前世との精神的な結びつきを提供するところのものなのです。

ですから、銀は前世から現世にまで生き残っているものを人間に思い出させるというあの金属としての効能を保持しているのです。と申しますのも、顕著な熱の多様性を有する血の循環はこの物理的な世界から導かれたものではなく、皆さんにお話しした元素の世界や星の世界から導かれたものでさえないからです。星の世界は血液循環の道筋や方向を決定しますが、私たちの中を血とともに循環する熱の中には、前生からの賦活力が働いています。私たちが人間との関係で銀の力を指し示すときには、直接この力に訴えかけているのです。銀の秘儀はこうにして人間の前世に関係しています。銀は精神的なものがすべてに浸透していること、物理的な世界においてさえそうであることの驚愕すべき例のひとつなのです。銀を正しく理解する人はそれが人間の繰り返される地上生の象徴であることを知っています。ですから、銀の秘儀は生殖とその秘密に結びついているのです。何故なら、人間の存在が世代から世代へと繰り返されるのは生殖の過程を通してだからです。以前の地上生の中にあつた精神的な存在は生殖過程を通して再び受肉します。これは血の秘儀と同じ秘儀です。血の秘儀、血の熱の秘儀とは銀の秘儀のことです。

私たちは今や人間の正常な状態について知るようになりました。次に、その異常な状態についての探求へと進むことにしましょう。さて、血はその熱を、人間の現在の環境からではなく、彼が前世において通過した領域から取り出さなければなりません。人間の血の熱が、私たちを精神的に前世に結びつけるところのものによって活性化されず、現在の環境の影響を受けると想像してみましょう。その場合、結果として病理的な状態が生じます。それが生じるのは血の熱に結びついているものすべてがその自然な関連から、つまり以前の地上生から切り離されるからです。発熱とは何でしょうか？ 精神科学の立場から言うと、発熱は人間の有機体が輪廻転生との関係を断ち切ったために生じるのです。もし、ある病気の場合のように、患者の有機体が以前の受肉から切り離される危険に陥るといような仕方でも外的な世界によって働きかけられている、ということが確かめられたならば、医者は治療のために銀を処方します。この種の非常に興味深い例が、最近、アーレスハイムのベークマン博士の医院で見られました。精神生活においては、今お話ししたような状態が突然生じることがあります。血の奇妙な特性のために、人間の有機体が外的な状況を通して以前の受肉からの突然の遊離に脅かされるのです。そして、このことは正に最近ベークマン博士の医院においてある患者に起こったことです。けいれんしていた患者が突然予期せぬ高熱、通常の医学が言うところの原因不明の熱を発したのです。ベークマン博士はその先験的な理解をもって直ちに銀治療を施しました。彼女の話から、その患者が完全に宇宙的な関連の図式を示していることが明らかになりました。このことから私たちは、一方では、人間の精神的な進化に結びついているものと、他方では、病理的な状態に導くものとの間の相互作用について、つまりそれらをどのように処置すればよいかについて学ぶことができます。

秘儀参入者が地上における以前の生を探求できるというのはどのようにしてなのでしょう？ 普通の人生の場合のように、私たちが前世に結びつけられ、カルマに巻き込まれている限り、通常の意識をもって前世を振り返ることはできません。前世の影響は現世の中で感じ取られます。私たちは私たちのカルマ

をそれらの影響の下に成就し、私たちの人生はカルマによって決定されます。通常の意識なしには振り返ることはできないのですが、もし、そうしたいのであれば、しばらくの間その限界を振り捨てなければなりません。そして、前世を客観的に見ることができるようになったとき、私たちは振り返ることができる位置に立つこととなります。

もちろん、私たちは全く正常な方法で現状に復帰できなければなりません。そうでなければ、秘儀に参入したのではなく、精神異常の人になってしまいます。

これは精神的な発達過程で生じる現象です。私たちは私たちが前世につなぎ止めるところのもやい綱を解くのです。異常な場合や病理的な状態では、病気がその働きをします。病気とは、私たちが精神的な視覚やその他の意識レベルを達成するために、通常はより高次の領域において達成しなければならないものの異常な仕方での表現なのです。もし、人間のその他の組織から切り離された血がそれ自身の意識 - と申しますのも、血はその他の器官がそれぞれの特別な意識状態を有しているようにそれ自身の意識を有しているからです - に支配されるとすれば、つまりその他の組織による縛りから自由になるとすれば、それはこの異常な状態の下で、ただし無意識的にですが、前世を振り返ることになるのです。意識的に振り返るためには、私たちはまず通常の意識なしで済ませることができるようにならなければなりません。病理的な状態で振り返るときには、通常の意識との結びつきが保たれているのです。

このように、例えばカルマに関連するすべての病気に対するすばらしい治療法となる銀の金属性についての探求は、銀の秘儀から発してその他の深遠なる秘儀へと導きます。私たちは人間におけるあの様々な意識状態に関連したあらゆる金属的な本性について語ってきましたが、今度は、これらの意識状態に対する私たちの探求をこれらの状態を通して到達することができる別の世界との関連へと広げていくことにしましょう。つまり、次の講義では、精神的な知識に向かう正しい道についてより詳細に探求することを提案いたします。

第六講

秘儀参入への認識、覚醒意識と夢の意識

これまで人間の魂の力から発達する様々な意識状態についてお話ししてきました。秘儀参入への認識は、私たちの世界認識がこれらの様々な意識状態に由来する、という事実に依存しています。

今日は、人間の世界に対する関係がどのようにしてこれらの様々な意識状態によって決定されるかを確かめる、ということを提案したいと思います。まず最初に、たったひとつの意識レベル、すなわち日々の覚醒意識が日常生活にとっては十分なものである、ということをお出ししてみましょ。私たちの時代には、通常の覚醒意識に加えて、さらにふたつの意識状態を発達させる可能性があるのですが、さしあたり、それらは知識を獲得するという直接的な目的に対して有効な判断力を提供することはできません。

そのひとつは人間がその中で日々の生活における経験を回顧したり、精神的な存在の生活に関するかすかな暗示を受けるところの夢の意識状態です。しかし、通常の夢の生活の中では、これらの経験や暗示はあまりにもゆがめられ、お互いに相関しないグロテスクなイメージや象徴があまりにも多く混じり込んでいるために、それらから何も学ぶことはできないのです。

もし、秘儀に参入する知識の助けを借りて、人間が夢を見ているときにはどのような世界にいるのかを知ろうとするならば、その答えはおおよそ次に述べるようなものでしょう。人間は、通常の生活において、科学の研究対象であり、感覚によって知覚可能な体すなわち物質体を有している。これは人間の成り立ちにおける第一の構成体であり、誰もがよく理解していると想像していますが、あとで見ていくように、実際には、今日最も理解されていないものです。

第二の構成体はエーテル体ですが、これについては私の著書、特に「神智学」の中でより詳細に記述されています。エーテル体もしくは形成力体はデリケートな組織であり、通常の視覚で見ることにはできません。それを知覚できるのは、死者を死後数年にわたって追っていくことができる第一の意識状態を発達させた人だけです。エーテル体はその全体的な組織がより独立した物質体に比べて、より密接に宇宙に結びついています。



人間の成り立ちにおける第三の構成体は - 古い表現にこだわるのが最もよいように思われますが - アストラル体と呼ばれます。これは感覚には知覚不能な組織ですが、エーテル体と同じようにして知覚することもできません。もし、私たちが、今日、外的な世界を知覚するために用いている認識力をもって、あるいは、死者と接触する最初の超感覚的な意識による洞察をもってアストラル体を知覚しようと試みるならば、アストラル体が位置する場所に私たちが見出すのは空虚あるいは真空以外のものではありません。

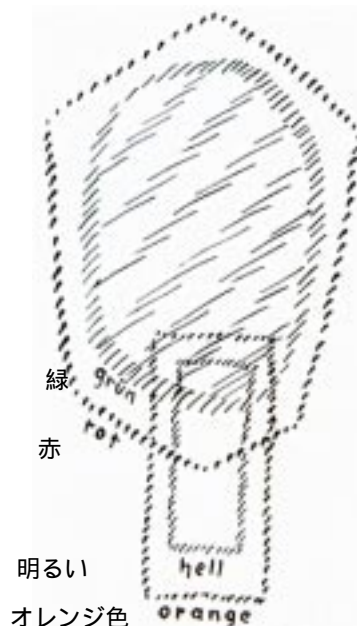
要するに、人間は感覚によって知覚可能な物質体、既に示されたような仕方で行う集中や瞑想を通して発達させることができる力に基づくイメージーションによって知覚することができるエーテル体を有して

います。けれども、これらの力を借りてアストラル体を知覚しようとしても、私たちが出会うのは虚無、何もない空間です。この虚無が内容で満たされるのは、私が記述した空になった意識を達成するとき、すなわち、感覚印象が忘れ去られ、思考や記憶が沈黙させられても、なおその存在を意識するというような仕方、十全なる覚醒意識をもって世界に直面するときだけです。そのとき、私たちは、この虚無の中には私たちの最初の精神的な乗り物、人間のアストラル体があるのだということを知るのです。

人間の組織を構成するものにはさらに自我そのものがあります。私たちが自我を知覚するのは空の意識を段々と発達させるときだけです。

私たちが夢を見ると、私たちの肉体とエーテル体は精神世界に滞在するアストラル体と自我から引き離されているのですが、もし、私たちが通常の意識だけを有しているとすれば、アストラル体と自我だけで知覚することはできません。私たちが周囲の世界において外的な印象を知覚することができるのは、肉体が眼や耳を付与されているからです。現在の人間の進化段階においては、アストラル体や自我は、肉体と異なり、通常の生活においては、眼や耳を付与されていないのです。ですから、人間が肉体とエーテル体から出て夢の状態にはいるとき、眼と耳に去られた肉体が物理世界に残されたかのように、まわり中が暗くなり、何も聞こえなくなるのです。けれどもアストラル体や自我はいつまでも器官を持つことなく、つまり魂の眼や耳なしに留まるように意図されていたわけではありません。私が本の中で述べたような精神的な訓練を通して、これらの精神的な器官をアストラル体や自我の中に目覚めさせることができます。したがって、秘儀参入に伴う洞察を通して、精神的な世界をのぞき見ることが可能になるのです。そのとき、人間は、肉体とエーテル体から離れ、ちょうど肉体とエーテル体の中で物理的なものを、そして、ある意味でエーテル的なものを知覚するように、精神的なものを知覚します。この洞察を達成する人が、そのとき、秘儀参入を達成するのです。

さて、普通、夢見る人の立場とはどのようなものでしょうか？ 眠りに落ちる過程を具体的に想像してみてください。肉体とエーテル体がベッドの上に取り残される一方、アストラル体と自我は物理的な乗り物から抜け出します。この瞬間、アストラル体はまだ肉体とエーテル体に同調して振動しています。アストラル体は一日中眼や耳のあらゆる内的な活動、あるいは、肉体やエーテル体の機能における意志の働きの中に参加していました。アストラル体と自我はこれらのすべてに与っていたのです。それらが体を去るとき、振動は継続します。その日の経験は、それらの振動の継続により、周囲の精神的な世界と接触することになるのですが、そこから生じるのは外的な精神世界と振動し続けるアストラル体のひどく混乱した相互作用です。人はこのすべてに捉えられ、その混乱を意識します。彼が携えていったもののすべては、彼に衝撃を与えた後、振動しつづけながら夢になるのです。



夢が現実の理解にほとんど貢献しないことは明らかです。秘儀に参入した人の立場とはどのようなものでしょうか？ 彼は、肉体とエーテル体から抜け出すとき、持続する振動やその名残を抹消することができ

ます。ですから、彼は肉体とエーテル体から進み出てくるものすべてを抑制するのです。さらに言えば、秘儀に参入する人は、集中、瞑想、そして空になった意識を通して、魂の眼や耳を獲得しています。彼は今や、彼自身の内部で起こっていることではなく、彼の外で、精神的な世界の中で起こっていることを知覚するのです。彼は今や夢の代わりに精神的な世界を知覚し始めます。夢の意識は精神的な知覚に対応していますが混乱した対応物なのです。

秘儀参入者がこの内的なアストラル体の器官、超感覚的な視覚と超感覚的な聴覚を初めて獲得するとき、彼は自分が肉体とエーテル体に発するこれらの残響やその名残を抑制するための絶え間ない努力と衝突の中にあるのを見いだします。彼がイマジネーションの世界に入るとき、つまり、精神的なものについての先験的な知覚を獲得するとき、夢が自らを主張するのを防ぐための絶えざる戦いがあります。彼を惑わし、夢のようなファンタジーへと解消させようとするものと精神的な世界の真実を表現するものとの間には絶え間ない相互作用があるのです。

秘儀に参入しようとする人は誰でもいつかはこの衝突について熟知するようになります。彼は精神的な世界に意識的に参入しようとする瞬間、再び生じる物理的な世界の残映、精神的な世界についての真の像に侵入してくるこの妨害的なイメージを経験する、ということに気づくようになるのです。この強烈な内的衝突を克服することができるのは、忍耐と努力によるのみです。

さて、もし、夢のイメージが私たちの意識に溢れるのにあまりにも安易に満足するならば、私たちは、精神的な世界の現実に参加する代わりに、容易に私たち自身を幻想の世界の中で夢を見る人にしてしまうでしょう。実際、秘儀に参入することを望む人は知的であると同時に極端に強い自制心を持っていなければなりません。そのため彼には何が求められるかを想像してみてください。もし、私たちが精神的な探求について、つまり、精神的な世界に到達するための方法について語るべきであるならば、これらのことさらに注意しなければなりません。もし、私たちが精神的な世界についての理解に向けて第一歩を踏み出すことを望むならば、その使命に対する真の熱情が示されなければならないのです。内的な昏睡、内的な無関心や怠惰はその達成のための途上にある障害物です。私たちの内的な生活は活動的で、生き生きとした反応を示さなければなりません。しかし、白日夢の中で自らを失い、幻想の糸を紡ぎ出すという危険があります。私たちは、一方では、想像力の翼に乗って天空を駆けめぐることができなければならないのですが、他方では、慎重さと真摯な判断力によってこの内的な活動性と応答性を沈静化させることができなければなりません。

秘儀参入者はこれら両方の性質を有していなければならないのです。単に自分の感傷にふけることと同様、知性の支配に屈したり、すべてを理屈でかたづけられるのも望ましくありません。私たちはこれら両極端の間で釣り合いを取ることができなければなりません。私たちは夢を夢見ることができると同時に、地上に足をつけていることができなければならないのです。私たちが精神世界に参入するときには、私たちは創造的なイマジネーションのダイナミックな世界に参加しながら、同時に自分自身をしっかりとコントロールすべきです。私たちは豊かなイマジネーションに恵まれた詩人としての受容性を有しながら、その誘惑に負けまいとするのです。精神的な知識を求めるときには、創造的な衝動によっていつでも点火されると同時に、ファンタジーの世界へと流されないように、実際的な常識によって自分をコントロールすることができなければなりません。そうすれば、私たちは、幻想の餌食になることなく、精神的な現実を経験することになるでしょう。

この内的な魂のあり方こそが精神的な探求においては決定的に重要なのです。私たちが夢の意識についてよく考え、それが精神的な世界から混乱したイメージを魔法のように出現させるものであるということに気づくとき、私たちは同時に、精神的な知識を獲得するためには、夢のような状態に留まろうとする私たちの個性のすべての力が魂の活力として加わらなければならない、ということにも気づくのです。私たちはそのとき初めて、精神的な世界に参入するということは何を意味するのかを知るのです。私は、夢が精神的なものを魔法のように出現させる、と言いました。このことは、夢の意識が体的な生活から導かれる像をも魔法のように出現させる、という叙述に矛盾するように思われるかも知れません。けれども体は単に物理的なものではなく、精神的なものに完全に浸透されているのです。おいしそうながちそうが目の前に出されて、それを食べようとするけれども、ポケットにはそれに見合うお金が少しもない、というような夢を誰かが見るときには、彼の消化器官の真に精神的、アストラル的な内容が食事という象徴化されたものにおいて示されているのです。精神は体的なものの中にその座を有しているという事実にも関

ならず、夢の中にはいつでも精神的な要素が存在しています。夢はいつでも精神的な要素を含んでいるのですが、それは体に関係した精神的な要素である、ということが非常に多いのです。この事実気づくことが必要です。

蛇の夢を見ると、そのとぐろは消化器官や頭部の血管を象徴している、ということが理解されなければなりません。私たちはこれらの秘密へと貫き至らなければならないのです。それは、魂の中で発達させられるこれらの微妙で親密な要素についての理解に至ることができるのは、私たちが秘儀参入の科学を通して精神的な探求に取りかかり、これらのことさらに綿密な注意を払うときだけだからです。

人間が日常生活の中で通過する第三の段階は夢のない眠りです。その状態を思い出してみましょ。肉体とエーテル体がベッドに横たわり、アストラル体と自我組織はこれらの外にあります。肉体とエーテル体からの残響やその名残は止みました。人間が精神世界に住むことができるのはアストラル体と自我の中においてのみですが、必要な器官がないために、何も知覚することができません。彼は闇に囲まれて眠っています。夢のない眠りとは、自我とアストラル体の中に生きながら、私たちを取り囲む広大で壮大な世界を知覚できない、ということの意味をしています。目の見えない人の場合を取り上げてみましょう。彼は色や形についての知覚を有していません。これらに関する限り彼は眠っているのです。さて、知覚するための器官を持つことなくアストラル体と自我の中に住んでいる人を思い描いてみましょう。精神との関係では、彼は眠っています。夢のない眠りの状態にある人間とはそのようなものなのです。集中や瞑想の目的はアストラル体と自我組織の中に精神的な眼や耳を発達させることです。そのとき、彼は彼を取り巻く精神の豊かさを目の当たりにし始めるのです。彼は、通常の意識状態においては眠りの中で失われ、瞑想や集中を通してその眠りから目覚めさせるべきものによって精神的に知覚します。それ以外の場合には配置されていない要素が組み込まれなければなりません。そのとき彼は精神的な世界をのぞき込み、通常は彼の目や耳を通して物理的な世界の生活に与るように精神的な世界の生活に与るのです。これは秘儀に参入する真の認識です。誰かを外的な方法によって精神的な知覚に向けて準備させることはできません。すなわち、彼はまず、通常は非常に混乱した彼の内的な生活を効果的に組織化することを学ばなければならないのです。

さて、人類の歴史においては、誰かを選んで秘儀参入に向けて準備させる、ということがいつの時代でも行われてきました。しかし、極端な唯物主義の時代には、つまり15世紀以来今日に至るまで、これはある程度中断されています。この間、秘儀に参入するということの真の意義は忘れられました。人々は認識への欲求を秘儀への参入なしに満足させることを望み、そのため、物理的な世界だけが適正な探求の場であると徐々に信じるようになったのです。しかし、実際のところ、物理的な世界とは何なのでしょう？ 私たちがその物理的な側面だけを考慮したとしても、それと折り合いをつけることはできないでしょう。物理的な世界はそれを満たす精神を理解できたときにはじめて理解することができるのです。人類はこの認識を再び取り戻さなければなりません。私たちは今、岐路に立っています。世界は分裂し、ますます混乱の様相を呈しています。けれども、私たちは、この混乱、逆巻く闇、すべてを破壊しようとする暗い熱情のただ中で、人間の中に新しい精神性を目覚めさせようとして苦闘する精神的な力の存在に気づいている先験的な認識を有する人がいる、ということを知っています。そして、人智学に向けて準備するという事は、私たちの唯物的な時代の大騒ぎのただ中でもまだ聞くことができるこの精神の声に耳を傾ける、ということなのです。

人間は、いつの時代にも、精神的な世界を知覚するというような仕方での人間としての組織を発達させようと努力してきた、と私は言いました。時代によって条件は変化しますが、古代カルディア時代、あるいはプルネットー・ラティーニの時代を振り返ると、人間は今日に比べて肉体やエーテル体にもっとゆるやかに結びつけられていた、ということが分かります。人間がそれらにしっかりと固定される、というのは当然の成り行きです。つまり、それは私たちの今日の教育からいって避けられないことなのです。いずれにしても、多くの場合、歯が生え替わる前に読み書きを学ぶように強いられるというのに、どうして精神的な存在たちとの交流を期待することができるのでしょうか？ 天使や精神的な存在たちは読むことも書くこともできないのです。読み書きは人間進化の過程で、物理的な条件に対応して発達してきました。そして、もし、私たちの存在全体が純粋に科学的な探求へと方向づけられているならば、私たちが肉体やエーテル体から退くことは明らかに困難であるはずなのです。

私たちの時代は、私たちが肉体とエーテル体から離れているときには、いかなる精神的な経験をも持つ

可能性がない、というような方法で、私たちの文化生活全体を秩序づけることに一定の満足を見いだしているのです。私は私たちの時代の文化を罵倒したり非難したりするつもりはありません。それはその時代の不可避的な表現なのです。後で、その意味について議論するつもりですが、さしあたりは、ものごととはそのようなものであるとして受け入れられなければなりません。

太古の時代にあっては、アストラル体と自我は、目覚めの状態においてさえ、今日に比べて肉体とエーテル体にもっとゆるく結びついていました。秘儀に参入した人たちもまた、彼らにとって自然であった体のゆるい結びつきに頼っていました。実際、はるかな過去においては、ほとんどすべての人が秘儀に参入することができたのですが、人間の地位を越えて上昇することが誰にでも可能であったのははるかな過去の時代、古代インドや古いペルシャの時代だけだったのです。

そして、後の時代においては、秘儀に参入するための候補者の選定は、肉体とエーテル体から退くことにほとんど困難を感じない人たち、そのアストラル体と自我が比較的高度の独立性に恵まれていた人たちの間に限られました。秘儀に参入するためには一定の条件があらかじめ必要とされました。このことは、彼の能力に見合った最高の段階の秘儀に参入することを妨げるものでは全くありませんが、ある地点を越えて成功に導かれるかどうかは希望者がアストラル体と自我の中で容易に独立性を達成するか、あるいは単に苦勞して達成するかにかかっています。そして、このことは彼の成り立ちと自然の配列によって決定されました。世界の中へと生まれて来る人間にとって、誕生から死までの世界に依存することはある程度避けられないことなのです。

ここで、今日の間も、秘儀参入に乗り出すとき、同様の限界に左右されるのか、という疑問が生じますが、ある程度そういうことがあります。この講義では、精神的な世界へと導く真実の道と偽りの道について十分かつ明確な説明を加えるつもりですから、今日の秘儀参入への途上に横たわる困難について指摘しておこうと思います。

古代の間も、秘儀参入者になるにあたって、その自然に備わった資質により依存していました。現代人もまた、秘儀参入の入り口にまで連れていかれることはできます。実際、適切な魂の訓練を通して、精神的な視覚を発達させ、精神的な世界を知覚することができるように彼のアストラル体と自我組織を形成することができるのです。しかし、この視覚を完全なものにし、完成させるためには、今日でもなお、何か別のもの、極端に微妙でデリケートな何かに依存しているのです。私にできるのは一步一步先に進むことだけです。今日これから私がお話しすることについて、次の講義の内容を把握する前に、最終的な結論を出さないよう皆さんにお願いしなければなりません。

今日の秘儀参入においては、人はある程度年齢に依存しているのです。人生に期待がもてる37才で秘儀参入を始める場合を取り上げてみましょう。彼は瞑想や集中、その他の修行を、誰かの指導の下、あるいは何かの教本に基づいて、自分で実行し始めます。瞑想やあるいは何らかのテーマを繰り返し実行することで、彼はまず第一に地上における彼の生活を振り返ることができる能力を獲得します。彼の地上生がひとつのまとまった織物の形で彼の内的な目の前に現れます。ちょうど物体が三次元空間の中に置かれているように、つまり、椅子の前二列とそこに座っている人たち、向こう側には机、その後ろの壁というように私たちはすべてを遠近法によって、同時性の中で見るのです。このように、私たちは秘儀参入のある段階において、「時間」をのぞき見ることとなります。時間の経過が空間的な印象を与えるのです。さて、私たちは37才のときに自分を振り返ります。私たちは36才のとき、35才のとき、そして、誕生のときに至るまで何らかの経験をしてきました。私たちは私たちの前にひとつの織物を時代を遡りながら見ます。

今、秘儀参入のある段階において、ある人がその人生を逆向きに振り返ると仮定してみましょう。37才では、彼は誕生からおよそ7年目の歯の生え替わりの時期まで、そして、7才から14才、つまり思春期までを振り返ることができるでしょう。そして次に、14才から21才、そして37才までの残りの人生を振り返ることができます。彼は彼の人生をパノラマのように、いわば時空間的な見通しにおいて探求することができます。彼が空になった目覚めの意識から生まれる意識をこの知覚に加えることができるとき、ある種の知覚力が彼を貫いて閃くのです。彼は洞察を獲得するのですが、その洞察は非常に広範な形態を取ります。誕生から7才までの経験、14才から21才、そしてその後の時代の経験は彼の中に異なる反応を喚起します。それぞれの時代が独特の反応を示し、それ自体が独自の視覚力を有しているのです。

さて、63、4才の人について考えてみましょう。彼は37才より後の時代を振り返ることができます。

21才から42才までは比較的均一のように見えます。それに続く時代はもっと違ってきます。42才から49才まで、49才から56才まで、そして56才から63才までの時代で彼の知覚には重要な違いがあるのです。これらすべての時代は彼の成り立ちにおける重要な部分になっています。それらは彼の地上における人生の精神的な側面を表しているのです。もし、彼がこの内的な視覚を発達させるとすれば、彼は彼の様々の洞察がある特定の年代における彼の存在レベルに依存している、ということを理解するでしょう。その最初の7年間は7才から14才までの年代とは異なる洞察を彼の中に目覚めさせます。14才から21才までの思春期、21才から42才までの年代はさらなる相違を、そして、もっと後の時代に属するいくらか異なる洞察力がそれに続きます。

私たちの人生の経験についての記憶像を有する能力を獲得するとともに、その記憶像を消し去った空の意識から導かれる洞察を私たちが達成したと仮定してみましょう。今やインスピレーションの力が働き始め、その結果、私たちは、もはや物理的な目を通してではなく、精神の眼である新しい視覚器官を通して私たちの人生の期間を探求します。私たちは、もはや様々なできごとがあった人生の期間の像を魔法のように出現させるのではなく、インスピレーションを通して、精神的な眼や耳でそれらを知覚する地点へと達したのです。あるときは7才から14才までの人生の期間を超感覚的に眺め、別のときは49才から56才までの期間を、ちょうど外的な世界で眼や耳を使って聞いたり知覚したりしたように、超感覚的に聞くのです。インスピレーションの世界においては、7才から14才までの期間、そして42才から49才までの期間から導かれる力が使われます。この世界においては、様々な人生の期間が異なる認識器官になるのです。このように、私たちの視覚の範囲はある程度私たちの年齢に依存しています。37才では、秘儀参入の経験を一次情報として語る事が完全に可能なのですが、63才になれば、私たちはより深い知識をもって語る事になります。何故なら、その年代では別の器官を発達させているからです。人生の期間が器官を創造するのです。さて、ブルネットー・ラティーニやアラヌス・アブ・インスリスのような人物を本に載っているような情報からではなく、超感覚的な知識から記述することを提案すると仮定してみましょう。(これらの例は、ここ数日にわたって既にお話ししていますから、皆さんよくご存じのはずですね。)もし、私たちが37才になったとき、彼らのことを描写しようとするならば、目覚めた眠りの意識の中で彼らと精神的に関係している、ということを見出すでしょう。隠喩的に言えば、私たちは私たちの仲間の人間と語るようにして、彼らと語り合うことができるのです。そして、不思議なことに、精神的なことがらについて彼らと語る事ができるのは、現在の叡智と精神性のレベルからだけなのです。そのとき、私たちはいかに多くのことを彼らから学ぶことができるかを知ります。私たちは彼らに耳を傾け、彼らが伝えようとする事を信頼して受け入れなければなりません。

さて、皆さんは、精神的な世界において、ブルネットー・ラティーニのような人物と共にあるということが軽々しいことではない、ということにお気づきでしょう。けれども、もし、私たちに必要な準備ができているとすれば、私たちは自分が夢に幻惑されているのか、あるいは精神的な現実の中にいるのかを決定することができます。そのため、私たちが受け取る伝達を評価することは可能なのです。

では、私たちが37才のときに精神的な世界においてブルネットー・ラティーニと語り合うと想像してみましょう。もちろん、このことは文字通り受け取られるべきではありません。彼は私たちに多くのことを語るでしょう。そして、多分、私たちはもっと正確で詳細な情報が必要だとも思いません。それに対して、彼は、「その場合、我々は現在の20世紀から19、18世紀、そして私がダンテの師として生きた世紀にまで遡って足跡を辿らなければならない。もし、あなたがこの道を通して私について来ることを望むならば、あなたがもう少し歳を取るまで、つまり、あなたがあと何年かの年月を後にするまで待たなければならない。そのとき、私はすべてを話し、あなたの知への渇きを満たすことができるだろう。あなたは高次の秘儀参入者になることができるが、現実には、精神的な意欲だけでは過去への道を通して私についてくることはできないのだ。」と言うでしょう。と申しますのも、このことが可能であるためには、皆さんはもっと歳を取っていなければならないからです。もし、皆さんが問題の人物とともに精神世界へと障害なく帰還することを確実なものにしたいならば、皆さんは少なくとも42才を通過して60才に達していなければならないのです。

これらのことがらは人間存在のより深い側面とそれらが若年期や老年期において果たす重要な役割を皆さんに示す事になります。何故ある人は若死にし、別の人は熟年まで生きるのかというようなことを私たちが理解することができるのは、これらのことがらに注意を払うときだけなのです。このことについて

は後でもう少しお話いたします。

人間が発達していくとき、いかに彼が精神的な世界についての知覚をますます深め、広げていくかを見てきました。つまり、ブルネットー・ラティーニのように肉体を脱いだ魂として精神世界にある存在との関係が、彼の進化状態とともに、すなわち精神的な知覚のために使用される器官が若年期に発達させられたものであるか、あるいは老年期に発達させられたものであるかによっていかに変化するかが示されました。

世界の俯瞰的な探求と、そのようにして人間の魂の前で展開するその進化はその他の領域に拡張されることができません。問題は、人間の意識、人間の洞察をどのようにして拡張し、それに別の方向性を与えるかということです。今日はそのようなひとつの方向性を示し、そのさらなる詳細については次の講義で述べることにします。

私たちは、地上の生活における通常の意識の中で、誕生から死までの間の地球の環境についてだけ知っています。もし、私たちの混沌とした夢の生活に終わりがあり、私たちが、通常の意識ではなく、深く夢のない眠りの状態において知覚を有することができていたとすれば、私たちはもはや私たちの周囲に、純粹に地球のものであるところの環境を経験してはいなかったでしょう。私たちは、実際、通常とは異なる知覚と意識の状態を付与されていたことでしょう。

さて、私たちの日常意識が私たちの身近な環境と関連している、と考えてみましょう。私たちは地球の内部をのぞき見ることはできませんから、私たちが直接とりまく環境が通常の意識の領域です。宇宙に存在するその他のあらゆるもの、太陽や月、そしてその他のすべての星はこの領域へと輝き込みます。太陽と月は、他の天体と比較して、宇宙におけるそれらの存在をより明確に示すものを送り込んでいます。もし、物理学者たちが彼らのやり方で - と申しますのも、彼らは私たちのアプローチを考慮しようとしなからですが - 月と太陽の領域において卓越している状態を経験できるとしたら、驚愕することでしょう。と申しますのも、天文学や天体物理の教科書に書いてあることは全く的外れだからです。それらは非常に漠とした示唆を与えるだけです。私たちが、通常の生活において、誰かと知り合いになることを望み、後で話す機会を得たならば、私たちは通常、この人物については漠とした印象しかない、彼はほとんど視界から消えるほど遠くに退いているに違いない、とは言いません。そのような場合には、私は彼についてもっとはっきりとした印象を持ち、彼の様子を記述するはずですが。

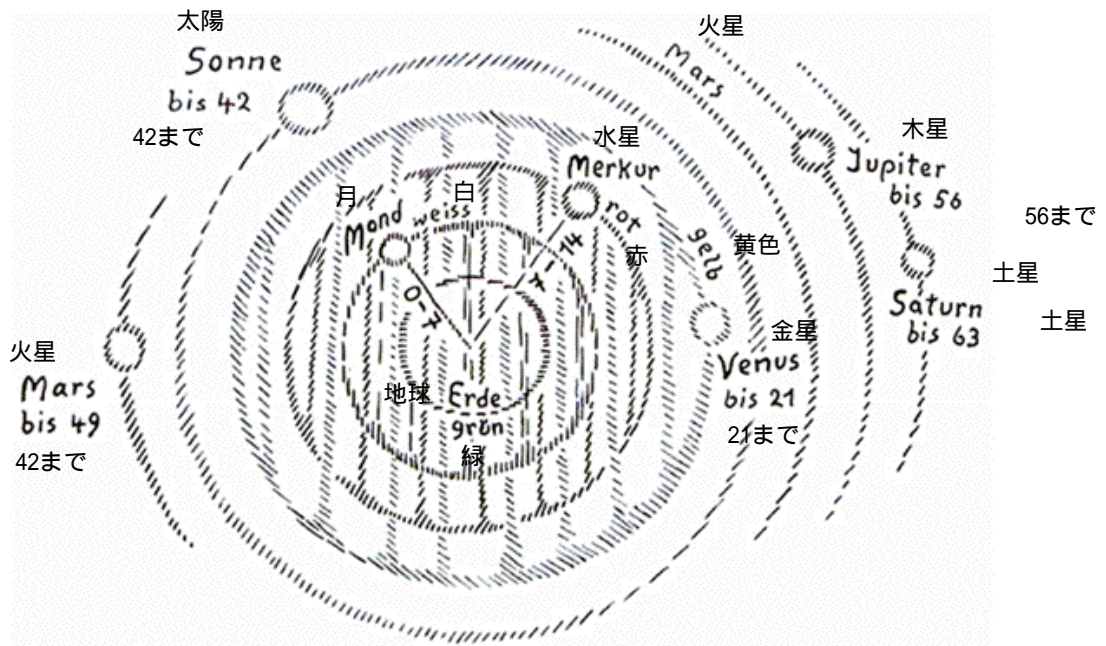
もちろん、物理学者に選択の余地はありません。当然の結果として、彼らは遠く離れたところから星々を記述することができるだけです。けれども、変化し、拡大した意識は私たちが星の世界へと引き上げます。そして、私たちがこのことから最初に学ぶのは、通常の生活において語るのとは全く異なる方法でこれらの星の世界について語る、ということです。

私たちは、通常の意識の中で、私たち自身がこの地上に立っているのを見ます。そして、夜空の月は私たちの上にかかっています。別様に見るためには、私たちは異なる種類の意識の中に入っていかなければなりません。そして、それにはときとしてかなりの時間がかかります。私たちがこの意識を達成し、私たちの経験、すなわち誕生から7才の歯牙交代期までに通過したあらゆることを、死者と連なる意識、つまり、インスピレーションを達成し、それによって内的な視覚力となった意識をもって知覚することができるとき、私たちは私たちの周囲に完全に異なる世界を見ます。通常の世界はぼんやりとしてはっきりしないものになります。

この別の世界とは月の領域です。私たちがこの新しい意識を達成するとき、私たちはもはや月を独立した実体としては見ません。私たちは、実際、月の領域に住んでいるのです。月の軌道は月の領域の最も遠い境界を通過しています。私たちは私たち自身が月の領域の内部にいることを意識します。

さて、もし、8才の子供が秘儀に参入することができ、その人生の最初の7年を振り返ることができたとしたら、その子はこのような仕方です月の領域に住むことができるでしょう。実際、子供はまだ後の時代の影響によってだめになっていないので、月の領域に入っていくことにほとんど困難を感じないでしょう。

このことは理論的には可能ですが、もちろん、8才の子供を秘儀に参入させることはできません。



私たちが、最初の人生期である誕生から7才までの期間から導かれる力を精神的な視覚のために用いるとき、私たちは通常意識によって知覚される領域とは極端に異なる月の領域に入っていくことができます。ひとつの類推が論点を説明するのに役立つでしょう。

今日の胎児学では、生物学者たちは胎児の発達をその最初期の段階から研究しています。胎児の発達のある段階で、外縁部のある一点において細胞膜の厚みが増す、ということが起こります。次に包接が起こって一種の核が形成されます。ところが、このことは顕微鏡ではっきりと見ることができる一方、これは胚珠であり、胎児に過ぎないのだ、と言うことはできません。何故なら、他の部分もまた重要な部分だからです。

同じことが月やその他の星にも当てはまります。私たちが月として見ているものは単なる一種の核であり、その全領域が月に属しているのです。地球は月の領域の中にあります。もし、胚珠が回転すれば、この核もまた回転するでしょう。月の軌道は月領域の境界線を辿っているのです。

ですから、これらのことがらについてまだなにがしかのことを知っていた古代人たちは、月についてではなく、月領域について語りました。私たちが今日見るような月は、彼らにとっては最も遠い境界にある一地点に過ぎませんでした。この点は毎日その位置を変え、28日間かけて私たちのために月領域の境界線を辿ります。誕生から7才までの私たちの内的な経験がインスピレーション的な視覚になるとき、私たちは、私たちの地球についての知覚を徐々に失うとともに、月領域に入っていくための力を獲得するのです。

人生の第二期、歯牙交代期から思春期までの経験がインスピレーション的な視覚に変化させられるとき、私たちは第二の領域である水星（訳注：金星のこと）領域を経験します。私たちは地球とともに水星領域に生きるのです。水星領域での経験を見ることができるのは、7才から14才までの地上における人生の経験を意識的で明確な知覚力をもって振り返るとき、私たちが私たちのために創造するところの視覚器官によってだけです。思春期から21才までの期間から導かれるインスピレーション的な視覚力をもって、私たちは金星（訳注：水星のこと）領域を経験します。古代人たちは私たちが想像するほど無知ではありませんでした。彼らは彼らの夢のような認識力によって、これらのことがらについて多くのことを知っていました。そして、彼らは、私たちが思春期の後に経験する惑星システムに、この時代における性的な目覚めに関連した名前を付与したのです。

そして、21才から42才までの期間における私たちの経験を意識的に振り返るとき、私たちは私たちが太陽領域にいることを知ります。

それぞれの人生期が内的な生活のための器官に変化させられるとき、それらは私たちに宇宙的な意識を一步一步拡大させる力を付与するのです。

私たちが42才になるまでは太陽領域について何一つ知ることができない、というのは真実ではありません。私たちは水星存在たちからそれについて学ぶことができます。何故なら、彼らはそれについて十分に知っているからです。けれども、その場合、私たちの経験は、超感覚的な教えを通して、間接的に私たちのところにやって来ます。自分自身の意識で太陽領域を直接経験するためには、つまり、その中に入って行くことができるためには、私たちは21才から42才までの期間を生きただけではなく、42才を越えていなければなりません。私たちは過去を振り返ることができなければならないのです。と申しますのも、秘儀が開示されるのは回顧的な探求の中でのみだからです。

そしてさらに、私たちが49才までの人生を振り返ることができる時、火星の秘儀が開示されます。もし、私たちが56才までの人生を振り返ることができるのであれば、木星の秘儀が明かされることとなります。そして、深いボールに包まれているとはいえ、驚くべき輝きを発する土星の秘儀 - その秘儀には、次の講義で見ていくように、宇宙の深い秘密が隠されています - が開示されるのは、私たちが56才から63才までに起こったできごとを振り返るときです。

ですから、皆さんお気づきのように、人間とは実際、小宇宙なのです。彼は通常の意識では決して知覚されることのないこれらのこととがらに関連しています。もし、月の力が誕生から7才までの間、彼の中で活動していなかったとすれば、彼は彼の人生を形づくったり、秩序づけたりすることができなかつたでしょう。彼は後になってその影響を知覚します。もし、水星の秘儀が彼の中で活動していなかったとすれば、彼の7才から14才までの経験を再創造することはできなかつたでしょう。同様に、もし、彼が金星領域に内的に関連づけられていなかったとすれば、14才から21才までの期間 - もし、彼がカルマによってそれを受け取るように予め配置されていたとすれば、強力な創造力が彼に注ぎ込まれる期間ですが - における彼の経験

を再創造することもできなかつたでしょう。そして、もし、彼が太陽領域に統合されていなかったとすれば、彼は21才から42才までの時代、つまり、私たちが若年から熟年へと通過していく年代についての成熟した理解や経験を発達させることができなかつたでしょう。昔のシステムは非常に異なっていました。職人は21才になるまで徒弟として働きました。次に「旅する男」になり、最終的に「親方」になりました。こうして、21才から42才までの年代の内的な発達はずべて太陽領域に関係づけられていたのです。そして、56才から63才までの彼の衰退期における経験のすべては土星領域の影響に帰属させることができます。

私たちは地球とともに7つの互いに貫き合う領域の中に存在しており、人生の経過にしたがって、それらの中に成長するとともに、それらに関連づけられるのです。誕生から死までの私たちの人生は、私たちを形づくる星の領域からの影響によって、当初のパターンからの変化を被ります。私たちが土星の領域に達するとき、私たちは惑星領域の存在たちがその慈悲によって私たちのために成し遂げるもののすべてを通過したことになります。そのとき、私たちは、秘教的な意味において、秘儀に参入した立場から惑星生活を振り返るところの自由で独立した宇宙存在、つまり、ある意味で、もはや以前の人生期からの強制に左右されない存在として船出するのです。これらのこととがらについては、次の講義でさらにお話しする予定です。

第七講

星の世界の認識、人類の歴史時代の区別とその精神的な背景

前回の講義では、人間がいかに様々の人生の期間を駆使して、それらの期間を精神的な視界をもって振り返るかを見てきました。彼は、このようにして、彼の意識を星の世界との十分な霊的交渉に向けて一步一步上昇させるインスピレーションを達成します。もちろん、この世界は、純粹に靈的な存在たちと事実の純粹に靈的な表現、顕現として理解されなければなりません。

精神世界への扉を開き、その世界の探求に取りかかるときには、必要な意識状態と必要な魂の条件を発達させるために骨の折れる努力がなされなければなりません。私たちは、通常の意識を用いて精神的な洞察を達成できるという幻想を抱くべきではありません。

この点を示すために、いくつかの特別な例が役立つでしょう。精神的な探求において間違いの源泉となる可能性があるものを示す前に、次のような前置きをしておきたいと思います。

精神世界への扉の鍵を開け、いわば精神世界との対話を持つための知覚を可能にするところの精神的な訓練に真剣に取りかかる人は、人類の歴史的な進化は広範な特殊性、すなわち精神的な背景についての特筆すべき差違を示している、ということに気づきます。

後で示すような理由によって私たちがミカエルの時代と呼ぶところの今の時代は一九世紀の終わりから三分の一、およそ一八七〇年代に始まりました。この時代に先立つ時代は三、四世紀の間続きました。精神的な認識を有する人たちにとって、この時代の性格は完全に別のものでした。さらにその時代に先立ち、やはり全く異なる性質の別の時代がありました。したがって、私たちが秘儀に参入する認識をもって過去を振り返るとき、個々の時代が全く異なる印象を呼び起こす、ということが分かります。私はこれらの印象を抽象的な記述ではなく、具体的な例によって示そうと思います。

この連続講義の中で、人類の進化に関して様々の役割を演じてきた人々についてお話ししてきました。例えば、有名なダンテの師ブルネットー・ラティーニ、シャルトルの学院における教師たち、ベルナルドゥス・シルベストリ、アラヌス・アブ・インスリス、フィオーレのヨアキムについて触れましたが、さらに、九世紀から一二世紀あるいは一三世紀にかけてさえ、何百人の人々について語る事ができるでしょう。これらの人々はそれぞれがその時代を特徴づける人たちでした。

精神科学の立場から、人類の歴史を、例えば、ダンテやジョットーの時代、すなわちルネッサンスの時代を探求しようとする人は、精神世界にいる人間、肉体を脱いだ人間たちと交わることが絶対に必要である、と感じます。つまり、隱喩的に言うと、死と再生の間にある人間たちと面と向かって出会わなければならない、と感じるのです。秘儀に参入する認識の中で、私たちは、ブルネットー・ラティーニのような人物に対する私たちの精神的な関係は物理的な世界における私たちの仲間の人間との関係のように個人的なものでなければならない、という明確な感情を持つのです。私はこれについて、以前に述べたことの中で示唆しようと試みました。つまり、フィオーレのヨアキムやブルネットー・ラティーニについて語ったとき、私はこの時代を、私の記述にできるだけ個人的な気味を与える必要があると感じるのは明白なことである、というような仕方です。一九世紀の三分の二に至るまで続く次の時代においては状況は全く異なります。この時代には、私たちが接触しようとする肉体を脱いだ魂と個人的あるいは個別的关系を持つ必要はずっと少なくないのです。私たちはむしろ彼らをその全体的な環境の中で見たいと思うでしょう。つまり、彼らと直接的に接触するのではなく、何か地上的な認識、通常の意識を通して彼らと接触する必要があるのです。

ここで、個人的な経験の中からあることがらを紹介させていただくのをお許しいただきたいと思います。この場合についていえば、個人的な経験は完全に客観的なものなのです。私たちの時代に先立つ時代とはゲーテの時代でしたが、私は数十年にわたって彼の作品の研究に携わってきました。最近の数年間は、精神的な存在として精神世界にいる彼と直接個人的に接触する必要が生じたのですが、当初は、個人としてのゲーテではなく、いわば星の世界における存在としての彼の宇宙に対する全体的な関係性の中で死後の彼を経験する必要がありました。他方、ブルネットー・ラティーニや彼の時代の本質に関する研究に関係する人々と精神的に接触したいときには、彼らと個人的かつ密接な精神的なかわりの中で考えや意見を交換する直接的な必要性が感じられるのです。

これは非常に重要な相違なのですが、それはこれらふたつの時代の内的、精神的な特徴が全く異なっているという事実に結びついています。今日、私たちは、人間、あるいは全人類が精神的な真実を直接理解するという珍しい機会を有する時代、つまり、秘儀参入の科学が普遍的な財産になるという時代に生きているのです。私たちは、ちょうど始まったばかりのこの時代を、文化的に開けた階層の側が主要な事実に、世俗的、物理感覚的な事実ではなく、精神的な事実に心から気づくということなしにやり過ごすべきではありません。これからの私たちの時代は精神世界に直接関連するところの精神科学を精力的に追求していかなければなりません。そうでなければ、人類は定められた使命を果たすことができないでしょう。私たちはますます精神的な時代へと入っていかねばならないのです。

これ以前の時代には、別の力が人類の進化に主要な影響を及ぼしていました。そして、私たちが真正なる星の認識の立場から語るときには、次のように言うことができます。前世紀の七〇年代に始まった時代においては、魂的な生活や物理的な生活、科学、宗教、芸術におけるあらゆるものの中で、とりわけ太陽から輝き出る精神的な力が主要な影響力を及ぼさなければならない、と。私たちの時代においては、太陽の力の影響と活動がますます広範に行き渡るようにならなければならないのです。

真の認識を有する人々にとって、太陽は現代物理学が記述するようなガス球ではなく、精神的な存在たちの集合体です。そして、太陽の光が物理的、エーテル的に輝くように、精神的なものを放射する最も重要な精神存在たちはキリスト教的 - 異教的あるいはキリスト教的 - ユダヤ教的な用語法にしたがってミカエルと呼ばれる存在のまわりに集まっています。ミカエルは太陽から働きかけます。太陽からの精神的な影響はミカエルとその仲間たちの影響と呼ぶこともできます。

私たちの時代に先立つ時代においては、人間の生活や活動、そして認識を求める探求の背後にある原動力は太陽の力ではなく月の力でした。三、四世紀にわたって続き、一八七〇年代に終わりを告げた時代の背後にあった原動力は月の力だったのです。

この時代、地球進化に影響を及ぼしていた指導的な存在たちは、古代の用語法にしたがってガブリエルと呼ばれる存在のまわりに集まっていました。別の名を - 用語はそれほど重要ではありません - 選ぶこともできますが、キリスト教的 - ユダヤ教的な伝統にしたがってガブリエルという名前を使うのが最もよいでしょう。

こうして、私たちは星の世界から導かれる人間の精神的な活動を私が示したような仕方でも気づくようになります。私たちは、秘儀に参入する認識を通して、誕生から歯が生え替わるまでの時期に人間の中で働いているものを確認するとき、宇宙に存在する月の活動に対する洞察を獲得します。言い換えれば、子供時代の最初の年月をインスピレーション的、遡及的に迎えることを通して、私たちは月の影響が特に活発に働いていたガブリエルの時代についての認識を得るのです。

他方、私たちの時代の特徴的な性格を知覚するためには、私たちはもっと成熟し、私たちが二〇代から四〇代であった頃、より正確には二一才から四二才までの間に私たちの中で形成的に働いていた力を振り返ることができるような年代になっていなければなりません。したがって、私たちの時代に先立つ時代においては、世界の宇宙的な方向性に関して決定的な役割を果たしていたのは非常に若い子供たちでした。ガブリエルの時代の力は既に幼年期に働く衝動の中に投影されていたのです。私たちの時代において、太陽の力からの衝動を受け取るように運命づけられているのは三〇代や四〇代の人たちです。つまり、全世界の宇宙的な指導において決定的に重要な役割を担っているのは成人たちなのです。

これらの事実は、私が一昨日皆さんにお話しした直接的で精神的な知覚から得られる実際的な結果です。それらは空疎な理論ではなく、実践的な知覚による果実なのです。ですから、お分かりのように、現在のミカエルの時代に先立つガブリエルの時代を理解するためには、その時代の肉体を脱いだ魂に個人的に出会う必要は特にありませんでした。これらの魂に向き合うときには、幼年期のインスピレーション的な知覚をもっていなければならなかったために、大人の前に立つ子供のように感じられたのです。

それに先立つ時代、アラヌス・アブ・インスリス、ベルナルドス・シルベストリ、フィオーレのヨアキム、ハンピルのジョンやブルネット・ラティーニの時代を探求するのは全く別のことです。この時代は、歯の生え替わりから思春期までの時代に彼の内で働いている力を遡及的に振り返るときに獲得される力によって支配されていました。これは水星の力です。人間がこの人生期を出発点として精神的なものの知覚に対応する器官を発達させるとき、彼は何か非常に意義深いものを経験します。歯の生え替わりから思春期までの時期において、人間は何でも知りたがる子供ですが、この人生期に属する器官をもって知覚

するとき、彼は再び子供の熱情を経験するのです。彼がこの時代に属する人々に個人的に会いたいと望むのはこのためです。そして、彼は秘儀参入から生まれた認識をもって、実際にそうするのです。彼は、ちょうど十才か一二才の子供が目上の人、彼の教師や先生に出会うような仕方ではブルネッティ・ラティーニのような人物に向き合いたいと思うのです。

秘儀に参入する真の認識を自分のものとするとき、人間は現象世界のことから無関心ではありません。彼は大人であると同時に知識を渴望する子供なのです。彼はブルネッティ・ラティーニと対等の立場で向き合うのですが、彼から学びたいという強烈な欲求をもってそうするのです。

十五世紀から十一世紀にまで遡る時代の秘儀に参入する認識はこの関係から来る特別な色合いを帯びています。それは地球と人類に対する主要な衝動が水星から与えられた時代なのです。

それを中心にあらゆるものが回っていた存在、その時代において特別な重要性を有していた存在はラファエルという太古の名前の下で知られていました。ラファエルはルネッサンスに先立つ時代、ダンテやジョットの時代における水星だったのです。私たちは正に歴史上ほとんど知られていない人々、その名前が記録されなかった人々と個人的に知り合いたいと感じるのです。

私たちが精神科学の教えに精通するとき、その時代は私たちの中に奇妙な反応を引き起こします。まず第一に、私たちはブルネッティ・ラティーニやアラヌス・アプ・インスリスのような人物について教科書がほとんど何も語らないことに当惑し、もっと歴史的な事実が与えられないものかと思うのですが、私たちの地平が広がるにしたがって、通常の歴史が沈黙していることに感謝し、ありがたく思うようになります。何故なら、外的な歴史資料は単に断片的なものだからです。もし、私たちの時代の認識に関して、その歴史上の副次的な枝葉末節についての新聞記事が唯一の有効な証明であると考えられるとしたら、それが子孫の目にどのように映るであろうかを想像してみてください。私たちは、これらの人物に関して、百科事典の中に見られる限られた情報によってじゃまされないことにただ感謝することができるだけです。そして、私たちは、今日、人智学協会が手にすることができるあらゆる手段を用いて、これらの人物との精神的な接触を試みるとともに、精神科学の立場から彼らについて確認することができるあらゆることについて報告しようとしているのです。

この関連で、ラファエルの時代において自然認識にたずさわっていた人物たちと関係を持つことはとりわけ重要なことです。より深い自然認識、医学のより深い理解は、この時代の精神的な夜明け（九世紀から十五世紀）の中から超感覚的な知覚の前に現れ出るとともに、私たちに現在流行している物質概念や人間の全宇宙に対する関係についての考え方を教示してくれるところの多くの人物たちを通して伝えられます。私たちが超感覚的な視覚をもってこの時代をのぞき見るとき、その名が後世に伝えられて来なかった多くの無名の人物たちに出会うのですが、これらの人物たちは現実に存在していたのです。これら多くの人物たちが私たちの前に現れるとき、私たちは、そこに立っているのは「大パラケルスス」であるが、その名前は記録には残っていない、他方、後の時代、ガブリエルの時代には「小パラケルスス」が生きていたが、彼は大パラケルススの自然の叡智を、もはやその純粹かつ崇高な精神の形態においてではなく、思い出として有していたのだ、と言います。

後のガブリエルの時代には「小ヤーコブ・ベーム」が私たちの前に現れます。そして、そのときも、この人物は様々の伝統的な教えから学び取った崇高な真実、彼のインスピレーションに刺激を与えた崇高な真実を告げた、と言うのですが、私たちが本当に「小ヤーコブ・ベーム」を理解するのは、後世には知られていない、その名前もアラヌス・アプ・インスリスやブルネッティ・ラティーニと同様、たまにしか触れられることのない「大ヤーコブ・ベーム」が私たちの前に現れるときだけです。ルネッサンスに先立つ時代は - そして、その時代の終わりには、ダンテやブルネッティ・ラティーニのような有名な人物やシャルトルの学院が孤立した明かりのようにそびえ立つ一方で、その中心には、スコトゥス・エリウゲナが標石（訳注：氷河などに運ばれて意外なところで見つかる玉石）のように現れるのですが - 何か力強い精神的な刺激を包含しています。中世についての外的な歴史は闇に包まれているが、この闇は今お話しした時代を照らし出すことができる力強い人物たちの存在を隠しているのです。

私たちが九世紀から十五世紀までのラファエルの時代（原注）に入っていくとき、ダンテやジョット、そして後世にその名が知られていない人物たち、あるいはまた私が触れた別の人物たちが大きく浮かび上がってきます。彼らは身近な人間としての印象を私たちに与えます。肉体の中に一度も受肉したことのないラファエル自身はもっと背景の方向に退いています。永遠に精神世界に居住するその他の精神的な存在

たちはこの時代にはそれほどはっきりとは規定されていません。大きく浮かび上がってくるのは人間、特に死者たちです。

続くガブリエルの時代は、ゲーテ、スペンサー、バイロン卿、あるいはボルテールのような人物たちでさえ精神的な世界の中では影のような存在である、という印象を与えます。他方、私たちは、精神的な知覚を通して、人間というよりも超人のような印象を残すすばらしく壮大な存在を意識するようになります。

彼らは今日も存在しています。そして、地球が私たちの誕生から死までの住居であるように、月の領域が彼らの永遠の住居なのです。これらの印象的な存在たちが私たちの注意を引く一方、人間の魂はもっと背景へと退いています。今日、私たち人間がそうであるように、これらの存在たちはかつて地球に結びついていて、ということが分かります。人間は物理的な体の中に生きていますが、これらの月存在たちは、地球上では、精妙でエーテル的な体の中に生きていました。そして、太古の時代には地上にあって人間と交流し、人間の精神的な教師であった存在たちは今でも私たちと共にある、ということに気づきます。彼らは、彼らの地上での使命が成就したとき、月の領域へと退き、今日ではもはや地球には関係していません。

私の本「神秘学」をお読みになった方はご存じのように、月はかつて地球と結びついていましたが、後に分離しました。これらの存在たちは月の分離に際してそれに同伴し、その後、月の領域の住人となりました。ですから、私たちは、私たちが死後間もない死者たちと連絡を取ることを可能にする認識段階において入っていく世界の中でも、通常の意識に関する以前の認識をまだ保持しているために、私たちを取り囲む人たちはかつて地上において肉体を持った人間であったのだ、ということを経験した覚醒意識によって認めるのです。つまり、私たちは、この異なる意識に参入するとき、ちょうど私たちが地球に属しているように月の領域に属する精神的な存在たちと共にあるのだ、ということにますます気づくようになるのです。彼らは普遍的に存在し、人間の行いに関心を寄せているのですが、それは今日の人間がそうするような物理的な観点からではありません。

かつて人類の偉大な教師であった存在たち、すなわち、もはや地球の住人ではなく、いわば月領域の住人であるところの存在たちの中には、圧倒的な壮大さと最高度に発達した精神性を有し、内的、精神的な荘厳さに満ちた存在が見いだされます。宇宙の神秘に関する非常に多くのことがらを彼らから学ぶことができます。彼らの知識は通常の意識が到達することができる知識をはるかに凌駕しているのです。けれども、彼らはこの知識を抽象的な思考によって表現することができません。彼らのそばに近づくと、歌が押し寄せてくるのに出会いますが、彼らはあらゆるものを詩や芸術的なイメージを通して表現するのです。彼らは、その独自のやり方で、ホメロスや古代インドの叙事詩では知られていなかった崇高な調和をもって私たちに喜ばせ、魅了するのですが、彼らが私たちの前に魔法のように出現させるものすべての中には深い叡智が横たわっています。

とはいえ、彼らの中にはそれほど完全でないものたちもいます。ちょうど地上に愉快な連中や不愉快な連中がいるように、これらの異なる存在たちの間にも、その仲間たちほどの荘厳さや完全さを達成しなかったものたちを見いだすことができるのです。にもかかわらず、彼らは生徒や弟子として地球領域を離れ、月領域に生きながらそこで働き続けたために、ある程度の完成段階に到達しています。卑近な表現ですが、彼らとつき合うとき、彼らが地上のできごとに燃えるような関心を寄せているのがすぐに分かるのですが、それは全く異なる種類の関心なのです。

これらの存在は好意的ではなく、どちらかというところと招かれざる連中なのだ、と想像してはなりません。彼らは、その仲間と比べれば不完全であるとはいえ、現代人が通常の意識をもって到達することができるレベルをはるかに超えた明晰さ、賢さ、洞察力を有しているのです。彼らはいつでもその仲間と同じ習慣を共有しているのですが、今日の通常の人間とは異なる習慣や傾向を有しているのです。

ここでこの詳細に入っていきたいと思いますが、これはある種の重要性を持っています。私たちがそのような存在たちと関係を持つ - これは確かにいくらか卑近な表現ですが - とき、意見交換をしたい、あれこれのことがらについて彼らと話し合いたい、という自然な感情をもつようになります。具体的な例をあげますと、私たちがこれらの存在たちと、書くことについて、人間が記述した作品について語り合っていると想像してみましょう。ある人は単純にその名前を書きとめ、別の人は自分のサインあるいはイニシャルを書くと想像します。私たちがこれらの問題についてその存在たちと議論するとき、彼らは次のように答えるでしょう。お前たち人間は全くつまらないことに、つまり、言葉の一義的な意味、例えば、「鍛冶

屋」や「床屋」が何を意味しているのかに興味を持つが、それらの単語が書きとめられるときの書き手の特別な動き、各人がいかに異なった書きぶりをするか - 速く書くか、骨を折って書くか、巧みに書くか、ぎこちなく書くか、機械的に書くか、芸術的に書くか - を観察する方がもっとはるかに興味深いのだ、と。これらの存在たちは人間が書くときの特別な動きのパターンに綿密な注意を払っているのです。それが彼らの興味を引くものなのです。

そして、私が今お話ししている精神的な世界において、これらの存在たちは、既に地上には住んでいない実在たち、あるときは人間よりも下位に、あるときは上位に位置づけられるような実在たちをその取り巻きとして有しています。彼らは私たちに用語法や命名法について私たちに指導することはありませんが、彼らが地上にいたときから人類が発達させてきた筆記パターンや形態について助言を与えているのです。今日の意味での書くということは、これらの存在たちが地上にいたときには存在していませんでした。

彼らは人間との交わりの中で、筆記が徐々に進化するのを観察してきました。彼らは指の器用な動きに興味を持ち、その器用さが後に羽ペンが加わることによって補完され、さらには万年筆によって補完されるのに注目してきました。彼らは紙に委ねられたものにはほとんど興味を持たず、それをするために必要な動きに完全に没頭したのです。

さて、ある付加的な要素が考慮されなければなりません - 今でも生き残って存在する地球からの放射は大体において見過ごされてきました。それらの放射が取る多くの形態の中に、まず今お話しした人間から発する動きがあります。これらの存在たちと語り合うことができるのは、人間から発する動きなのです。

ところで、さしあたり、これはあの存在たちの真の領域へと導くような何かではありません。何故なら、彼らが地上に住んでいた時代には書くということはまだ存在していなかったからです。今日の人間が自分の流体放射に関して限定的な理解力しか持ち合わせていないことについて、これらの存在たちから発せられるコメントは相当に皮肉に満ちたものです。現代人には無視されますが、それはこれらの実在たちには非常によく知られたものなのです。そのように、これらの存在たちが地上にいた時代には、流体の放射、皮膚からの流体放射は決定的に重要なものだったのです。人間はその吐息を通して仲間の人間を認識するようになっていたのですが、このことは後には知られなくなりました。

これらの存在たちが特に受け入れる第三のものとは皮膚からの発散、人間から発する空気要素です。これらすべての放射は、あとで見えていきますように、半精神的な性格を有しているかも知れませんが、これらの存在たちが特に敏感なのは人間から発するこれらの放射 - 筆記における固体要素、皮膚発汗における液体要素、皮膚呼吸における空気要素です。人間はいつでもその皮膚を通して呼吸していることを思い出さなければなりません。

第四に、これらの存在たちは熱放射を受け入れます。これらすべては地上に存在しているために、あの月存在たちにとって特別に重要なものなのです。人間はその筆記における動作の構成やその発散における特別な性質によって判断されるのです。

次は恒常的に存在する光の放射です。誰でも、オーラからだけではなく、肉体やエーテル体からも光を放射しているのです。通常の状態では、これらの放射はあまりにもかすかであるために目には見えませんが、最近、モーリッツ・ベネディクトは特別にしつらえられた部屋を用いてそれらが存在することを示しました。彼は肉体が場所によって様々に異なる赤や黄色、そして青い光の放射を示す繊細なオーラによって取り巻かれているのを示したのです。モーリッツ・ベネディクトが私たちに語るのは、彼がどのようにして色のついたオーラを示したかです。彼は通常の光の条件下では体の左側半分を、オーラを出現させる条件下では別の半分を示しました。すべてはいかに適切な実験条件を設定するかにかかっています。

第六の放射は化学的な力の放射ですが、これは、今日、地上においては例外的なケースであり、まれにしか見られません。それは当然のことながらいつでも存在しているのですが、黒魔術が行われるようなまれな場合にしか作用しないのです。人間が自分たちの化学的な放射を意識し、それらを探求するのは、地上で黒魔術が行われているときなのです。

七番目の種類の放射は精神的な生命の直接的な放射、もしくは命の放射です。今日、化学的な放射を用いるとすれば黒魔術に陥ることは避けられませんが、それは嫌悪すべきものであり悪徳です。黒魔術は対処すべき力ですが、生命放射がそれほど重要ではないというわけではありません。今お話ししている月存在たちの場合、絶えず生命放射に依存し、それに働きかけるとともに、善のために用いているのですが、彼らは黒魔術師ではありません。何故なら、黒魔術師とはある条件下で悪に屈

し、「地上で」悪を行うものだからです。けれども月存在たちが生命放射に依存することができるのは、太陽の反射光の中に生き、その影響の下にある満月のときだけです。私たちは精神世界から学ぶものを創造的に用いるように努めなければなりません。私たちの時代の使命は生きたアイデアを見だし、生きた概念、知覚、そして感情を発達させることであり、死せる理論を発動することではないのです。そして、これらは私たちがミカエルと呼ぶ存在に結びついた存在たちによって直接インスピレーション的に与えられるのです。

以前のガブリエルの時代、人類は物質世界により引きつけられていました。人々は、ある条件下で人間に密接に関係する存在たちとの接触を求めようとはしていませんでした。それはこれらの存在たちがその時代には知られていなかった何か、つまり、人間から出てくる神秘的な放射に関係していたからです。

既に述べたような仕方では私たちが死者と関係を持つところの精神的な世界は、私たちが誕生から死までの間に住むところの物理的な世界に隣接しています。けれども、この世界は他の多くの側面を有しており、その中には人間の放射の中に生きるあの力の作用効果があります。ある意味で、これは宇宙の中でもきわめて危険な領域であり、私たちが持つべきなのは、今回の連続講義でもしばしば触れましたが、これらの月存在たちから進み出てくるあらゆるものを、悪の力ではなく、善の力にするようにな魂的、靈的なバランスと抑制力です。

実際、今の時代のすべての力と衝動は、生命放射を地上のものとする方向に急いで向かわなければなりません。ところが、致命的に容易なのは、この生命放射と私たちが大喜びで持ちたいような他のすべての放射との間に横たわるもの、つまり黒魔術の餌食になる、ということです。人間がとりわけ好むのは、動きの中で表現されるもの - これについては後ほどお話しするつもりですが、流体放射や光放射の中に存在しているものを可視化する、ということです。このすべてはある程度善の力に関連しており、ただ善に向かうことができるだけなのですが、それは人々の間でミカエルの時代がその夜明けを迎えているためです。このすべての間に横たわっているのが、精神的な探求に向かう正しい方法を追求するためにはそれに対抗しなければならない黒魔術なのです。

1. 人間から発する動き
2. 液体要素の皮膚からの発散
3. 空気要素の皮膚からの発散
4. 熱放射
5. 光放射
6. 化学的な力の放射（黒魔術）
7. 生命放射

さて、地上の人間と月存在たちとの間の精神世界におけるこの関係が - そして、これは無意識の領域の中で絶えず生じているのですが - 生じるとき、ある種の月存在たちが筆記や描写の動きに対して発達させる興味、つまり、超感覚的に見ることができるこの興味に関しては、精神世界におけるある種の元素存在たちの中にもその残響が見いだされます。元素存在たちは月存在たちよりも低次の段階にあります。彼らは一度も地上に受肉したことはなく、靈的 - エーテル的な存在として、隣接する世界に住んでいます。彼らの人間世界に対する興味の結果とは次のようなものです。観察によって、人間が筆記を通じて伝える考えは彼の全存在に働きかける、ということが分かります。それらの考えはまず最初に自我の中に存在し、そしてアストラル体に伝えられます。アストラル体は正確に自我が決めたとおりの動きを遂行します。次にそれらはエーテル体からさらに肉体にまで作用します。ある種の元素存在たちはこれらの影響を観察し、同じように反応することを望みますが、それは不可能なのです。何故なら、彼らの世界に通用する法則は筆記が実行される世界の法則とは異なるからです。筆記は地上の人間の物理世界における特権なのです。

ところが、次のような状況が生じます。ものを書いたり、考えたり、あるいは感じることでさえ、しっかりとそのエーテル体につながり止められている人々がいるのです。つまり、そのような人々の場合、エーテル体全体がそれらの過程に巻き込まれ、そしてそれが肉体に強く刻印づけられます。その自我は抑制され、アストラル体とエーテル体と肉体は筆記や描写を忠実に再現します。霊媒とはこのようなタイプの人

間なのです。

そのような霊媒たちは、自我が抑制されているために、月存在から筆記の動きを学んだ精神世界の従順な元素存在たちを自分の中に取り込みます。そして、十全なる自我意識をもってではなく、それをコントロールするところの元素存在たちの影響下で筆記の動きを実行するのです。霊媒的な筆記や描写、通常の霊媒現象が起こるのは、減退した意識状態における霊媒からの発散を通してです。これらの放射はそれをコントロールするために利用されます。

第二の種類の放射は月存在の影響下で容易に人間の芸術的な才能を吸収することができるある種の存在たちによって利用されます。これらの存在たちもまたある種の人間たちの中に入って行くのですが、その人間の表層意識は抑制され、放射へと導かれるある種の芸術衝動をそのエーテル体とアストラル体の中に有しているのです。ある種の条件下で、このタイプの人間が元素的 - 精神的な存在に取りつかれ、それらの放射が、一見するとまぼろし（ファントム）の形をしたもの、つまり、その一部はその人間の人生経験についての知覚がエーテル体とアストラル体にまで沈み込み、放射として現れるところのものから構成され、別の部分は、彼の中に入り込んだ元素存在だけが住む世界から伝えられるところのものから成り立っているところのファントムに侵されているのを観察するのはきわめて興味深いことです。

さて、同様の結果はシュレンク-ノッチングの実験からも得られました。彼の実験対象はある種の霊媒タイプの人たち、影響を受けやすい霊媒たちでしたが、彼らは、その自我が抑制され、減退した意識状態の下では、彼らの皮膚からの流体放射のために、元素存在たちにとって理想的な素材でした。そのテーマに関しては、シュレンク-ノッチングによる興味深い本があります。それをいかさまだと言う人もいれば、高く評価する人もいました。後者が彼の発見を普通ではないと考えたとしても驚くにはあたりません。何故なら、霊媒を使って実験が行われたとき、エクトプラズム、すなわち地上には見いだされない精神的な要素を体現する形態が体のある部分から流れ出した、というのは普通のことでないからです。多くの場合、霊媒が最近見たグラビアの絵がその形態に関連している、ということが分かりました。何かが霊媒から流れ出します。それは皮膚からの発散です。そして、この中には全く精神的な何かが流れ込むのですが、それには霊媒が最近グラビアや漫画雑誌の中で見た、例えばポアンカレの肖像のようなものが結びついているのです。

人々がそのようなことに驚愕するとしても驚くにはあたりません。けれども、流行の装いをした品のよい人々が、そして、皮膚からの分泌について話したり、魂の具現化について議論したりするのを最も嫌がるであろうようなご婦人方までが、これらのエクトプラズム的な形態が紛れもない霊媒の汗から具現化されるのを見たいというみだらな欲求を感じるというのは本当に驚くべきことです。

シュレンク - ノッチングの実験で見られた現象は、単に分泌物が皮膚からの発散を通して元素存在たちによって活性化されたエクトプラズム的な形態へと具現化したものにすぎません。

同様に、皮膚発散、すなわち霊媒から流出する気体の形成はある種の元素存在たちによって刺激されることがあります。けれどもこれらの皮膚発散は特定の人間の形態に非常に密接に結びついており、これらの存在たちに可能なのは、せいぜい人間自身の幽体（ファントム）を創造するという程度のことにすぎませんが、それは人間が自らの人間的な形態をそれらに非常に強く刻印することによります。そのとき私たちが目撃するのは霊媒からの幽体の流出現象です。

人間からの熱放射や光放射をつくり出すことによって霊媒が何か目に見えるもの、これらの元素存在たちが月存在の影響下で働きかけることができる幽体のようなものを現出させるのはそれほど容易なことではありません。まず、ある種の準備がなされなければなりません。

既にお話しましたように、自然科学は最近、暗い部屋の中である種の光放射や熱の発散を見えるようにすることができる技術を開発しました。この関連で、モーリッツ・ベネディクトの実験は最も輝かしいものです。けれども、それはいつの時代でもそうだったのです。つまり、今でもそうなのですが、黒魔術を通して物理世界を操作するだけでなく、香を焚いたり、特別な香料や調剤剤を使うことによって幻覚的な効果をつくり出すという準備段階を踏んだ人だけが熱や光の発散を有効に使うことができたのです。

これらの魔術的な儀式の目的は、人間からの熱や光の発散の中に本来存在するところの力を引き出す、ということです。エリファス・レヴィーや、パプスというペンネームを持つエンコースの著作の中には、このテーマに関するきわめて危険で疑問の多い説明が見られるのですが、これらのことさらにに関して、その客観的な側面や真の本性について語るべきであるならば、それらを無視して済ますことはできません。

これらすべてのことがらは地上的な要素の中に隠された精神的なものを利用するところの黒魔術へと直接導くものです。この精神的な要素とは何なのでしょう？ 皆さんは私の著書「神秘学概論」の中に、月がかつて地球と結びついていて、という記述を見いだされるでしょう。月に属する多くの力が地球上に残され、今や、鉱物、植物、そして動物の中に広がっています。これらの月の力は今でもそこにあるのです。ですから、私たちが、地球存在として、本来は鉱物、植物、動物、あるいは人間には属していない月の力を利用するとき、月存在たちから多くのことがらを私たちの世界にとっては見知らぬ方法で学んだ元素存在たちに出会う領域に踏み込むことになります。黒魔術師は、このようにして、まだ地上に存在している月の力を利用しているのです。けれども、彼は、このような仕方働くことによって、元素存在たちに接触することになります。そして、これらの元素存在たちは人間と月存在たちの間の正しく正当な関係を - 人がハルマヤチェスのゲームを見るように - いわば監視することによって、物理世界に限りなく接近し、それをのぞき込み、そしてそこに足を踏み入れることさえ学んでいるのです。しかし、通常の人間の場合、これらすべては無意識の中に留まり、これらの存在たちと接触を持つことはありません。ところが、月の力を使って仕事をし、彼らを試験管やるつぼの中に閉じこめる黒魔術師はこれらの元素存在たちの渦中に捕らえられることになります。

正直でまっとうな人間もこれらの黒魔術師たちから学ぶことができます。ファウストの第一部でゲーテが示したのは人間が渦巻く力の中心にいるという状況、危険な黒魔術の近くにいるという状況です。人間は、これらの力を利用することによって、月存在たちに奉仕する実在たちが容易に人間と関係を持つことができる領域に入って行くことになるのです。こうして、黒魔術の中心地は月の力とそれに直接奉仕するようになった精神存在たちとが悪事のために共に働くところに生じます。そして、ここ数世紀にわたって多くのこの種の活動が実践されてきたために、地上には危険な雰囲気がつくりだされています。危険な雰囲気は疑いもなくそこにあり、人間の活動と月の要素との統合、動的な月の力とよこしまな月の力に奉仕する元素存在たちとの統合から産み出される夥しい力が注入されています。ミカエルの時代に太陽の領域から進み出てくるのが定められているすべてのものに活発に反対しているのはこの領域なのです。そして、このことは特に魂と精神の領域における生命の発散との関連で考慮されなければなりません。

明日は、この観点からさらに探求を行う予定です。

- 1．人間からの発散 - 霊媒的な力
- 2．液体要素の皮膚発散 - 物質化
- 3．皮膚発散 - 幽体の示顕
- 4．熱放射
- 5．光放射
- 6．化学的な力の放射（黒魔術）
- 7．生命の放射

ミカエル - 太陽

ガブリエル - 月

ラファエル - 水星

(原注)一九二四年八月一八日付けのルドルフ・シュタイナーのノート(トーケイ、朝の講義)には、大天使の時代に関して次のような書き込みがある。

一八七九 - 一五一〇年	ガブリエル	月
一五一〇 - 一一九〇年	サマエル	火星
一一九〇 - 八五〇年	ラファエル	水星
八五〇 - 五〇〇	ザカリエル	木星
五〇〇 - 一五〇年	アナエル	金星
一五〇 - 二〇〇年	オリフィエル	土星

第八講

精神的な探求において陥る可能性のある過ち

既にお話しした意識レベルを発達させるとき、それぞれのレベルにおいてある特別な宇宙領域への扉が開かれます。人間が有する知覚の本性と適切な意識状態を発達させることによって到達することができる場所の様々な領域との関係を概略的に記述してみる、ということを提案したいと思います。これらの領域は実際にはお互いに重なり合っているのですが、隣接したものとしてしか描くことはできません（黒板に描かれる）。月と水星の領域がいかに私たち自身の領域に浸透しているかについては既に示されました。

死後数年以内の死者と関わりを持つことを可能にする場所の意識レベルを私たちが発達させると想像してみましょう。その世界は私たちの世界と境を接しています。



次の意識レベルは、死者が（カマロカにおいて）その地上生活を逆向きに辿った後に入るところの生活へと貫き至ることを可能にするものです。私はそれを空になった意識と呼びました。しかし、それは物理世界との関係では目覚めた意識です。私たちが次に参入するのはより広い領域であり、そこでは水星存在、すなわちラファエルの領域に特徴的な事象やできごとと密接な関わりを持つことになります。特に、人間本性に生来備わっている治癒力が意識されるようになります。

こうして私たちは、それぞれの意識状態によって固有の宇宙領域に参入し、その時々において、これらの領域に属する存在たちを知るようになるのです。もし、死後間もない人間が置かれる状態を知りたいならば、彼らが住む世界に参入するのに適した意識を発達させなければなりません。彼らの真の姿は彼らが属する世界においてのみ私たちに示されます。もし私たちが水星存在を観察したいのであれば、彼らの世界の意識に与らなければならないのです。ですから、これらの世界はある意味でそれぞれ切り離されており、当然それぞれの世界には固有の意識状態がある、と考えることができます。それは実際、私たちが正しく宇宙を理解するための必要条件なのです。何故なら、私たちはそのように考えることによって初めてこれらの存在たちをその真の性格において知る準備をすることができるからです。ここで、簡単な例によって、そのような認識 - ある特定の宇宙領域に適した意識状態を正しい仕方発達させようとする認識 - がどのような方向に導いていくのかを皆さんに示す、ということを提案したいと思います。

私たちの前に植物がその葉や花とともにあると考えてみましょう。私たちは既に、植物とは精神世界に存在する元型の地上における反射像である、ということを知りました。そして、私たちがこの元型の世界へと意識を上昇させ、植物世界の認識を獲得するとき、決定的に重要なことから、すなわち地上に見いだされる植物の種類は明確に区別されなければならない、ということが明らかになります。適切な精神的知覚力をもって、私たちがある特別な試料、例えばチコリを検証するとき、その外観は他の多くの植物とは異なっています。典型的な例として通常のスマレを取り上げ、それをペラドンナと比べてみましょう。今お話ししたような方法で植物の世界を探求しつつ、スマレが属する世界に参入するとき、つまり、空にな

った目覚めの意識に参入するとき、スマレはその全く無垢の姿で精神の目に映る、ということが分かりません。

他方、ベラドンナはその存在を別の世界から導き出します。私たちが、植物は物質体とエーテル体を有している、そして、その花と実は普遍的な宇宙の要素に取り囲まれている、ということを知覚するとき、私たちは通常の植物という存在を理解することになります。地球から芽生える植物の有機的な生命、その周囲のエーテル体、そして、一見雲に包まれたようなアストラル的な要素が至るところで見られます。スマレのような植物の性質とはそのようなものです。ベラドンナのような植物はそれとは異なって構成されています。その釣り鐘型の花の内部には実が形成されるのですが、アストラル的な要素はその実の中へと浸透していくのです。スマレが発達させる「さく」は単にエーテル的な要素の中にあります。ベラドンナは、その実がアストラル的な要素を同化しているため、毒を持っているのです。いずれかの部分が大宇宙のアストラル性を同化している植物はすべて毒を持っています。動物の中に入っていき、動物にアストラル体を付与し、それを感覚的な存在へと内的に形成する力は植物における有毒な要素の源泉でもあるのです。

これは非常に興味深いことです。私たちのアストラル体は植物によって同化されるとき、毒性を示す力の担い手になる、ということが分かります。毒についてはこのように考えなければなりません。私たちは人間のアストラル体が実際にあらゆる毒の力を含んでいるということに気づくときにだけ毒についての内的な理解を獲得することができるのですが、それはそれらの力が人間存在を構成するひとつの重要な部分になっているからです。

私がこの議論の中で、後になって精神的な探求における真実の道と偽りの道を区別するための助けとなるであろうようなはっきりとした観点を提示しようとしているのです。スマレとベラドンナの例から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか？ それぞれの植物世界に適した意識を発達させるならば、スマレはその本来の世界の内部に留まり、外の見知らぬ世界から何も引き寄せることのない存在である、ということが分かります。他方、ベラドンナの場合、見知らぬ世界から何かを自分に引きつけます。それは、植物の世界ではなく動物の世界の特権であるところの何かを同化しているのです。このことはすべての毒のある植物に当てはまります。彼らは、植物存在には属すべきではないもの、実際には動物界に属すものを同化しているのです。

さて、宇宙には様々な領域に属す多くの存在たちがいます。私たちが死者たちに出会い、彼らがそこを離れるまで10年、20年、あるいは30年にわたって付き添っていき、いける領域にも、人間に気づかれることなく私たちの物理世界に入り込んでいる多くの存在たち、疑いもなく現実的な存在たちが見いだされます。彼らはある特別な種類の元素存在として記述するのが最も良いでしょう。こうして、私たちは、死の門を通過して間もない死者たちの後を追っていき、あらゆる種類の形態を付与された元素存在たちが住む世界、彼らが現実にそこに属すところの世界へと入っていくことになります。私たちは、これらの存在たちはその世界に属している限り、その世界に適した力だけを実際使用すべきである、と言うかも知れません。さて、これらの元素存在の中には、その活動を彼ら自身の世界に限定せず、例えば、人間がものを書く様子を観察したり、人間が生まれてから死ぬまでにその世界の中で行うところのあらゆる活動を追跡するものたちがいます。私たちは私たちの活動の観察者であるそのような存在たちにいつも取り囲まれているのです。

さて、この観察者としての役割自体は害があるというものではありません。何故なら、今私がお話ししていることがらの背後にある全体計画の本質とは、人間が物理的な世界との関わりを通して獲得するところのあらゆるものが、私たちの世界と境を接するあらゆる世界、私たちが死後直ちに入っていく世界、私たちが死後何十年も経った死者たちと接触を持つ世界、つまり、これらすべての世界には欠けている、というようなものだからです。この死者の世界には、例えば、書くことや読むこと、私たちが知っているような飛行機、自動車、あるいは客車は存在しません。

私たちはこの地上で自動車を組み立て、読み書きをし、本を書きますが、このすべてに天使たちは参加していない、とは言えません。これらのすべてが宇宙一般にとって意義がないものである、とは言えないのです。今私が記述したような存在たちは私たち自身の世界と直接境を接する世界から「委嘱」を受けている、というのが実際のところであり、彼らは人間の活動を見守らなければならないのです。彼らは人間の本性に関心を持ち、未来の時代のために、その分野で彼らが学ぶものを保持する、という任務を別の世

界から負っているのです。

私たちは人間として、私たちのカルマや外的な文化によるカルマへの影響をひとつの人生から別の人生へと運んでいくことができます。私たちは自動車に関連した私たちの経験をひとつの地上生から別の地上生へと運んでいくこともできるのですが、自動車の組立そのものを運んでいくことはできません。地上の力だけに担われたものを、ある人生から別の人生へと運んでいくことは私たち自身にはできないのです。ですから、人類は文明を通して何らかのものの基礎を築いてきたのですが、それは、もし、別の存在たちが力を貸してくれなかったとすれば失われていたであろうようなものなのです。さて、私がお話ししてきた存在たちは、人間がひとつの地上生から別の地上生へと運んでいくことができないものを未来のために保持する、という任務のために「分遣隊」に分けられます。

これまで、これらの存在たちの多くにとって、その任務を成就するのは最も難しいことでしたから、太古の時代に見いだされたものの多くが再び人類から失われてきました。私が確立しようとしている顕著な点とは、私たちは、人間がひとつの地上生から別の地上生へと自分で伝えることができないようなもの、例えば文献中の抽象的な内容を宇宙的な計画にしたがって未来に運んで行くという使命を負った存在たちに取り囲まれている、ということです。人間と直接的な関係にある精神的な存在たちにはそれは不可能です。したがって、人間としての私たち自身にもそれは不可能なのです。これらの存在たちが彼らの手助けをするものとしてリストアップしなければならないのは、彼らとは長らく疎遠であった別の存在たち、すなわち人間と関わってきた精神的な存在たちとは全く異なる進化を経験してきたものたちです。これらの異なる進化を遂げた存在たちを、私は私の本の中でアーリマン的な存在たちと呼びました。彼らは異なる進化を経てきたにもかかわらず、ときとして、例えば、私たちが自動車を組み立てるとき、彼らが私たち自身の進化に関わりを持つことがあるのです。彼らは、彼らのアーリマン的な宇宙の力によって、自動車の組立のような現代技術を理解することができる存在であり、人間自身がひとつの受肉から次の受肉へと運んでいくことができないような文明の技術的な成果を未来の時代へと伝える存在なのです。

私たちが手に入れることができるこの情報によって、私たちは今、霊媒とは本当に何なのかを記述する地点に立ちます。もちろん、私たちは最も広い意味での霊媒と文字通りの意味における霊媒とを区別しなければなりません。「霊媒」という言葉を広い意味にとると、基本的には、私たちはすべて霊媒です。私たちは皆、誕生から死までの私たちの人生を生き通すために受肉する以前には、魂と精神からなる存在でした。私たちの精神的な本質が物質体に受肉するのです。物質体は精神が活動するための媒体となるものです。ですから、「霊媒」という言葉を最も広い意味にとると、あらゆる存在はある程度は霊媒である、と言うことができます。これは私たちが通常、「霊媒タイプ」という言葉に与える意味とは異なります。誕生と死の間の世界においては、霊媒的な人とは、脳のある部分を彼の全体的な存在性から切り離すというような仕方で発達させた人のことです。ですから、ときとして、これらの脳の部分、特に自我の活動を支える部分が、その基盤的な役割を果たさなくなることがあるのです。

私たちが自分に向かって「私は」と言うとき、つまり、私たちが十分に自我を意識しているとき、この意識は脳のある特定の部分に根ざしています。これらの脳の部分が霊媒によって切り離されると、私が先ほどお話ししたような段階にある実体が、人間の自我の代わりにそのような部分に滑り込みたい、という衝動を感じるようになります。そのとき、そのような霊媒は、文明の成果を未来に伝えることが本来の機能であるところのあの存在たちの乗り物になるのです。これらの実体たちは、たまたま自我が不在になった脳に取り憑くとき、この脳の中に自らを確立したいという圧倒的な欲求を感じます。そして、霊媒がトランス状態にあり、脳が切り離されるとき、アーリマン的な影響を被るこの種の実体、文明の成果を未来に伝えるのがその機能であるところのこの種の実体が脳の中に滑り込むのです。そのような霊媒は、一時的に、自我の担い手ではなく、宇宙における自らの義務を怠っている元素存在の乗り物になるのです。皆さんには、宇宙的な義務を怠る元素存在、という表現を全く文字通りに受け取っていただきたいと思えます。

そのような存在の義務は人間がどのようにして書くかを観察することです。人間は私がお話ししている脳の部分に根ざした力を用いて書くのですが、これらの存在たちは正常な仕事としての単なる観察の代わりに、切り離される可能性がある霊媒的な脳を絶えず探しているのです。そして、その中に滑り込み、書くという技術について彼らの観察が教えるところのものを同時代の世界に導入します。こうして、彼らは、霊媒の力を借りて、彼らの使命に従えば未来に伝えるべきものを現代に投影します。霊媒主義は、未来の

能力となるべきものが混乱し、ぼんやりした仕方です。既に現代において発達させられる、という事実に依拠しているのです。これが霊媒の予知能力の源泉であり、他の人々を魅了する元ともなっているものです。実際、その機能は今日の人間の機能よりもずっと完璧なものなのですが、それは既に述べたような仕方です。

ちょうどベラドンナがアストラル世界を媒介するように、つまり、その実に吸収したある種のアストラル的な力を媒介するものとして働くように、人間もまたその特別な脳のタイプを通して、ある未来の時点において私たちの文明に参加すべきこれらの元素存在のために、と申しますのも、人間にはある地上生から別の地上生へとすべてのものを運んでいくことは不可能だからですが、それを媒介するものとなるのです。これが霊媒現象 - ある種のクラスの存在たちによる憑依 - の秘密です。

さて、一方で、皆さんは、これらの存在を実際に創造したのはアーリマン的な存在たちである、と結論づけるかも知れません。アーリマン的な存在たちは宇宙にあって人間の知性を遙かに凌駕する知性を有しているのです。私たちは、私たちの世界と直接境を接する世界においてアーリマン的な存在たちに出会うとき - あるいは、洞察を達成することによって、物理的な世界においても彼らに出会うかも知れませんが - 、彼らの広大で卓越した知性に驚きます。彼らの知性は人類のそれを遙かに越えています。そして、私たちはいかに彼らが無限に知性的であるかに気づくとき、初めて彼らを尊敬するようになります。この知性のなにかが彼らの子孫、霊媒的な脳に滑り込む元素存在たちに伝えられることから、霊媒という手段で重要な情報が明らかにされるというようなことが起こり得るのです。私たちは多くの決定的に重要なことを、特に、霊媒たちが十分に発達した意識の中で伝えることに関して、学ぶことができるかも知れません。私たちが精神的な世界の本性と成り立ちを正しく理解するならば、霊媒が多くの権威ある情報を伝えることができる、ということをお断りすることはできません。私たちは彼らから多くの重要なことを学ぶ可能性があるのですが、それは精神的な認識に向かう正しい道ではありません。

このことは植物霊媒、つまり植物毒の元となるある種のアストラル的な力を媒介する植物の例からもお分かりと思います。このような状況がいかにして生じたのかに気づくことができるのは、正しく発達させられた意識を通してだけです。このことを次のような方法で記述してみたいと思います。と申しますのも、精神的な世界について議論するときには、抽象的な概念で語るよりも、明確で具体的な記述の方がよいからです。

死者たちが死後の生活を送る世界に超感覚的な認識をもって参入すると仮定してみましょう。私たちがそのようにして死者を追っていくとき、最初に入っていくのは私たち自身の世界とは全く異なる世界です。これについては既にある程度述べましたが、そのときに指摘したのは、その世界は私たちが誕生から死までの間を生きる世界よりも遙かに現実的な印象を与えるということでした。

私たちがこの世界に参入するとき、私たちは死者たちの魂とは別に、そこに見いだされる特筆すべき存在たちに驚かされます。最近亡くなった人々の魂が奇妙なそして悪魔的な形態をしたものに取り巻かれているのです。死者が入って行かなければならないこの隣接する世界、私たちがある種の超感覚的な視覚によって彼らを追っていくことのできるその世界の入り口で、私たちはアヒルか野鴨、あるいはその他の水性動物のように、水かきのついた巨大な足 - 地上的な基準に照らして巨大ということですが - 、絶えずその形を変える巨大な水かきのついた足を持つ悪魔のような姿をしたものに出会います。これらの存在たちはいくらかカンガルーのような形をしていますが、半分鳥のようでもあり、半分ほ乳類のようでもありません。私たちが死者に付き添って行くときには、そのような存在たちが住む広大な領域を通過していくことになるのです。

私たちがこれらの存在たちはどこに見いだされるのかと問いただすとすれば、まずそのような存在たちの在処、彼らの居場所についてはっきりとした考えを持っていなければなりません。彼らはいつも私たちの周りにいるのです、何故なら、私たちは死者と同じ世界に住んでいるからです。しかし、皆さんは彼らをこのホールの中に探すべきではありません。真性で正当な探求はこの地点から始まるのです。

秋のクロッカスがたくさん生えている牧場を歩いていると想像してみましょう。秋のクロッカスのただ中で、死者を追っていくことのできる意識状態を引き起こすように努めるならば、それが生えているところであればどこでも、ちょうど今述べたような存在、水かきのついた足と奇妙なカンガルーのような体を持った存在が見られるでしょう。秋のクロッカスのひとつひとつからそのような存在が現れて来るのです。

もし、さらに移動を続けて、ベラドンナが道ばたに生えている場所に行き、皆さんを今お話ししたよう

な意識状態に移行させるとすれば、皆さんは全く異なる存在、やはりこの世界に属する恐ろしい悪魔のような存在に出会うでしょう。ですから、秋のクロッカスとベラドンナは隣接する世界の存在たちが彼らの中に入ってくるのを許すところの霊媒、別の側面から見ると、実際に死者の世界に属する霊媒なのです。

このことを心に留めれば、別の世界は私たちの周囲の至るところにある、ということが分かります。この世界に意識的に参入するというのが、ただし、単に通常の意識をもって秋のクロッカスとベラドンナを知覚するのではなく、死者と関係を保つことができるより高次の意識をもって知覚する、ということが本質的なことなのです。

さて、ここに秋のクロッカスが生えている牧場があると考えてみましょう。ベラドンナの花をつける植物を見つけるためには、遠くまで旅をし、山岳地帯に登らなければならないかも知れません。物理世界の中では、ベラドンナと秋のクロッカスが一緒に見いだされることはありません。しかし、精神世界の中では、彼らのごく近くに見いだされます。空間が別のあり方をしているのです。物理世界においては、遠く離れて存在している物体同士が、精神世界においては、ごく近くに見いだされることがあります。精神世界はそれ自身の原初的な法則を有しており、そこでは、あらゆることが異なっているのです。

さて、これらの植物に死者の世界で出会うと想像してみましょう。私たちが初めて死者と連絡を取るとき、彼らの中には、これらの植物が私たちの中に引き起こすところの恐ろしい印象が引き起こされることは決してない、ということが分かります。彼ら、死者たちは、これらの悪魔的な存在たちは賢明な宇宙の計画にしたがってそこにいるのだ、ということを知っているのです。ですから、私たちが死者と連絡を取るとき、中間的な世界には、毒のある植物に対応する悪魔的な形態をしたものたちが多く住んでいるということが分かります。さらに進んで、死者が10年、20年、あるいは30年後にさらに高次の領域に入っていくために後にするところの領域に至るとき、私たちは毒のない植物に関連した形態を見いだします。ですから、植物界は物理世界におけるのと同様、それに隣接するより高次の世界においても重要な役割を果たしているのですが、後者の中では異なる形態を取っているのです。

その真の姿においては星の世界に属するところのものが、地上におけるその対応物として、ベラドンナ、秋のクロッカス、あるいはスミレのような形態を有しているのです。それは、その真の姿が既に述べたような仕方では反映されるところの死者の世界の中にもその対応物を有しています。ある世界の中に存在するところのあらゆるものは別の世界にも働きかけるのですが、私たちがこれらのことからを真に認識するためには、それらが実際に属する世界に意識的に参入して行かなければならないのです。

同じことはこれらの別の世界の存在たちにも当てはまります。私たちは、私たちの世界と直接境を接する世界に参入するときにはじめて、元素存在とは、つまりアーリマン的な力の子孫とは何なのかを知ることができます。さて、これらの存在たちは霊媒を通して現れます。彼らは霊媒に憑依し、それによって一時的に私たちの世界に入ってくるのです。もし、私たちが人間の霊媒を通してだけ彼らと接触するならば、私たちは彼らを、彼らにとって本当は見知らぬはずの世界において知るのであって、彼らをその真の姿においては知らないということになります。彼らが現れているのは彼らにとっては見知らぬはずの世界ですから、ただ霊媒による出現のみによってこれらの存在たちを知るようになる人たちが真実に至る可能性はほとんどありません。精神的な顕現が伝えられている、ということに疑いはありませんが、彼らが属しているのではない世界からそれらが流れ出してくる限り、それらを理解することは不可能なのです。霊媒的な意識に結びついたあらゆるものの中にみられる高度に幻惑的で当てにならない要素は、これらの存在たちと接触を持つ人たちが彼らの真の本性を理解していない、という事実によって説明することができます。

さて、彼らはこのようにして世界の中に入り込んでくるのですが、そのため、特別な運命がこれらの存在たちに用意されることとなります。私が述べた宇宙についての知識は私たちの知識の範囲を広げるのに役立ちます。私たちが死者の世界に参入し、秋のクロッカスや紫のジギタリス、棘リング等々の悪魔的な森を横切るとき、私たちはスミレが未来において変容を遂げ、全く異なる形態を取るであろう、ということに気づきます。彼らは宇宙の未来にとって、何らかの意義を有しているのです。秋のクロッカスは、正にその本性によって、それが運命づけられているところの死を準備します。毒のある植物は絶滅すべき植物、未来においては発達する可能性がなく、死滅しつつある植物なのです。彼らは未来においては別の毒のある植物に取って代わられるでしょう。今日、毒のある種類の植物は私たちの時代において既に死滅しつつあります。もちろん、ひとつの時代は長い間続きますが、これらの植物は彼らの内に死の種を宿しているのです。そして、それは植物界全体の運命になるでしょう。私たちがこの精神的な視界をもって植物

の世界を探索するとき、私たちは未来に向けたダイナミックな衝動をもって成長し、発達する力と、死につつあり、消滅することが運命づけられた世界を知覚するのです。

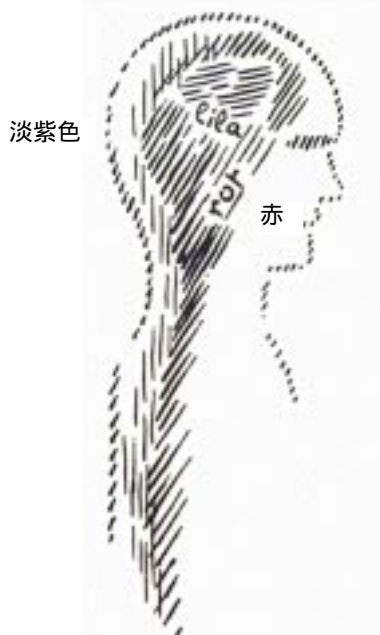
そして、これは霊媒に憑依する存在たちにとっても同様です。彼らは、現在を遙かな未来に向けて運んでいくことがその使命であるところの彼らの仲間から自らを引き離します。彼らは霊媒という代理を通して現在の世界に侵入し、そこで地球の運命に捕らえられ、彼らの未来の使命を犠牲にするのです。こうして彼らは人間からその未来の使命を大いに奪い取ります。これが霊媒主義の真の本性を私たちが理解するとき、私たちが目の当たりにするところのものです。と申しますのも、霊媒主義が示唆しているのは、現在だけを重要なものとするために、未来を消滅させる、ということだからです。ですから、私たちが真正な秘儀の関連性と宇宙の真の本性に対する洞察をもって心霊主義的なセッションに参加するとき、まず最初に驚かされるのは、心霊現象を見に集まった人々のサークル全体がまるで毒のある植物に取り囲まれているかのようなのであるのを見いだすときです。あらゆる心霊主義的なセッションは実際、毒のある植物の庭に取り囲まれているのですが、それらの植物はもはや死者の王国におけるのと同様の側面を見せるのではありません。心霊主義者のサークルの周りで成長し、そして、その実や花からは悪魔的な存在たちが現れるのが見られるのです。

超感覚的な視覚を持つ人が心霊主義的なセッションで経験するのはこのようなことです。彼は、大まかに言って、内部から活性化され、部分的に動物となった毒のある植物の一種の宇宙的な茂みを通過するのです。私たちが彼らを毒のある植物であると気づくのはただ彼らの形態からだけです。私たちがこのことから、この心霊主義的な形態の内部で働くあらゆるもの、本来ならば人間進化の過程を前進させ、未来において実を結ぶべきあらゆるものが、それらが属していない現在へと引きずり下ろされている、ということを知ることができるのです。それらは、現在にあっては、人間性に有害な働きを及ぼします。

心霊主義の内的な秘密とはこのようなものです。この秘密について、ここでもう少し学ぶことにしましょう。

さて、心霊主義のどの側面が人間の構成にとって主要な問題を提示するかを正確に示すことができます。この文脈の中では、私の説明は必然的にいくらか抽象的なものに見えるに違いありませんが、それは心霊主義の本性に関するなにがしかの理解に向けて、いくらか皆さんの助けになるでしょう。

さて、頭蓋の空洞中に横たわる人間の脳は平均で1500g、あるいはそれより少し重い程度の重量があります。これは本当にかかなりの重量です。もし、人間の脳がその基底部分にある繊細な血管をそれ自身の重量で押しつけるとすれば、それらは直ちに押しつぶされてしまうでしょう。ところが、私たちがどんなに長く生きたとしても、私たちの脳の重量がその下にある血管網を押しつぶすということは決してありません。このことは正しい説明によってすぐに理解できます。現在の構成を持つ人間を取り上げてみましょう。脊椎管は上方にのび、脳のところで終わります。ある部分を除いて、脊椎管は液体で満たされており、脳はこの液体中に浮かんでいます。



さて、アルキメデスの原理について考えてみましょう。皆さんは物理学の勉強でよくご存じですね。彼が風呂に入っているときにインスピレーションのひらめきで発見したと言われていています。彼は次のような実験をしました。彼が風呂に浸かっているときに、片方の足を水の上に上げ、続いて別の足を上げました。彼は彼の足が水の上にあるか水の中にあるかで重さが異なることに気づきました。水に浸かっているときには重さが失われたのです。アルキメデスのような人物にとっては、この経験はもっと広い意味を持っていました。彼は、物体が液体に完全に浸されているとき、見かけ上、押しのけられた水に相当する重量を失う、ということを見出したのです。

水を入れたビーカーを実験台の上に置き、バネばかりからひもでつるした物体をその水の中に下げていきます。その物体は、水中では、空中にあるときよりも軽くなります。物体が液体に浸されるとき、それは押しのけられた水の重量に等しい浮力を受ける、というのがアルキメデスの原理です。

この原理は人間にとって大変ありがたいものです、何故なら、脳は脊椎液の中に浮かんでおり、脳の見かけ上失われた重量は押しのけられた脊椎液の重量に等しいからです。こうして、私たちの脳は1500gの重量を有してはいません。それが見かけ上失った重量は押しのけられた脊椎液の重さ、つまり、1480gですから、アルキメデスの原理に従って、その実際上の重量はたったの約20gということになります。

私たちは、脳組織の中に、その実際の重量よりもはるかに軽い何かを有しているのです。私たちの脳は20gしかありませんが、私たちはこの20gを大切にしなければなりません、何故なら、それだけが私たちの「自我」を担うことができるものだからです。

さて、私たちの体全体には、液体の媒体中に浮かぶあらゆる種類の固体成分、例えば血球が含まれています。それらはすべてその重量の喪失を被り、その一部分だけが残ります。それらもまた「自我」を担っています。このように、「自我」は重力に左右されることのない血液の中に拡散しているのです。私たちは人生の過程の中で、私たちの中にある知覚可能な重量を有するあらゆるものを注意深く観察しなければなりません。私たちは、脳の重い部分に位置するところのもの、まだ文字通りの意味で重量を有しているものに対して、最も厳密な注意を払わなければならないのです。何故なら、他でもなくそこに「自我」が位置しているからです - そうでなければ、アストラル体やエーテル体等々が取って代わることになります。

霊媒とは、彼の構成体におけるこの固体である部分、20gの重量を有する脳がもはや「自我」を包含しない人のことです。「自我」は放逐されても、これらの部分はまだ重量を保持しており、元素存在たちが直ちに入り込むことが可能になっているのです。

唯物的な思考様式はあらゆるものを位置決めしようとしますから、元素存在が霊媒に憑依するとき、人間のどの部分に入るのかを知りたいがります。これは機械的、数学的に考える唯物的な心が語る言葉です。ところが、生命は機械的、数学的にではなく、ダイナミックに進行するものです。ですから、私たちは、その霊媒が純粋に数学的、幾何学的に位置決めすることができるあれこれの場所において取り憑かれている、と言うべきではありません。霊媒が取り憑かれているのは彼の構成体において重量あるいは重さを有している部分、つまり地球に引きつけられている部分である、と言わなければなりません。とはいえ、アーリマン的な存在たちはそのようなところ入っていくことができるだけでなく、別のところにも入っていくことができます。皆さんにお示したこの記述はものごとの最も粗雑な側面を示したに過ぎません。もっと繊細な側面についても議論する必要があるのです。



さて、目は私たちが外の世界を見るための器官です。目の中に配置された視覚神経は脳に結びついており、色を感じ取るための基盤を与えています。唯物主義者は視覚神経がどのようにして色の感覚を脳に伝え、そこでそれを解き放つかを説明しようとし、彼はそのプロセス全体を船の荷役あるいは鉄道輸送と比較します。何かが視覚神経に外から「積み込まれ」、神経によって輸送され、それがどこそこの場所を下ろされて魂の中に入っていき、と。もちろん、その説明はこれほど粗雑なものではありませんが、結局はそういうことになります。本当の説明はこれとは全く違うのです。

視覚神経の機能は色の感覚を脳へと運び込むことではなく、ある地点でそれを切り離すことなのです。色は周辺部においてのみ存在しています。視覚神経の機能とは、色の感覚が脳に近づけば近づくほどそれを絶縁し、そのため、脳には実際、色の感覚がなく、ただ弱く、かすかな色だけが脳に達するようにする、ということです。そして、色の感覚だけが絶縁されるのではなく、外的な世界とのあらゆる種類の関係もまた絶縁されます。聞くことと見ることは感覚器官に関連しています。脳の近傍においては、視覚神経と聴覚神経、そして熱を感じ取る神経が、周辺に位置するあらゆるものを弱い印象へと減退させているのです。この感覚についての関係は、1500gに対する20gの関係と同じです。と申しますのも、20gは脳の重さのかすかな印象を与えているに過ぎないからです。これだけが私たちに残されたもののすべてです。私たちが感覚を通して夜明けのすばらしい光景を取り込むとき、後脳はそのかすかな影、ぼんやりとした印象だけを捕らえます。私たちはそのぼんやりとした影に注意を払わなければなりません、何故なら、私たちの「自我」が入ることができるのはそこだけだからです。

「自我」が隔離され、霊媒的な力が現れる瞬間、元素存在たちがこのかすかな影、聴覚から進み出てくるわずかな音の中に入り込みます。この存在は外的な感覚知覚が忘れ去られ、「自我」がいなくなった場所に滑り込み、霊媒に取り憑くのです。次にそれは神経網、すなわち意思の形成を司るところの神経という意志の器官に入り込みます。その結果、霊媒は活発に反応し始めるのですが、それは「自我」の支配下にあるべきものが元素存在たちに取って代わられたからです。あらゆるかすかで影のような要素、脳の残存重量、色や音の感覚の名残はファントムのように私たちを捕らえます、何故なら、この20gの重さはファントムであり、私たちの内的な存在を貫いて入ってくる色のかすかな影はファントムのようなものだからです。元素存在たちがこのファントムの中に入り込み、霊媒が深い昏睡状態になることによって、彼の体が全く受動的になるとともに、本当は「自我」によって浸透されるべき - 通常は「自我」が間借りするはずの - かすかでファントムのような影の中に存在するところのあらゆるものが今や彼の中で活動するようになるのです。

人間が霊媒になることができるのは、普通の人間にとって役に立つ能力が昏睡や完全な不活性によって阻止されるとともに、今述べたファントムが活性化されるときだけです。このことは、例えば、霊媒がものを書くときの仕方でも観察することができます。もちろん霊媒は、脳の場合のように、彼の内のあらゆるものがより軽くなっていなければ書くことはできないでしょう。と申しますのも、元素存在が書く領域とは、重量を有するあらゆるものが液体の媒体中に浮かび、軽さの感覚やその感じを与え、そのため重力に左右されない領域、通常は「自我」がペンを操るはずの領域だからです。そのとき、霊媒の中で、この人間ファントムの中で、ペンの支配権を握っているのは元素存在なのです。

すべての霊媒現象において別の世界の侵入が見られる、という事実は否定できません。別の世界のアーリマン的な存在たちは、ちょうど霊媒によって遂行される動きの中に入り込むことができるように、昨日お話しした放射の中にも入り込むことができます。人間有機体の、特に腺組織の領域には強力な液体放射が存在しています。これらの元素存在たちは液体放射の中だけではなく、呼吸放射や光放射の中にも貫き入ることができます。化学放射の場合だけは、これらの化学放射を利用する人とその中に入ってくる存在たちとの間に意識的な交流があります。ここから始まるのが黒魔術、私がお話ししたような仕方に入り込んでくるこれらの存在たちとの意識的な共同作業です。

霊媒や霊媒を使って実験する人たちは実際にどのようなプロセスが起こっているのかに気づいていません。ところが、黒魔術師は、これらの元素存在たちを、彼自身の目的のために、人間の、特に彼自身の化学放射の中に誘い込んでいるのだ、ということを十分に意識しています。ですから、黒魔術師はこれらの元素存在たちからなる無数の僕に絶えず取り囲まれ、彼らが秘密の化学衝動を現象世界において用いることを、彼自身の放射を通して、あるいは実験室で香木を焚くことによって可能にしているのです。こうして、私たちは、ちょうどベラドンナが見知らぬ世界に踏み込むことによって、毒を持つようになる

のと同様、精神世界が、霊媒を通して、私たちが誕生から死までの間に住むところの世界に踏み込んでくる、ということ学びます。そして、基本的には、人間の意識、つまり彼の十全なる自我意識が抑圧されるとき、麻酔や昏睡状態にあるとき、あるいは実際に気絶しているときにはいつでもその危険が存在しているのです。眠りによってではなく、何か別の要因によって人間の意識が抑制されるときには絶えず元素存在たちの世界に曝される危険が存在しています。次の講義では、このことが人間の生活においていかに重要な役割を果たしているかを見ていくことにしましょう。

第九講

精神的な世界への異常な道とその変容

私たちはこの連続講義を通常の夢の生活への探求から始めて、私たちが誕生から死までの間に住むところの世界とは異なる世界に参入することを可能にするさらなる意識状態についての考察へと進んできました。最後に、私たちは霊媒的な意識、人間が夢遊病の状態を経験するところの意識、何故なら、霊媒状態とはいつでもこの性格を有するものだからですが、そのような状態について議論しました。

さて、これら両方の経験は、通常の生活においても、その真の姿において見いだされるような魂の状態です。それらが真の道、あるいは偽りの道へと分かれていくのは、それらが強められたときだけです。

今日は、私たちの夢の生活をもう一度検証してみましょう。私たちは、人間が通常の意識において、覚醒状態から眠りの状態に移行するときには、夢に曝されるということ、彼のアストラル体は眠りの状態にある間、エーテル体や肉体の中にあるときの彼の経験についての残響を記録している、ということを見してきました。混乱し、本当に途方もない夢の経験がそれに続くのですが、それを正しく説明できるのは秘儀に参入した人だけです、何故なら、精神世界の本性により深く貫き至ることのない人は、これらの通常は混乱した経験にただ当惑するだけだからです。

けれども、私たちはまた、瞑想や集中の訓練を通して、いかに夢の生活の横系がより高次の意識の縦系に織りなされることができるかを見てきました。ですから、私たちは驚くほど混乱した夢の世界に移された人間を目の当たりにするのですが、彼は、彼にとって通常の生活と同じくらい現実的な夢の生活の中にあって、完全な意識を保持しています。そして、彼が死者をその死後の存在において追っていくことができる別の世界への洞察を獲得するとき、彼は私たちの世界に比べて遙かに大きな現実性を有する世界に包まれていると感じるのです。さて、問題は、彼が今や接触する世界の真の本性とは何か？ということなのです。これについては既にお話ししましたが、今日は別の角度からこの問題に触れてみたいと思います。

かつて地球には、肉体ではなく、繊細なエーテル体に住み、したがって地球を包むエーテルの中に受肉することができた偉大な教師たちが生きていた、ということをお話ししましたが、彼らはインスピレーションを通して人間を指導し、地球上における古代の文化の基礎を築きました。適切な意識状態によってこれらの太古の時代を振り返るならば、これらの教師たちが人類と生活をともにしていた、ということが分かります。その後、彼らは月の領域へと退き、今日ではその領域から、今まで一度も地上に生きたことのないあらゆる種類の存在たちを彼らの目的に仕えさせているだけです。彼らはこの元素存在たちのただ中に生き、死の門を通過した人間たちに自分のカルマにどのように対処すべきかを教えながら働きかけています。私たちが最初に精神世界に入るときに関わってくるのがこれらの存在たちなのです。ちょうどこの地上の生活においては、社会や社会関係を無視できないように、より高次の認識を達成するためには、これらの別の存在たちと共に働かなければなりません。私たちは、太古の時代に地上の人間の教師であったこれらの月存在と彼らに従える存在たちの助けを得て私たちの世界に直接境を接するところの精神世界を探求するのです。私たちはそこで地球の以前の時代と人間の以前の受肉への鍵を見いだします。そのとき私たちはかつて地上に生きていた人物たちを、彼らが私たちとカルマ的な関連を有していたかいなかったかに関わらず見いだすこととなります。私はこのことを示すために、私たちがこのレベルの意識をさらに発達させることによって、いかにプルネター・ラティーニ、ダンテ、アラヌス・アブ・インスリスやその他の今日ではもはや地上には受肉していない存在たちと次第に接触するようになるかについて指摘しました。

ですから、この意識状態は夢の状態が照らし出されたもの、半透明に光るものなのです。通常の生活において、夢は単にいわば基礎的なはじまりを示しているに過ぎません。さて、秘儀に参入した人と通常の意識レベルで生きている人との違いを示すのは非常に簡単です。

通常の眠りの状態の下では、人間の肉体とエーテル体が後に残される一方、彼のアストラル体と自我は体の外にあります。夢の状態における経験では、自我だけが本領を発揮します。夢の中で経験されるできごとがまだ肉体とエーテル体の外にあるアストラル体に属しているということは確かですが、通常の意識という意味では、自我だけが夢を経験することができるのです。

ところが、秘儀に参入した人は、彼の自我と、特に彼のアストラル体によって経験します。ですから、

秘儀に参入した人と普通に夢を見る人との違いは、後者が肉体とエーテル体の外にあるときには彼の自我だけで経験するのに対して、秘儀に参入した人は彼のアストラル体によっても経験するという事です。

さて、この知覚様式は特に古代の秘儀において超感覚的な世界を探求するという目的のために高度に発達させられ、退廃した形においてですが、中世とその後の時代全体を通してさらに発達させられました。それは近代においては実質的に消滅しているとはいえ、通常の夢の生活の中でいかに全く意識的な状態に留まるかということについて、太古の秘儀の教師たちから精神的な方法によって、あるいは伝統を通して教えを受けてきた人々があちこちに存在していたのです。そのような人々はいつの時代でもこれらの世界に貫き至ることができましたが、その試みは危険に満ちたものでした。イマジネーション的な認識を有する秘儀参入者が通常の夢の世界に浸るとき、直ちに物理世界とのつながりを失うとともに、意識を失い、無の中に沈み込むような感じを持ちます。まるでしっかりした地面が彼の足下で崩れ落ちるかのよう、もはや重力に引きつけられていないかのように感じるのです。彼は内的な解放の感情、宇宙の海の中に吹き飛ばされるかのような、もはやしっかりとアンカー留めされていないために自分に対するコントロールを容易に失ってしまうかのような感じを経験します。

私の本「より高次の世界の認識」の中で述べられている精神的な訓練の目的はこの危険を回避するという事です。正しい仕方での瞑想に取りかかる人であれば誰でも、魂の「翼」を発達させることができるということ、今や重力を克服して翼を広げることができるということが分かるでしょう。秘儀参入者が足下の物理的、エーテル的な大地を失うにもかかわらずアストラル体と自我の「翼」を発達させていない場合には、危険な状況が生じます。図式的に表現していますが、皆さんにはこの意味がお分かりと思います。危険は十分に現実的なものなのです。これらの訓練の結果として私たちが参入する世界のために怠りなく準備するならば、あらゆる危険の可能性は排除されます。私たちは、ちょうど肉体とエーテル体を通して物理世界に与るように、これらの世界に徐々に参加することができるようになるのです。

これは多かれ少なかれずっと以前の人間の状態なのですが、今日では、私たちはこの状態を精神的な訓練を実行することによって達成しなければなりません。太古の人間の成り立ちとは、私たちの目覚めの意識とは対照的に、私が記述したようなカルディア人たちの間で見られた精神的な視界、つまり、私たちの夢の意識と同じようなものではなく、ひとつのイマジネーション的な知覚形態であるところの状態に自然に恵まれている、というようなものだったのです。他の人間に出会ったとき、彼はその物理的な輪郭を知覚しただけではなく、彼を取り巻くオーラについての夢のような印象を持ちました。それは本物のオーラであって、単に主観的な幻想ではありませんでした。肉体のオーラを知覚するというこの才能に加えて、彼は別の能力 - と申しますのも、それらはお互いに関連しているからですが - 、肉体に受肉していない精神的な存在のオーラを知覚することを可能にする能力をも有していました。ですから、彼は精神的な存在の姿を夢見たのです。

それらの違いに注意して下さい。つまり、太古の時代において、人間が肉体に対応するものを見るときには、そのまわりのオーラを本当の夢の中でイマジネーション的に知覚しました。精神的な存在、天使や元素存在に出会うときには、最初からそのオーラについての精神的な知覚を有しており、その存在が有するところの形態を「夢見た」のです。

最も初期の画家たちはこのようにして描いたのですが、今日、私たちはそれに気づいていません。これらの画家たちは精神的な存在を見て、それに対応する形態を「夢見た」のです。天使のヒエラルキアに属する存在はほとんど人間に似た形で、大天使については、体は明確ではありませんがはっきりと規定された翼と頭を有しているものとして、アルカイは翼の生えた頭をだけを有しているものとして描かれました。彼らがそうしたのはその形を「夢見た」からです。太古の人々にとってこれらの洞察はちょうど今日、私たちが他の人の姿を自然なものとして見るのと同じように自然なものだったのです。人間は、徐々に失ってきたその超感覚的な能力を精神的な訓練によって再び獲得しなければなりません。しかし、太古の人間にとって超感覚的な能力は自然なものであり、精神的な訓練によって再び獲得するのは比較的容易であったことから、その課題は何年にもわたって精力的に探求されてきました。月の領域への探求やそこでの死者たちとの出会い、そして、世界がその領域からどのように見えるかについて多くの語るべきものを持つとともに、真の探求者であるところの太古の秘儀参入者や月存在たちに支配される世界への活発な興味がいつも存在していたのです。

コペルニクスはその太陽中心説を地上的な意識による観点だけから打ち立てました。古いプトレマイオ

スのシステムは間違っているのではなく、月の領域に関する意識の観点から見ると正しいのです。さて、これらの探求者、すなわち月領域の秘儀参加者に特徴的なのは、彼らの活動がその領域に限られている、ということです。

ここにおられる皆さんは現在の人智学協会が以前は神智学協会の一部であったということをよくご存じです。神智学協会は、最近になって設立された多くの同種の協会と同じく、豊富な文献を収集していますが、皆さんがこの文献を参照するならば - それが良いか間違っているかはさしあたり重要ではありません -、今お話ししている世界、月の領域、すなわち、私たちが月存在との関係で探求するところの世界についての記述がある、ということが分かるでしょう。私に神智学協会ではどうかという提案があったとき、それは私にとって重要な意味を持っていたのですが、最初はある困難に直面しました。それは、神智学協会においては、研究や文献がこの月の領域のみに限定されている、ということが分かったからです。この素材は確かに多くの間違いを含んでいたのですが、H・P・ブラバツキーの著作にはユニークで非常に重要なことがらが特に多く含まれていました。しかし、H・P・ブラバツキーの著作の中に見いだされるあらゆることからは、彼女の月領域との交流、そして、犠牲行為としてこの月領域に留まることを自ら選んだ秘儀参加者と彼女との関係で決定されているのです。

私はこれらの秘儀参加者の多くを知るようになりましたが、私が皆さんに保証できるのは、そのような月領域に貫き至る精神が、さらに発達したいという人間の望みにいかに無関心であるか、ということです。

私は、1906年から1909年にかけて書いた「神秘学概論」の中で、地球を、月、太陽そして土星という以前の受肉状態において記述しましたが、私の記述は月の受肉状態で終わることなく、遠く土星の受肉状態にまで遡って地球を記述しました。一方、これらのことがらについて語ったすべての秘儀参加者は彼らの説明を月と太陽の間で完結させ、実際には、ただ月領域にまで地球の受肉を辿っただけでした。さらに以前の地球の受肉にまで遡るべきである、という趣旨のいかなる示唆も無関心か、ときにはいらだちの感覚をもってさえ迎えられました。彼らは、そこへの道は越えることのできない障壁によってブロックされているため、それは不可能である、と断言しました。その理由を理解することは当然ながら最も重要なことであり、無関心ではいられません。さらに親密になってまもなく明らかになったのは、これらの秘儀参加者たちは現代の科学的な観点に対して敵意や反感を持っている、ということです。これらの秘儀参加者たちは、ダーウィンやヘッケル、そして彼らの追従者たちの考えを紹介されると、非常に憤慨し、それらを子供じみてばかげたものと見なし、それらと関わりを持つのを拒否しました。最初、ゲーテの考えにはそれほど反感を示しませんでした。結局は彼も現代の科学者の言葉で語っているとして、すべてが退けられたのです。

要するに、そのような考えはその秘儀参加者たちにはアピールしなかったのです。私が太陽や土星の領域に貫き至ることができるということを初めて理解したのは1906年から1909年にかけて現代科学の考えに没頭し、それにイメージーションを吹き込もうとしていたときです。私はこれらの科学的な概念をヘッケルやハクスレーのやり方に基づいて認識の手段として用いたのではなく、現代科学の観点がまだ存在せず、したがって、単に夢の世界にイメージーションを吹き込むことによるのみより高次の意識を達成することができた時代に秘儀参加者たちがぶつかっていた限界を克服するための内的な動機づけとして用いたのです。私の著書「神秘学」の中で、私は通常は外的な世界にのみ関連しているハクスレーやその他の人々の完全に意識的な科学的観点に内的な意味を浸透させるとともに、それをイメージーションの世界に吹き込もうとしました。土星、太陽、そして月というこの連なりの全体を理解し、古い秘儀参加者の認識を地上で探求することが可能になったのはそのときです。

私は、これらのことがらがどのようにして生じたのかを皆さんに理解していただくためにこの認識への道を記述しているのです。皆さんは、それは個人的な説明である、と言うかも知れません。けれども、この場合、個人的な要素は、実際には、完全に客観的なものなのです。私の本「神秘学」に対して向けられた批判は、それが数学の教科書のように書かれており、私が議論してきた発達の道全体が数学的な公平無私の態度で記述されている、ということでした。けれども、この道は正確に私が記述した通りのものであり、コペルニクスとガリレオの時代以来存在し、ゲーテによって豊かなものにされた思考の様式性が、通常はイメージーションの中に存在するのと同じ魂のあり方に結びついている、という状況の中にその起源がありました。私が秘儀参加者たちにはいつでも近づくことが可能であった領域をその土星における起源にまで遡って辿ることができたのはこのようにしてだったのです。

この例からお分かりになるとと思いますが、これらのことからには、漠としたでたらめなやり方ではなく、はっきりと意識した思慮深さをもって近づき、容易に無思慮が取って代わるところで注意を喚起する、ということが重要なのです。自我だけと接触を持つというのが夢の生活における通常の状態ですが、アストラル体とも接触する場合があるというのがその例です。

私が「神秘学」の中で提供した情報は現代の自然科学とどこが違うのか？という質問に対する私の答は、現代の科学者は自我にアピールすることができるだけであり、自我を手放すやいなや夢を見始めるのに対して、私は自然科学の概念を夢の生活の中に持ち込むことができ、私が記述すべき世界にアストラル体を差し向けることができる、という点で異なる、というものです。

これは皆さんに正確にお話することができる道なのであり、いかに真の道が偽りの道と異なっているかを恐らくより正確に示すのに役立つひとつの例となるでしょう。

この夢の状態の正反対が夢遊病や霊媒の状態です。夢を見ている人は完全に彼の自我とアストラル体の中に生きています。彼は、アストラル体の中では意識的な知覚を有していませんが、肉体とエーテル体の外にいるときにも、完全に自我とアストラル体の中に生きています。彼は彼自身の存在の中に突き落とされ、その中に浸されるのですが、そのとき、その存在は別の世界と関係づけられています。このように、夢を見ている人はいわば彼自身の存在の中に、したがって宇宙の中に、そして、ある程度は彼の肉体組織の中にも沈み込んでいるのです。

その正反対が霊媒と夢遊病者の場合です。人間が霊媒や夢遊病の状態になるのは、その自我とアストラル体が肉体とエーテル体の外にあるときだけですが、この場合、既に指摘したように、彼の自我とアストラル体は見知らぬ存在に乗っ取られているのです。

ですから、霊媒や夢遊病者は物理的な体を有していますが、その自我とアストラル体は肉体とエーテル体の外にあり、別の存在に取り込まれて抑圧されているのです。そのため、霊媒は正しい仕方では肉体とエーテル体に影響を及ぼすことができませんが、私たちは、例えば夢のない眠りの状態にあるときでさえ、肉体とエーテル体に影響を行使しています。私たちは、起きているときには内側から肉体とエーテル体に浸透し、眠っているときにはそれらへの侵略を外側から防いでいるのです。

このことはもはや夢遊病者には当てはまりません。霊媒や夢遊病者は、その肉体やエーテル体をコントロールすることができず、いわば遺棄された領地のようになっているのです。

私たちの時代においては普通であるような魂のあり方をしている人の場合、その肉体とエーテル体に影響を及ぼすのは植物や鉱物の力だけです。もし、鉱物の力すなわち鉱物地球の力が私たちの肉体に影響を与えなかったとすれば、これらの力に依存する私たちが歩いたり動き回ったりすることは不可能だったでしょう。鉱物世界の力に与ることは許されます。つまり、その状態は正常なのですが、それらの力はエーテル体の中に入り込むべきではないのです。

同じことは植物にも当てはまります。あまり強すぎなければ、植物の力がエーテル体に働きかけることはある程度許容されます。しかし、動物の感覚を刺激するところの力や別の人間の力が人間の体、特にエーテル体に影響を及ぼすことはもはや許されません。動物や地上的な人間の力が霊媒あるいは夢遊病者の肉体やエーテル体に働きかけるのは、それらが放棄されるときです。その肉体やエーテル体はまわりの影響を受けるようになります。ちょうど思考が夢から環境中に移行するように、この場合には意志が人間から引き離され、環境と融合するのです。霊媒や夢遊病者に指示して立たせたり歩かせることができます。ジャガイモを差し出して、それがおいしい梨であるとかその他のものであると示唆することができるのです。私たちが霊媒や夢遊病者に指示をだすときには、人間としての私たちがその肉体と直接的な関係を持ち、したがってそのエーテル体と直接的な関係を持つことになります。霊媒や夢遊病者は、普通の人間の場合もそうであるように、肉体にのみ反映されるべき物理的な環境を彼らのエーテル体の中に有しています。ですから、普通の人間は、夢に似た状態の中で、彼自身を彼の内の精神的な世界にゆずり渡すのですが、霊媒は外的な自然の世界にゆずり渡すのです。

さて、霊媒や夢遊病の現象は、その状態自体が正常なものである限り、正常な状態です。何故なら、動き回ったり、ものを掴むことができる能力、いかなる種類のものであれ外的な活動を遂行することができる能力とは、誰の場合にも、魔法や夢遊病のようにして達成されるものだからです。けれども、この活動は肉体にのみ限定されるべきであり、エーテル体にまで及ぶことがあってはなりません。もしそうでなければ、正常な状態から異常な状態に移行することになります。

ですから、夢を見ている人は完全に彼自身の内に生きており、霊媒や夢遊病者はその外にいるのです。彼らの肉体とエーテル体はいくらか自動人形と同じ仕方で機能し、私たちはそれらに働きかけることができますのですが、それは彼自身の自我やアストラル体がそれらをコントロールし損なうからです。その結果、ちょうど夢を見ている人の場合に内なる精神的な世界が創造されるように、霊媒や夢遊病者の場合には外なる自然の世界、形態の世界とその起源、すべての知覚可能なもの、時空に関係するあらゆるものとの合一が生じるのです。

私たちが夢の世界に沈むとき、私たちは形態のない状態、絶えざる変容の状態の中に浸されます。私たちが肉体とエーテル体をもって夢遊病者や霊媒が何らかの指示の下でその意志を行使する世界に貫き至るとき、そこではあらゆるものが明確に規定されているのが分かります。つまり、外からの影響の結果として生じるあらゆるものが非常な正確さをもって遂行されるのです。

これは正に通常の夢の世界に対する反定律の世界です。つまり、それは、夢遊病者においては、夢の活動であり、外的なものとなった自然な行為なのです。行為の中で見られる夢、夢に似た状態の中での行為、単に内的な経験に留まらない夢です。

秘儀に参入する立場から見ると、この反定律は最も興味深く、意義深いものです。秘儀参入者が夢の世界をイマジネーションによって満たそうとしてそれに沈潜するとき、彼はある困難に出会います。このことは既にお話ししましたが、彼は、もはや重力の影響下にはない、自分の足下にはもはやしっかりとした地面はない、と感じるのです。夢遊病者は無意識的にそこに入り込みますが、秘儀参入者がこの世界に入るときにはそれに意識的に近づかなければなりません。彼はいつでも意識を失うかも知れないと感じ、絶えずこの可能性に直面するのですが、完全な意識を保持するために、自分自身をしっかりと支えていなければなりません。もし、私たちが秘儀参入者としてこの世界にもっと深く貫き至るとすれば、見たり知覚したりできる世界の通常の存在たちと同じように、そこでも分別をもってかつ知的に前進していかなければならないのです。秘儀参入者は、通常の人生を生きるのと同様、精神的な世界においても完全に意識的な生活を送るという事実には背くべきではありません。と申しますのも、もし、ほんの一瞬でも物理世界から離れたと想像するようなことがあれば、もったいぶった態度を取り始め、仲間の人間からむしろ変なやつだと思われるであろうからです。そして、彼らは、こいつはとうとう気が狂ったと言うでしょう！ ちょうど感覚の世界が周囲のいたるところに存在するように、いたるところの存在する精神的な世界を通過するとき、完全な意識を保つために、自分自身をしっかりと支え続けることをしなければ、このようなことが起こり得るのです。

ここにおいて、神智学協会によってではなく、大物自然科学者たちによって取り扱われたきた世界、すなわち心霊的な探求の領域が開かれます。これらの探求は科学的なバックグラウンドや限定された潜在能力を持つ人たちによって遂行されましたが、彼らは精神的な世界の本性を確かめるために統計的な手段と霊媒による実験を用いました。人間の魂が別の存在によって保有されている間、通常の意識状態においてではなく、完全な無意識状態あるいは減退した意識状態で手足を動かしたり、反応したりするとき、何が起きているのかについて客観的に探求しようとする試みがあらゆる種類の団体で様々な観点からなされています。こうしてそのような方法で意識が減退させられた人々の反応が記録されてきたのです。

この種の探求に熱心な人が私に勧めたのは、内的な世界の現象を客観的に探求してもらうために、私と私の探求の成果を彼らの実験のために提供すべきである、ということでした。これは、誰かがやってきておおよそ次のように言うのと似た状況です。私は数学のことは分からないので、数学者の言うことが本当かどうかを確かめるため、彼を実験室に連れていこう。彼が偉大な数学者かどうかを示す実験をやってみるのが一番だ、と。私がここでお話をしているのは、人間の内面に貫き至ろうとする真の試みについてではなく、単に科学的な方法を漫画的にしたものによって、外側から夢遊病者や霊媒を探求しようとする現代的な試みがなされている分野についてです。と申しますのも、もし、人々が本当に人間の内面に貫き至るならば、霊媒や夢遊病の現象の中に見られるのは外的な乗り物、肉体とエーテル体からなる自動人形であるということ、つまり、彼らが探求しているのは精神的な現実についてではなく、彼らが探求しようとしているものが置き去りにした外的な乗り物である、ということに気づくはずだからです。彼らは精神世界のより精妙な側面をのぞき見ようとはしません。彼らはしばしば内的な経験を通してだけでなく、見たり知覚したりすることができる形においても精神的なものを感じ取ろうとするのです。

このアプローチは、私が既にこの道についてお話ししていた正にそのときに起こったように、ときとし

て別の形を取ります。彼らは肉体の中にあるキリストの精神的な姿を求め、精神的なものの直接的な顕現を外的な世界の中に見いだすことを欲していたのです。

私たちは物理世界をそのようなものとして認め、精神的なものをそれが本当に存在するところに - もちろん、物理的な世界にですが、本質的には、物理世界に浸透した精神的な領域の中に求めなければなりません。

ここにはさらに別の領域があります。健全な状態にある人は、内的な経験の領域と外的な知覚、混乱した夢の世界と霊媒や夢遊病者の異常な世界との間にあるギャップに橋を架けなければならない、という感じを持ちますが、芸術はこれらふたつの世界の統合によって、そして、それらがお互いを実り多いものにすることによって生まれました。つまり、芸術においては、外的な形態が精神によって浸透され、精神的な内容が外的な形態をまとっているのです。

神智学協会が普通の人間を精神的な実存であると言い立てるのに忙しくしている間、私たちは人智学協会において、秘教的な流れを「芸術」に向けてるように駆り立てられました。神秘劇とオイリュトミーが生まれ、言語造形の芸術が発達させられました。これらは人智学協会において発達させられた他のものと同様、精神的なものと物理的なものとのギャップに橋を架け、混乱した夢の世界と霊媒や夢遊病者の混乱した世界とを意識によって結びつけようとする衝動が実りをもたらしたものでした。これらふたつの世界は芸術において意識的に融合させられるのです。

いつかはこのことが理解されるでしょう。マリー・シュタイナー婦人が実践しているような言語造形がかつて人間がまだ本能的に精神的であった時代に享受していたようなレベルを回復するとき、人々は私たちの努力の目的を理解するでしょう。当時の人々にとっては、空虚で抽象的な言い回しよりも言葉のリズムと韻の方がもっと重要だったのです。これらのことを再び生き返らせなければなりません。そして、オイリュトミーが再び私たちのために回復するのは私たちの前で動きを通して展開する人間、魂と精神からなる存在である真の人間です。私たちがオイリュトミーから学ぶことができるのはこのようなことなのです。

ですから、私たちはまず最初に芸術の中で、夢を見る人が目的もなくさまよう世界から霊媒や夢遊病者がつまづきながら盲目的に歩き回る世界への橋を架けなければならなかったのです。今日の唯物的な時代にあっては、夢を見る人は孤独な省察の中に取り残され、精神的なものを表現し、明らかにするところの実質的な形態や構成について何も知ることがありません。そして、夢遊病者たちは霊媒としての名声を享受しているかどうかや、共産主義者たちのように理想的な国家理論を発明しているのかなど気にすることもなく自分の人生を生き、そして、霊媒もそうですが、あらゆる種類の顕現を周囲の世界にばらまき散らしています。夢を見る人も夢遊病者も、精神的なものの存在についてのほんのわずかな疑いを持つこともなく現代の世界を生きているのです。

物質から精神に、そして精神から物質に導く橋を再び見いだすことが本質的なことであり、私たちはまず芸術の分野においてこの橋を見だし、もはや半意識的な状態で躓きながらさまようのではなく、普通とは異なる種類の精神運動を通して芸術に対する感覚を発達させなければなりません。ですから、オイリュトミーはその真の内的な源泉を秘儀への参入の中に有しており、私たちが言語造形という芸術において実践するあらゆるものはその同じ源泉から生じてくるのです。そして、予定されている舞台芸術のコースがドルナッハで催されるとき、私たちは舞台芸術の精神的なイメージを再び回復するように努めることになるでしょう。長い間、どうすれば俳優を舞台の上で最大限の現実性をもって提示することができるかに注意が払われてきました。このテーマに関する90年代の議論は全く漫画的なものでした。シラーの登場人物たちがその英雄的なせりふを演説調に話すとき - 結局、当時は自然主義が勝ちを収めたのですが - 、彼らの手をズボンのポケットに入れておくべきかどうかという問題について - と申しますのも、それが現代的なファッションであったからですが - 議論されたのです。ですから、精神世界を探求するための正しい道を見いだす、ということについては色々な理屈がありますが、芸術の道にしたがうというのは健全な基本方針です。

最も重要なのは、月の秘儀とそれに関連するあらゆるものに浸された古代の秘儀参入の学を超越し、秘儀参入者の隠された認識を実り多いものにするために自然科学の成果 - この文脈では自然科学による知的な征服に言及しているのですが - を使うことができるときにだけ達成することができるところのあの魂の内的な状態を発達させる、ということなのです。他方、同様に重要なのは、夢遊病者あるいは霊媒がトラ

ンス状態で元素存在に取りつかれるとき、エクトプラズムの形態の中で何が起きているのかを確かめるために行われる生半可で混乱した実験を特別な探求の場にする、ということです。と申しますのも、これらふたつの道は本当は同一のもの、つまり、夢から意識的な夢への出現であり、自然科学がその鉱物的な側面においてのみ知っているところの外的な世界の意識的な理解であるからです - あのいわゆる心霊研究が提案するのはそのやり方による生半可な探求です。科学の時代に生きている私たちにとって重要なのは、精神的な探求において、この道を追求め、夢の世界の対極にある別の世界を精神的に探求するということです。

夢遊病者や霊媒は私たちが生じさせるのは通常の生活においては見られない現象です。彼の筆記や動き、会話や味覚は普通の人間のものではありません。それは、彼のアストラル体と自我が肉体とエーテル体の外にあり、私たちが扱っているのは、打ち捨てられ、宇宙の影響下に置かれた肉体とエーテル体である、ということによります。私たちは、自然の通常の働きを反映した物理的、エーテル的なものの顕現ではなく、精神的な世界から進み出てくるものに直面することになります。と申しますのも、結局のところ、私たちが霊媒に指示を出しているかどうか、あるいは、霊媒が何らかの星座、天候、あるいは金属の影響を彼のエーテル体の中に取り入れ、その影響下にあるかどうか、ということは問題ではないからです。

私たちは霊媒の乗り物が魔術的な目的のために精神的なものの用に供されているのだということを心に留めておかなければなりません。心霊研究協会は外的な実験によって探求しようとするかも知れませんが、精神的なものに関する知識なしにこれらの顕現を研究することは私たちにはできません。それらの精神的な関連が調べられなければならないのです。私たちは霊媒や夢遊病者が生じさせる現象とその背後にある精神的な基礎を観察しなければなりません。

霊媒や夢遊病者を通して示されるこれらすべての現象は他の霊媒的な現象とも関連しています。霊媒がトランス状態において、人間あるいは宇宙的な影響の下で何らかの行為を行うとき、つまり、肉体やエーテル体は何らかの行為を遂行するとき、それは人間を病気にさせる毒のある植物の中で生じている過程と一時的に、とはいえ、それは別の要素によって決定されているのですが、同様のものとなっているのです。霊媒的なあるいは夢遊病の状態の中で示されるのは単に外的かつ一時的な病気の仮面に過ぎません。ある観点から言えば - これについては次の講義でもっと詳細に議論する予定ですが - 私たちが霊媒や夢遊病の現象の中に見ることができるのは（別に必ずしもそうする必要はないのですが、それはいつでも可能なことです）病気の人の中で生じていることなのですが、それは、その人の自我とアストラル体は何らかの異常な仕方である器官から、あるいはその有機体全体から立ち去り、別の精神的な影響によって置き換えられている、ということによるのです。

太古の時代においては、人間はこの関連に気づいていたので、秘儀はいつでも治療と関連していたのです。そして、人々は今日ほど詮索好きではなかったために、霊媒や夢遊病者に興味を示す必要性を全く感じませんでした。と申しますのも、彼らの行いは病気の状態と同じく彼らにとってはよく知られたものだったからです。これらのできごとには医学的な観点からのアプローチがなされましたが、これは私たちが再び獲得しなければならない立場なのです。

そして、自然現象を通して、自然科学を通して、生半可なやり方で精神的なものにアプローチするもうひとつの道も正しい仕方では追求されなければなりません。すべての現象は、特に人間や動物の病理的な状態を通して表現されるあらゆるものは正しい見通しの下に再び見直されなければならないのです。私たちは、そのときはじめて、心霊研究のための協会が探求することを欲するであろうような現象を調べることができる位置に立つでしょう。

そして今、この研究分野は人智学協会によって開かれました。病理的な現象の研究に際して、それを通して精神世界への扉が開かれるというような仕方で行うことが可能になったのです。これが可能になったのは、イタ・ベークマン博士と私がこの研究分野を、心霊研究からは無視されてきた正しい道筋に沿って発達させるように努力してきたからであり、イタ・ベークマンが、有能な医者としての知識だけではなく、医療上の所見から精神的な洞察へ、そしてそこから真の治療へと直接導くあの先験的な治療の才能を有していたからです。

ですから、ここに横たわっているのは私が示した領域を探求するために従わなければならない道です。私たちは、自らの努力によって、それ自体が秘儀に参入する自然科学であるところの真正な秘儀の医療を発達させることを望んでいるのです。こうして多くの偽りの道とははっきりと区別される真の道がすべて

の人に示されることとなります。そして、ベークマン博士と私が書いた本の最初の巻によって、踏み出されるべき最初の一步が示されるでしょう。

この関連で、指摘しておいた方がよいと考えられるのは、真の道と偽りの道との違いは例を上げることによって最もよく示されるということです。

私は以前、精神の領域を再び自然科学の領域に結びつけるところの芸術への道が見いだされなければならない、ということを書きました。私が今付け加えなければならないのは、自然現象についての探求と関係のある正しい道、すなわち精神科学の道を最初に探求してはじめて芸術に向かう正しい道を見いだすことができる、というのは現代文明のおかれた状況から本質的なことであるということです。と申しますのも、人類は特に病理現象の発生の中に見られる精神的なものの活動を確信できてはじめて、つまり、いかに精神が物質の中で作用し、自らを現すかについてははっきりとした証拠があるときはじめて、芸術の中には精神が活発に浸透しているのだ、ということに納得するのですが、今日、芸術の分野においては、人類は私がお話しした橋を架けるのとはそれほどまでに遠いところにいるからです。人類が、精神を直接世界に提示することができるのは芸術作品の形によってであるという考えに対する心からの熱情を十分にかき立てることが可能になるのは、恐らく、自然界における精神の活動に気づくようになるときでしょう。

明日はこれらのことらについてもう少しお話しするつもりです。

(訳注)

この講義は、一読してそれほど重要ではないという印象を受ける方もおられるかも知れませんが、鉱物や植物の精神が動物や人間の精神よりもより高次の領域にあるように、自然科学の精神はいわゆる精神科学の精神よりもより高次の領域にある、ということを示唆しているように思われる点で興味深いものがあります。自然科学が存在していなかった古代には、低次の精神的な領域に昇ることは比較的容易であった反面、それ以上の上昇が不可能であった理由がよく分かります。知的な人間は超感覚的な認識を獲得するのが難しい代わりに、もし獲得できればより高次の認識段階に昇ることができる可能性がある、極悪人が改心すれば善人よりもより聖なる存在になる（この逆の例がアーリマン）可能性がある、というようなことも考えさせられます。